

---

# bleachにオリ主を無理やり入れてみた

マチュピチュ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

bleachにオリ主を無理やり入れてみた

### 【コード】

N0884U

### 【作者名】

マチユピチュ

### 【あらすじ】

オリ主が死神の世界に。ありふれた転生系最強主人公の話。

## 第一話 その男、勝てず（前書き）

とあるブリーチの二次創作を読んで色々と漁ってみたが、残念ながらリリカルとかネギまとかと比べて数が少なかったなので自分で書いてみることに。B.L. 及び原作キャラのカップリングは存在しませんが（変更有るかもしれない）、ヒロインは卯ノ花隊長。要素は今の所予定しているのが最強、チート、オリジナル斬魄刀、キャラ崩壊、若しかしたらハーレム、後は話の進み具合次第。最低系になるかもしれないから、そう言うのが駄目な人はブラウザの戻るボタンを押すことをお勧めします。完全に作者の自己満足小説で書いているので、卯ノ花隊長はそんなキャラじゃないとか異論がある人は読まないことをお勧めする。隊長は俺の嫁 あ、違った、オリ主の嫁。これは絶対に譲らない。

というのが改訂前の前書きに書いていたこと。あまり変わらないけど、変更点を一つというか注意事項を追加。話数は短めで、内容は薄っぺらくなる予定。というのも、この主人公を早いところリリカルに行かせようとした前の小説で、読者にブリーチ編を終わらせることを望まれたため。

## 第一話 その男、勝てず

「ラアアアアアアア！」

大声を上げながら男が木刀を荒々しく振う。

年のころは二十前後、肩まであるボサボサの髪に、がっしりとした筋肉に覆われた身体からは凄まじいまでの気迫が発せられている。纏う服は着物と呼ばれるそれ。

流魂街出身の彼が来ているその服は当然のように貰いものであり、いくらかボロボロに破れてしまっている。

荒々しい縫い目は何度もそれが補修されていることを如実に示していて、違う色の布を使って当て布もされている。

200と数十センチはあるつかという巨体から繰り出される剣戟はまさに圧巻と言うほかない。

轟という空気が切れる音が鈍重に響き渡るかのごとく、その剣戟は重く、そして力強かった。

「ハッ！」

対して、その男と戦っている女性は落ち着いた容姿で髪も長く、量が多いそれは前で三つ網のように結ばれている。

年のころは同じく二十前後、細い身体とは相反して、刀剣の様な鋭い気迫が発せられている。

纏う服は男と同じく着物と呼ばれるそれ。

ただし彼女の服は、男とは違って綺麗なものであった。

当て布などされておらず、縫い目も性格そのもの、真っ白な大部分にところどころ刺繍まで施されたそれには貴族の印まで入っている。

ヒュッ、という風の切れる音は彼女の剣戟から生まれる音。

それは全てのものを断ちきってしまうような鋭さを備えていて、同時に男の攻撃を防御しても木刀が弾かれないほどに手首を上手く使っていないでいた。

200センチ以上の長身の男に対して、彼女の方は160までギリギリ届かないほどの身長。

その二人が切り結んでいる姿は、どう見ても男が有利に思えたが、しかし続いているその戦いは次第に戦況が彼女の方に傾いていることを誰もが理解できた。

「ツアアア！」

「フツ！」

始まってからすでに数十分と続いているその勝負は、まだ一本目も終わっていない。

三本勝負が始まったというのに未だに一本目も終わっていないという事が、二人の力量がまさしく拮抗と呼ぶにふさわしい事を明らかにしている。

男が全力で木刀を打ち込んでいくたび、彼女はそれに対して手首を柔らかく曲げることで力の方向を自分の横に逸らして、即座に反撃する。

それが長く続いていて、すでに二人とも体力は底をつき始めていた。

お互いに同じような実力であるからこそその、長く続く試合。

三十分も極限まで集中していたのだから、体力の消耗は激しい。

特にそれは男の方に顕著にみられる兆候であり、だからこそ長きにわたって拮抗していた互いの状況が、少しずつ女性の方に天秤を傾けつつあった。

「ハア……ハア……」

「フウ……」

お互いに示し合わせたかのように離れてから一呼吸おいて、木刀を握る力が強くなる。

両者ともに正眼に構えて、剣の先からは威圧するように気迫が飛んでいるかのように観戦している者には見えた。

数秒間はそうして動かないままでいて、やがて男の顔を伝っていた汗が顎から床に落ちると、二人は同時に床を蹴って前進する速度に変えて、互いに鋭い突きを放つ。

「……」

「……」

お互いの身体が接触したまま固まる様にして動かず、誰かが唾を呑んだ音が道場に響いた。

「一本！ 卯ノ花！」

わぁ！ という歓声が上がリ、何人かの女性が彼女のもとに駆け寄る。

同時に二人とも重心をお互いに預けていた状態から身体を離し、お互いの視線を再び合わせた。

勝った女性の方はニツコリと満面の笑みを。

負けた男の方は唇を噛むようにして悔しげな顔を、それぞれ相手にさらず。

そのまま審判の男性の声が道場に響いてからお互いに礼をして、時間の関係上そこで試合は終了になった。

「……顔洗ってきます」

男は一人だけ壮年であつた男性にそう告げてから道場を後にする。大きな身体ゆえに体重も重く、彼が廊下を歩くたびに床が軋んで音を立てた。

手には置き忘れてきた木刀がそのまま握られていて、時折柱に当たる。

それを厭わずに彼は道場の裏手に置いてある井戸の所まで行き、そこで漸く木刀を持ってきたことに気付いてしかし今さら戻る訳にもいかず、壁に立てかけてから水を汲んだ。

そのまま頭を差し出すように首をまげて、水をかける。

「……」

女性が好む男の顔は二種類ある。

繊細か、精悍か。

男の顔は誰が見ても後者であつた。

多くの女性を虜にしているその顔には、今は閉じられているギリと鋭い眼光の瞳。

黒い髪に、黒い目。

漆黒のそれらが、彼の精悍さをさらに色濃くしていた。

目を閉じながら彼が思うのは、先ほどの試合の最後の一瞬。

お互いに同じタイミングで踏み切つて、鏡に向かつて突いたかのように同じ動作だつた。

切つ先は二人の間ですれ違つて、そして先に身体にその先が到達したのは彼女の方。

切つ先が合わさつた一瞬、そのコンマ一秒ほどの一瞬の時に彼女は木刀を下に入れる判断をして、そのまま突きを上方向に押し上げ

た。

それが原因となつてまっすぐ進んでいた彼の突きはわずかに軌道を上に逸らされて、ただでさえ彼よりも小さい彼女に放った突きは肩の上を突き抜けた。

それと反対に、彼の力に押された彼女の突きは彼の左胸に当たり、滑るようにして脇へと逸らされた。

どちらが勝つたかなど陽の目を見るよりも明らか。

実際に審判もそうやって判断したのだから。

「クソッ！ もう一回だ！」

彼は立てかけていた木刀を手にして、髪の水気を頭を振ることでどうにか飛ばしてから再び道場に戻る。

今度は取る、という思いを漲らせたその背中は、大きい身体もあってか何かが見えるような気がした。



## 第一話 その男、勝てず（後書き）

早くリリカルが書きたい今日この頃。

さあ、さつさとブリーチ編を終わらせてみよう。

そう言えば前の奴では誤字の指摘がなかったのでそのまま転用中。  
有ったら報告を所存。

あと、感想も。

ちなみに改訂版のこれ、今日の所は前に投稿した奴から＋一話の予定。

## 第二話 その男、双極の丘で

男 伊吹一土は双極の丘と呼ばれる場所で服が汚れることも厭わずに大の字で空を仰ぎ見ていた。

雲が悠々と流れ、どこまでも高い空が届きそうで届かないそれは自分の小ささを感じさせてくれる。

ここ、尸魂界においても比肩する者が居ないほどに大きな一土は今、その悠然たる空を見上げながら視界をぼやけさせていた。

視力が悪いという訳ではない。

一土の黒い瞳の中に水滴が溜まっていることが原因だった。

時は戻って半刻前。

二本目の勝負が始まってから一本目ほどの時間をかけずに二本目も連取されてしまい、結果として始めは負けてそこから逃げるようにしてこの場所へと来ていた。

瀨霊廷の中でも一番空に近いこの場所は、貴族ではない人間が立ち入ることを許されている場所であった。

流魂街で元々暮らしていた一土は、瀨霊廷の中でも入ってはいけない場所が多々ある。

そんな中で双極の丘は、罪人の処刑に使われる場所とはいえ、少しは心安らぐ場所であった。

ポタリ、と無情にも重力に従った水滴は瞳の端から顔を伝って地面に流れ落ちる。

未だに視界はぼやけたままであり、一土はその涙を拭こうとはしない。

死神となつてから十年。

その巨体から繰り出される攻撃を受け止めることのできる者などいなかったし、そのスピードについてこれる者もいなかった。

ただ二人、山本元柳斎と卯ノ花烈を除けば。

山本隊長にも負け続けるつもりは毛頭なく、いつかはその背中を追いこすべく修行に身を入れていたはずだが、しかし未だに烈の背中にも追いついていないことが彼に涙を流させていた。

長命の死神に年の概念など余り意味のないことだが、それでも自分より小さな、しかも女に負けるといふ事が許せなかった。

初めてその強さに魅せられてから同じ強さを手に入れたくて死神になり、しかし十年経った今でもその背中に届くことはない。

「やはり此処でしたか」

「……何か用かよ」

「いえ。強いて言うならば様子を見るに」

烈はそう告げてから一士があおむけに寝ているすぐ隣に腰をおろし、自身の斬魄刀を横に置く。

二人ともに同じ六番隊に所属していて、その隊長は尸魂界の歴史上で最も才にあふれ、強いと言われている山本元柳斎。

先ほどその隊長の立ち合いにもとに勝負を繰り広げていたところであった。

結果はいつものように、一士の負けという事で決着がついたが。

一士は隣に座る、この女性の剣に魅了されて護廷十三隊に入隊した。

並はずれた膂力から繰り出される剣戟はあっという間に彼を席官の座に押し上げて、しかし死神となつてから十年経つても未だにその先に進めないでいた。

死神最強との呼び声も高く、次の護廷十三隊総隊長の座が確実に言われている、六番隊隊長、山本元柳斎。

上流貴族の出身ながら六番隊副隊長を務め、並はずれた靈力を持つ卯ノ花烈。

その二人には、未だに勝てないままであった。

「嘲笑いにも来たのか。俺は今、あんたに負けてイライラしてるんだ。何するか分からんぞ」

「私に襲い掛かりでもしますか？」

「かもな」

「そうですね」

一士が少しだけ靈圧を出しても、烈は動じるどころか身動きのことも取らない。

漸くぼやけていた視界が明瞭になってきたところで視線を横に移せば、烈は楽しそうに微笑んで視線を返してくる。

それに居た堪れなくなつて視線をそらし、そのまま顔を反対の方へと向けて右の腹を下にする。

初めて見た時は黒い死覇装に身を包み、大きく曲がった特徴的な刀で虚を切つているところであった。

何匹もの虚と戦うその姿はまるで舞を舞っているかのようで、全くの揺らぎが無く、それでいて鋭い剣筋。

無駄な動きなど一切なく、虚が刀に吸い込まれていくかのようにな斬られては消えていく。

一士は一目にして烈に魅かれてしまった。

当時は今ののように眉目秀麗な女性と呼ぶにはまだ少女の背丈と顔立ちであり、髪もそこまでは長くなかった。

同じように一士も今のように背は高くなく、むしろ烈よりも小さ

かつたくらいだ。

流魂街で暮らしていてその時に初めて死神という存在を知り、自分も彼女のようになりたいと願った。

生まれ持つての霊力は幸いなことに高く、死神の中でも破格と呼べるほどの霊力を備えていたために貴族でなかったにしろ何とか死神になることが出来て、必死で修行を積んだ。

何度も何度も剣を振るい、進んで実戦に出ては剣の腕を上げていった。

それでも、自分が強くなるたびに彼女との距離を否応なく実感させられて、彼女に挑むたびにそれを現実にされた。

何度、死神を辞めたいと思ったかはもう数え切れないほどだ。

流魂街の出身というだけでまるで汚物を見るかのような視線にさらされているというのに、未だに目標としている人物の隣に立つことができないのだから。

「あんたは……何で俺の言葉使いを注意しない」

「そうして欲しいのですか？」

「俺は汚い流魂街、あんたは貴族の出身。他の死神で貴族じゃない奴はいないからな。そんなことは日常茶飯事だ。尤もそう言う奴らには実力で黙らせてやってるけどな」

おい、そのの、掃除しとけ。

汚い服でうるちよろすんな。

全くこんな奴が護廷隊に入隊する日が来るとは。

何度も何度も、そう言う言葉を聞いてきた。

服が汚いのはしょうがない。

貴族とは違って服を買おうような金など持っていないし、ましてや流魂街の出身の一士に服を売ってくれるような店は瀟靈廷には無い。それを見かねた山本隊長が自分のお古の着物をくれて、以来それをずっと着用している。

普段は死覇装があるが、死神として任務が無い時はその服を着るから、ずっと修繕をして着続けているのだ。

今では自分の身長に全く合わなくなってしまっているが、それでも何とか拾った布を繋いだりして頑張っていた。

そういう侮蔑の言葉を聞き流して何とか斬魄刀の解放に成功して席官にまで上り詰め、やっとの思いで第三席にまで辿り着くことが出来た。

初めて席官になった時は服を買わずにためた金を賄賂に使ったと言われ。

少しずつ席次が上がっていくごとにやつかみも多くなった。

それでも実力を上げて前線で働き続け、やっとの思いで六番隊において第三席にまで昇進することが出来た。

歴代最強の呼び声高い六番隊の中で三番目の実力を手にしてからはそんな声も無くなってきて、人通りの少ない道を選ばずに歩くことができるようになった。

その身長のお陰という事もあるだろう。

「やれ貴族だ、やれ流魂街だと、本当はそのようなものが無くなれば良いのですが」

その言葉に含まれている意味が一士には分からない。

何で貴族がそんなことを言うのかと。

それも上流貴族の出身の彼女が、悲しそうにそう言うのが分からない。

いや、分からないはずはない。

本当は分かっているが、分かりたくないだけだ。

自分が目指すこの女性が、本当にそれを思っているという事を一士は良く知っている。

嫌な顔一つせずに自分の勝負を受けてくれて、他の死神達が全く教えない事務仕事や鬼道の事に付いて、斬魄刀を解放させることなど死神の事については全て彼女に習ったのだから。

上司と部下だから、という事で義務感によつて教えてくれていただけではないという事も分かっている。

誰ひとりとして教えてくれなかったことを懇切丁寧に教えてくれたのだから。

「俺に構っていると他の貴族たちからまた悪く言われるぞ」

「構いません。もとよりその様な方々と親交を深める気はありませんので」

死神になったから住まいを持てるようになるという訳ではなく、瀟霊廷内部では服さえも当初は売ってもらえなかったから、当然のように寝食をする場所など見つかるはずもなかった。

だから最初は隊舎の周りの木々で身体を休めていて、それが彼女の耳に入ってからには彼女の家に入れてもらった。

だから、卯ノ花家は流魂街の汚い者を家に招き入れると揶揄されたのだ。

それから俺が何か不利なことを被るたびに烈が後ろ盾となることで、卯ノ花家は他の貴族から悪く言われるようにもなった。

風伝いの噂では、そのせいで彼女が婚約を不意にしたとも聞いている。

だから一士はそんな自分が許せなくて、当初は彼女から距離を置

くようにしたが、しかしそれは許してもらえず、結局は自分が力を付けることで貴族を見返すという事に決めたのだ。

それでも今尚こうして一士と烈が並ぶたびに他の隊の者からは陰口をたたかれていることを知っている。

だから遣る瀬無い思いは募るばかりであった。

強くなって彼女のように剣を振りたいと願い、強くありたいと願って修練に励み。

目標とする彼女の横に立ちたいと努力した。

だけどそれは同時に自分が傍にすることで悪く言われるというせめぎ合いが発生して、傍にいたいのに傍にいたくはないという二律背反が生まれてしまう。

完全に間ばさみの状況は最早自分でもどうしようもないことであった。

「……俺はあととんだだけ修行したらあんたに届く？」

「私に答えることのできる質問ではないですね」

風が吹き、髪が靡く。

少しだけ強い風は色々とごちゃごちゃした感情を吹き飛ばしてくれたかのようで、一士は跳ね起きるようにしてしっかりと二本足で立つ。

踏みしめた地面の感触はしっかりと伝わってきて、ちゃんと気持ちの整理が付いたと感じた。

だから、一士はもう一度だけ雄大な空を見上げてからそれを刻むように瞳を閉じる。

「もう一回、勝負してくれるか」



「ええ、何度でも」

### 第三話 その男、解放する

「ハアアアアアア！」

雄叫びを上げるようにしながら構えた刀を横一線に薙ぐ。

霊子の詰まった斬魄刀による鋭い一閃は刀で触れていない部分をも切り裂き、並んでいた虚は一瞬にして数十という数が消えた。

刀を振った衝撃によって風が巻き起こり、あたり一面を覆っていた砂が舞い上がる。

空は黒く、あたりには数千や数億という数では数え切れないほどの虚。

そこはウエコムンドと呼ばれる尸魂界とは異なる場所であった。

その外れ、先ほどから虚の囲まれながらひたすらにその数を減らしている死神が一人。

鋭い眼光は鷹のそれを思わせ、身体から発されている気迫は並々ならぬものであった。

伊吹一土。

尸魂界において流魂街出身者で初の死神であり、その並々ならぬ努力によってついに隊長にまで昇進した男である。

六番隊隊長、山本元柳斎は一番隊隊長に昇進して護廷十三隊の総隊長に、副隊長、卯ノ花烈は同時に四番隊隊長に昇進、そして第三席の伊吹一土は六番隊の隊長に昇進することと相成った。

護廷十三隊の代替わりとでも言えば良いのか、隊長、副隊長と数年で一気に様変わりし、ついに流魂街の出身者からも隊長格が出ることになり、貴族だけが通う事を許された死神を育成するための学校、死神統学院はついに流魂街の出身者も通えるようになった。

元は山本総隊長が設立した学院であったが、彼の部下だった一土が隊長に昇進したことで流魂街にも優秀な人材が埋もれているとい

う事が証明され、中央四十六室の命によりそれが可能となったのである。

そして死神だけではなく、新たに鬼道衆、隠密機動と言ったものを創設してそれらのものを育成するために統学院は真央霊術院と名前を変えることになり、まさに尸魂界は風貌を様変わりさせているところだった。

そして尸魂界を一転させることになった一士は、今ウエコムンドに来ていた。

六番隊に与えられた任務はこの虚圏に赴いて色々と虚についての研究を進めること。

当然、虚圏には最下級大虚だけではなく、確認されているところの中級大虚、そして数は少ないながらも最上級大虚が居るとされているために危険な場所であり、この場所に来ているのは隊長格だけだ。

「そうであつたらどれだけ良かったことか……」

愚痴をこぼしながら、一士は虚を斬っていく。

この虚圏に一士が来たのは何も六番隊に与えられた任務の為という訳ではない。

そもそも、尸魂界では虚圏に行く方法が確立されている訳ではないし、その存在も文献によって知識としてあるだけだ。

メノスグランデがどこからか現世に姿を現し、戻るといふ事はつまり戻る場所があるという事で、そこをそうやって名付けたのだから。

メノスの中でも最上級は中級のそれは王族特務が相手をするような奴だったと知識としては一士も知っていたが、実際に戦うのは初めてであった。

最上級大虚に至っては死神の様な姿をしていて、斬魄刀まで有している。

それには驚きが隠せなかったが、しかし驚いているばかりでは命を落とすことになりかねないので、一士はここ数年ほどは戦い続ける毎日だった。

任務の為に現世に赴こうと穿界門をくぐって抜けた先が現世ではなくこの虚圏だと気付いた時にはどうしたものかと思いついたが、どうせ考えたところで答えが出るはずもなく、そして大量の虚に襲われていたからその対処で忙しかったのだ。

虚圏に来てからすでに五年。

その間に最上級大虚と出会って戦い、かなりの傷を負いながらもどうにか撃退することは出来た。

中級大虚までならどうにか倒すことも出来るのだが、しかし一つランクが上になるとそうもいかない。

とはいえ、一士もこの状況を素直に受け入れて実に楽しんでいると言える。

これも自分に与えられた試練だと割り切り、自ら修行しているのだから。

お陰で、それなりに強くはなったと言えるだろう。

尸魂界に比べると大気中の霊子濃度がかなり高いから、こちらの方が力が強くなっているとは言え、五年間も戦い続けて、しかもその戦闘の中には命がけで戦ったのがほとんどであったから嫌でも強くなる。

隊長格という事もあってか、弱い虚は近付いてこずに、その八割以上が大虚なのだから。

「万物悉く水面に沈め 天水」

一士が解号を唱えると、彼の身長に対しては短めだった斬魄刀が

長く変化し、刀身は水に覆われる。

彼の身長に比べて遜色ないその斬魄刀は始解にして超絶足る霊圧を備え、刀身から滴る水は地面にぼたぼたと落ちていく。

その刀を振るたびに水があふれ出し、周囲には水気が満ちていく。

「……………やっぱり駄目か」

一振りして刀から水を放出させて、しかし操らずに周囲に水気を満ちさせようと自由落下させたそれは虚圏の砂にしみ込んで下へと消えていく。

流水系最強の斬魄刀とも言われる天水は、本来であれば解放の瞬間に基本能力の一つである天相從臨によって雨を降らせるはずだが、虚圏ではそれは不可能だったようだ。

これが現世や尸魂界であればいとも簡単に雨が降ってくれて、操ることのできる水量が時間が増すごとに増えるのだろうか、愚痴を言っただけでも仕方ないこと。

山本総隊長の持つ炎熱系最強の斬魄刀、流刃若火は最古の斬魄刀であり全斬魄刀中最高と言われるほどの高い攻撃力を発揮することが知られているが、それに対して一士の持つ天水は流水系最強の斬魄刀にして、総隊長の流刃若火に唯一対抗できる斬魄刀。

それは単純に水が火に強いという事に起因しているだけではなく、天相從臨の基本能力によって時間が経つごとに有利な状況が生まれ、そして全斬魄刀中最優と言われるほどに使い勝手が良いからだ。

空から降る雨は敵の攻撃から身を守る水となり、刀から出る水は自在に操る攻撃となる。

ただ、総隊長の斬魄刀に対して相性が良いというだけであり、それによって全ての斬魄刀の中で最も強いという事ではない。

氷雪系の斬魄刀にしてみれば天水の能力は相手に武器となる水を増やしてしまうだけだし、天水は氷を水に戻すようなことはできない

い。

それは雨を降らせることで無限とも思えるほどに水を生成するから、氷を水に戻す必要などないためだ。

だから、空気中の水を氷に変えるような能力を持つ氷雪系の斬魄刀に対しては弱いどころの話ではない。

まさに天水が流刃若火に対して天敵であるのと同じようなものだ。

そしてその流刃若火は氷雪系の斬魄刀にとっては天敵と言える。

いくら水を凍らせることが出来ると言っても、最高の攻撃力を発揮する流刃若火の火力の前には太刀打ちすることなどできないからだ。

要するに、炎熱系、流水系、氷雪系のそれぞれの斬魄刀は三竦みにある関係だと言える。

流石に戦闘に限定するのであれば総隊長が最強であるという事に疑いはないが。

「そろそろ俺も尸魂界に帰りたいからな……この戦いは幕引きにさせてもらおう」

「さてと、ここは……現世か」

靈子濃度はやはり薄い。

虚圏に比べるとそれは当然の事であるからしようがないのだが。

虚圏から一士が出てくる方法は当然のように一番簡単な方法を取った。

いや、それしか帰る方法が無かったと言っても良い。

五年ほど虚達の真つただ中に身を置いて、漸くそこから出る方法を思いついたのだから。

話にすれば簡単なことだ。

現世や尸魂界に現れることのある虚。

つまり、虚圏からどうにかして姿を現しているという事で、一士は自らの靈圧と気配を消して、異空間への道を開く虚について行ったのだ。

隊長格ともなれば靈圧を消して気配を隠すことも出来るが、しかし完全に消すことはそう容易ではない。

少しは漏れてしまうものだし、そうなれば虚に気付かれるという事になっただろう。

しかし幸いなことに、虚圏で殺氣石を発見することが出来て、それによって靈力を完全に遮断することが出来た。

そして靈圧に関しても、直前に戦闘でほとんど消費してしまったから靈力が残りわずかな以上、靈圧もそれに比例しているから、殺氣石の効力を確かなものとする事が出来た。

勿論、たまたま現世へ移動しようとする虚を見つけられたから良かったものの、その虚を見つけられずに逆に最上級大虚にでも見つけられていたら死は確実だったろう。

普通の状態であれば戦えるにしても、わざと直前の戦闘で斬魄刀を解放してまで霊力を消耗していた状態であれば危ない。

いくら隊長格とはいえ、日頃の研鑽が無ければ万全の状態でも最上級大虚にはやられていたかもしれないと思うと、相当の綱渡りを演じている。

「だが、結果避ければ全てよし」

そう言いながら一土は刀を鞘の中に戻して、腰に差す。

カチン、と金属音がしてから斬魄刀が仕舞われるのと同時に、足元にいた虚が消滅する。

此処まで殺気石で霊圧を抑え込んでいて、さらに気配も消していたからこそその奇襲の様な一撃は虚に防ぐようなすべがあるはずもなく、簡単に消える。

霊圧の排出口である手首を覆っていた殺気石を一土は外すと、それを相変わらずボロボロの死覇装の懐に仕舞う。

が、そのままポロリと落ちてしまったので仕方なくそれを手に持つ。

本来であれば六番隊の隊長であるので死覇装の上に隊首羽織を着ていたのだが、度重なる虚の戦闘で破けてしまったためにそれは着用していない。

護廷十三隊の隊長だけが着ることを許されている白羽織は価値が高く、紛失するのは失態に値する様だが、そんなことを言っていないような状態でもなかったのだから総隊長も許してくれることだろう。

隊首羽織どころか、死覇装の上半身などすであってないような状態にまで破けてしまっているのだから。

しかしそれは、虚との戦闘がそれほどに激しかったという事を示している。



胸には斜めに深い傷が刻まれていて、腹には十字架の様に傷がある。

心臓とは対称の逆、右肩から肺のあたりにかけては円を描くような傷もある。

ギラリと鋭い眼光を放ち、精悍さにあふれていた顔には同じようにして左目を縦に切り裂くかのような傷が二本。

幸いにしてその傷は視力には関わらなかったものの、未だにその後は深く残っている。

いつものように、傷を負った直後に四番隊の回復鬼道を受けていれば傷が残らなかったかも知れなかったが、虚圏に入ることになってしまったのは一土一人だし、そもその現世に赴く任務には四番隊は付いていなかった。

そして、居たとしてもそれらの傷は全てが最上級大虚との戦闘で負ったもの。

回復するような暇などは当然なかった。

「北東の方に霊圧が固まってるな……死神か」

全てが霊子で作られている尸魂界で霊絡を視覚化させることは不可能だが、現世であれば大気中の霊気を視覚化することができる。

上位という区分けが正しいかはともかくとして、隊長格にもなれば霊絡を見たり、触れたりすることができるので、一土はそれを使って死神が割と近くにいることを感じ取った。

紅い霊絡が伸びている方向に向かって瞬歩で近づいて、どこにいるのかを視覚で探す。

が、どうにも視界に死神の姿は見えない。

「……結界か。強度の甘さから言って席次を持っている者のそれでもない。という事はこの地区の担当死神か或いは院生の授業か？

まあ、どっちにしても壊して問題はないだろう。……む？」

素手で結界に触れてからそれを壊そうと力を込めようとした直前で、ガラスが割れるように結界が壊れる。

一士が壊したのではない。

力が増したことで加減を見極められなくなっているのではないかと一士は一瞬だけ考えたが、しかしどうやって理屈をつけようとしても霊圧を手に込める前に結界が壊れる訳はない。

それはつまり、中で結界を張っていた者が維持できなくなったという事を意味している。

「ヒュージ・ホロウか。此処まで接近に気付けなかったとは」

そこまで言葉にしてから、一士は改めて手にしていた殺気石の存在を思い出す。

良く考えれば、その殺気石のせいだ。

ふつうは此処までの距離であれば死神が近くにいることにすら霊絡を使わずとも気付けるはずだが、しかし霊絡を使わなければ分らなかったという事は完全に霊力が遮断されてしまっていたから。

だから、ホロウの接近にも気付くことが出来なかったのだろう。

そして結界が壊れたのは、明らかにこのホロウが壊すほどの威力の攻撃をぶつけたからなのだろう。

あれだけ構成の甘い結界であればヒュージ・ホロウの襲撃を受ければ壊れもする。

「これも真央霊術院の授業……って訳じゃないよな」

遠くの方ですでにこと切れそうになっている血まみれの死神を見ながら呟く。

どうやら結界を見張っていた者の中には護廷十三隊に所属する死神もいたようだ。

死覇装を着用しているから間違いないだろう。

結界の外で見張っていたのかも知れないが、あのヒュージ・ホロウにやられたと理解するべきだ。

そして状況を整理していたところでさらに空間が歪み、多くのヒュージ・ホロウに加えてメノスまでもが出現する。

今度は殺気石をすでに捨ててきたから気付くことが出来て、そしてそのメノスが口に霊圧をためて、虚閃を院生が集まっている場所に放とうとしていた瞬間に瞬歩を使って間に割り込む。

「縛道の六十一 断空」

瞬歩はどうか間に合い、メノスと院生たちとの間に一士は割り込んだ瞬間に防御壁を作り出してメノスの虚閃を完全に防ぐ。

虚閃が当たって命を落とすと思っていた院生たちは何時まで経っても衝撃のこないことに目を開くと、そこに大男が立ちふさがって手をかざしていたことによく気付く。

上半身は穴だらけになっている死覇装に、腰には今にも落ちそうなように差されている斬魄刀。

そしてその身体から無意識のうちに漏れている霊圧は、まさしく死神の中でも上位と呼ぶにふさわしいほどの力量を備えているそれであった。

「統学　　じゃなかったか。霊術院の院生だな？　責任者は？」

「……あ、はい。自分であります！」

「そうか。名は」

「浮竹十四郎であります！」

一士の問いかけに答えたのは白髪のショートヘアの男子。

背はそれなりに高く、感じられる霊圧もなるほど、この中では責任者というだけあってそれなりに高い。

二刀一対の斬魄刀を手にしているが、おそらくは彼の斬魄刀なのだろうと一士は予想を付ける。

二刀一対、見るのは初めてであったが、まさか本当にそのような斬魄刀があるとは。

そこまで一士と浮竹が会話をしてから、虚閃を完全に防いだ断空がパリンと音を立てて割れる。

その向こうではメノスが自らの存在を誇示するように、そして突如として現れた死神に対して威圧するように大声を上げる。

「では浮竹君。まずは尸魂界に連絡を取って、四番隊の隊長に救援の要請を求めてくれ。それから地獄蝶を一匹だけ余分に連れてくるように」

「り、了解しました！」

地獄蝶がいなければ斬魄刀で穿界門を開いても、また断界に入っ  
て虚圏に逆戻りをしてしまうかもしれない。

それだけは避けたいところだったし、地獄蝶があればその心配も  
いらない。

そして四番隊の隊長に救援を求めるのは、負傷者が居るとい  
う事と、ひとまずは得体の知れない人物であろう一士を良く知っている  
烈が隊長であるはずだからだ。

五年という月日が経っていようと、彼女ならばそう簡単に隊長  
職から退くようなことはないだろう。

昇進はあるかもしれないが。

「う、後ろが!!」

「また虚閃か。相変わらず芸のない奴だ。雷吼炮!」

女子の院生の言葉に振り返ると、一士は先ほどのメノスがまたもや霊圧をためていたのを見て、無詠唱で破道を放つ。

雷を帯びた爆砲は轟音を放ちながら虚閃と相撃ちして、その両方が空中でぶつかることで激しい爆発が起こる。

「破道の六十番台でも虚閃と同じ威力か……仕方ない」

そう言うってから一士はスラリと腰に差していた斬魄刀を抜き放つ。それは霞仕上げの様に月の光にあたって輝き、濡れているかのようになんか光を放つ。

いや、まるで濡れているかのように、というのは正しくない。実際に少しだけ、漏れ出した霊圧によって天水は濡れていた。

解放している訳でもないのに水を生み出すのは、流石に流水系最強と言われている斬魄刀だけの事はある。

「……フッ!」

一瞬の脱力の後、一士は斬魄刀を左から右に振りぬいて、左手を離すと鞘にそれを添えて、再び戻す。

振りぬいた斬魄刀を目で終えた院生がいったい何人いただろうか。彼らのうちのほとんどは、一士が斬魄刀を抜き放って、それを仕舞ったようにしか見えなかつただろう。

それほどの剣速で放たれた斬撃は一瞬にして、数十いた虚を斬った。

「さて、浮竹君。早いところ尸魂界と連絡を取ってくれ」

「あ、はい」

呆けていた白髪の少年を促して手にしていた機械で連絡を取らせ  
てから、一土は倒れている者の所に瞬歩で移動する。

傷は深いが、四番隊が間に合えば何とか命をつなぐことも出来る  
だろう。

だが、間に合うかという事は予想もつかない。

それに高度な技術が必要とされる回復鬼道は院生に出来るような  
ものでもないだろうから、応急処置という事も望めない。

一土にしたところで、回復鬼道などセンスの欠片も感じられなか  
ったことだから修練に励んだことはない。

自分が無理をして怪我をしたところで、大抵は卯ノ花に治しても  
らうだけだったのだから。

「仕方ない。天水」

だが、だからと言って何もしない訳ではない。

一土は天水を解放すると、傷を負っている者たちを水で包み込む。  
現世であるので雨を降らせることも出来るが、それは全く不必要。  
今は命を狙ってくるような敵もないことだ。

だから、天水から出した水で怪我をした者たちを包んでから、そ  
の水に一土は靈力を注ぎ込む。

流水系最強にして、全斬魄刀中最優の斬魄刀は、傷をいやすこと  
も出来る。

最優と言われているだけあって色々なことをこなすことが出来る  
が、それらの能力を扱えるようになったのは一土の鍛錬が実を結ん  
だからだろう。

「とりあえず応急処置はこんなところか。後は四番隊の到着を待つ

だけ  
」

### 第三話 その男、解放する（後書き）

文字数にばらつきが有るのは仕様。

切れるところで切ってるから。

最低でも三千字以上が目標。

もっと増やせ、と言っなら聞かないこともあつたり無かつたり。



## 第四話 卯ノ花烈

穿界門が開き、護廷十三隊四番隊の隊士たちが現世に姿を現す。所属隊員の平均戦闘能力は他隊に比べて低いものの、隊士たちは他の隊とは違って靈力を治癒能力に変えることができる。

そして、隊長卯ノ花烈に関しては護廷十三隊の隊長たちの中では総隊長を除いて間違いなく二位につけるほどの実力だろう。

靈圧は言うに及ばず、鬼道、剣技、そしてそれらを使う知力、その全てにおいて極めていると言っても過言ではない。

その彼女が現世に姿を現したのは靈術院の院生から演習中に虚の襲撃を受けて、負傷者が多数いるという報告を受けたから。

六番隊に副隊長として在籍していた経歴のある彼女であれば、他の隊長を遣わさずとも虚、負傷者ともに対処できるとい判断のもとで尸魂界からも送られてきたが、しかし彼女が現世において見たのは、院生が集まっている真ん中ですでに応急処置が済んでいた負傷者達と、そして五年前に姿を消したはずの男。

「……はじ、め」

目を見開いて彼女はその様子を注視する。

体に傷が刻まれ、風貌は変わっており、隊首羽織はおろか、死覇装魔でも着用していないが、間違いなくその姿は五年間一度たりとも思わない日はなかった男の姿そのもの。

肌を感じる靈圧は懐かしさすらあり、感覚は少しだけ違ったものになっているが、それでも同じものだと断言できる。

その姿を見つけようと、幾度瀟靈廷の外に出かけては靈圧の痕跡が残っていないか調査を行ったことか。

毎週同じ曜日に勝負を吹っ掛けてくるその姿を幾度待ち続けたことか。

知らず知らず、その姿を漸く見られただけで涙がこぼれそうになり、しかし卯ノ花は隊士の言葉で我に帰る。

「あの、卯ノ花隊長？」

「……清之介、班を振り分けて処置を引き継ぎなさい。私は彼と話があります」

「はい」

一目で一士の施した応急処置が応急とは最早呼べないものにまで昇華されていることを見抜き、自分の手助けは必要ないという事を判断してから卯ノ花は副隊長に指示を出す。

何人かの隊士たちを連れてきたおかげで、処置は間に合うだろう。副隊長の清之介が後ろに控えていた隊士たちに指示を飛ばし、駆け足で近付いて行く。

そこでようやく一士が四番隊の到着によって負傷者を包んでいた水を解いて、霊力を分け与えるのをやめる。

そして、その時になって漸く卯ノ花は一士と視線を合わせた。

「……」

「……」

互いにその状態でかわす言葉はなく、しかし一士は卯ノ花の方へと一歩ずつ近づいてくる。

「ごちゃごちゃとしたものが頭の中を駆け巡って混じり合い、そのせいで卯ノ花は自分が一士にあつたら言つべき言葉を考えていたことを忘れる。」

いや、そもそも考えていたかも分からない。

とにかく失踪の報告を聞いてからは探すことに必死だったのだから。

「あー……久しぶり」

久々に会って、漸く聞いた言葉がそれ。

一士の口から出てきた言葉は卯ノ花の耳に届き、その低音の聲がまさしく数年ぶりに耳にした彼の声であると分かり、再び感情が吐露してしまいそうになる。

だが、卯ノ花は断じて涙を流すようなことはしない。

唇を噛むようなこともすれば、彼に気付かれるだろう。

副隊長だった時に三席だったから、ではない。

自分と同じ隊に入隊して、その頃から世話を焼いていたから、ではない。

もっと昔から、卯ノ花は自分がその男に淡くて儂い感情を抱いていたという事を知っている。

それがどういふ感情かという事に気が付いたのは失踪という情報を得てから。

失ってから初めて卯ノ花は自分が思いもよらなかった想いを抱いていたという事を知った。

貴族の家に生まれて、線路に敷かれた道を走っていて、そんなことはないと思っていたがそれでも頭の中ではそれすらを否定していた。

恋、と呼ばれるその感情。

初めての恋で、初めてそれを失ったと思いついて、それが再び心の中に戻っていて、それでも卯ノ花は何とか笑顔を作り終えた。

「五年間……ずっと探し回りましたよ」

「あー、その、済まない」

そんなことしか言えない。

会ったら今度こそ自分の想いを伝える、と思っていたが、それでも現実になってその言葉は口にできないでいた。

姿を目の前にして、それだけで自分は安心感を抱いてしまっている。

それがまた、感情を押し上げてくる。

だが、口にはしない。

それはずっと昔、彼と初めて出会ったその時。

その時から彼が自分の剣技を見て、それがために土下座をしながら死神になり、自分に追いつこうとしてくれたことを知っているから。

流魂街の出身だと貶され、汚いものを見るように扱われ、それでもめげずに必死に自分を追いかけて来てくれたその姿を誰よりも近くで見えていたから。

だから、自分は彼が理想とする自分であり続けなければならない。

「この傷は、初めて見るものです」

「少し死闘を演じてな」

だけど、気付けば自分は彼の傷に指を這わせていた。

胸を斜めに走っているその傷を、上から下に指でなぞる。

心臓の横を通った時に、鼓動が指を通して伝わってきた。

トクン、トクンと心地よいリズムに対して、自分のそれはドクドクと早鐘を打つようにして鳴っている。

すぐ傍にいる彼に聞こえやしないかと恐恐としながらも、しかし指は意志に反して離れてくれない。

まるで名残惜しむように指の腹がくつつくさまは、理性と本能がせめぎ合っているようにも見える。

「貴方に会ったら言いたいことが、沢山あったのですが」

言葉を切るようにして、指の腹を傷跡から離す。

名残惜しむようにその指は放物線を描いて自分の方に戻ってくる。自分の指からその上方、一土の顔へと視線を送ると今度は左目の上下に縦に入っている傷跡に目が行く。

それにも手を伸ばしかけて、しかし途中で何とかその手を自分の方に引き戻すともう片方の手でそれを抑え込む。

その様は、まるで秘めたる思いに葛藤している女そのもの。

「忘れてしまいました」

「そうか。俺は一つだけある」

「何ですか？」

「尸魂界に帰ったら、また剣の勝負してくれ」

そして同じ手が彼に平手打ちを喰らわせようと動きかけて、どうにか逆の手で抑え込むことに成功する。

その様はまるで怒りを必死に抑えようとしている女そのもの。

久しぶりに会った男女が交わす会話がそれか、と説教の一つでもしてやりたい。

五十年近くも一緒にいて、一番仲の良かったと主観ではなく客観でも分かる間柄でかわす言葉がそれかと、詰問してやりたい。

五年も姿をくらませておいて、謝罪の言葉が一言だけで二言目に

は勝負とはどういう事なのか、真意を問い詰めたい。

いや、それが真意なのだという事は自分でも分かっている。

彼はそういう奴だ。

必死に強くなるうと努力して、わずか三十年にして正解までを手にして、流魂街で初めて死神になって隊長にまで昇進した男だ。

その視線の先には常に自分の姿があったという事は奢りでもなく事実。

先ほども、そうあろうと決めただけであった。

だから、卯ノ花は何とか笑顔で答える。

「分かりました。お受けしましょう」

「……何か怒ってないか？」

「怒っていませんとも。ええ、怒ってなどいませんが何か？」

「あ、いや、なんでもないです。はい」

霊術院生が先ほどのメノスよりも卯ノ花に怯えて震えていたことなど、彼女には知りえないことだった。

## 第五話 それが日常

護廷十三隊は高尚な組織である、というのが中央四十六室の言い分だ。

それゆえに、隊士本人の意思で隊を離れること　つまりは脱退が出来ないという仕組みになっていることは隠密機動の総司令官他、数名にしか知らされていないことだ。

個人の事情でやむを得ず職から離れるときは休隊、復隊の目処が立たないときは除籍という事で扱われる。

そして護廷十三隊は尸魂界の護衛及び現世における魂魄の保護、虚の退治等の任務をこなす実動部隊であり、隊士は二百人余りが所属し、部隊内階級が完全に戦闘能力のみで決められているため、単純に上位席官ほど強く、隊長及び副官は飛びぬけた強さのものが選ばれる。

それゆえに、護廷十三隊の隊長職に空白が長期にわたって生じるという事はあってはならないことだ。

だから、五年もの期間にわたって消息不明であった一土は、すでに二年前に除籍扱いとなっており、六番隊の隊長にはすでに別の死神が任命されて仕事をこなしている。

また、除籍扱いとなった死神の情報は高尚な組織であるという中央四十六室の方針ゆえに当然の様に消去されていて、一土の居場所は護廷十三隊にはない。

いくら原因不明の事象によって虚圏に行くことになり、どうにか帰ってきたところで一度除籍扱いとなったものを再び十三隊の隊士に、それも隊長職になど戻せるはずもない。

だが、一度隊長職にあつたものをそのまま引退させて放り投げるという訳にもいかず、結果として中央四十六室が選択した方法は、考えられる中で最善であり、唯一の方法だったと言えるよう。

真央霊術院の院長。

それが伊吹一士、元六番隊隊長に与えられた職務であった。彼の経歴は全て抹消されて、その上で彼が元六番隊の隊長であったという事は口外無用という事になった。

当然の様にその処置に異を唱えた者は居る訳も無く、一士は意気としてその命を受諾した。

面倒な隊長職から解放されて、名誉職と言っても良いほどの院長という役職を与えられたことはまさに天恵ともいえるような処置だった。

隊長職であれば隊の報告書をまとめることなど、事務管理が色々面倒だが、真央霊術院の院長であればそう言った職務は存在しない。

せいぜいが、霊術院を卒業する院生の書類にハンコを押すくらい。そして給金も隊長職と同じくらいに入ってくるというのだから、何も文句などあるはずがない。

元々は山本総隊長が兼任していた職務であったが、一士であれば院生の実力を見誤ることも無く、そして先の一件の様に演習中に問題が発生した時にもすぐに駆けつけることのできる隊長格という事で山本総隊長も安心して後を任せることが出来た。

「で、暇だから私の所に来た、という訳ですか」

「俺の知り合いって言ったらあんたぐらいだな。それに約束した剣の勝負もまだやってない」

はあ、とため息を深くつきながら卯ノ花は機械的に手を動かして書類を処理していく。

四番隊の処理する書類は他の隊とは比べ物にならないほどの量を誇る。

それは他の隊とは違って、四番隊が補給・治療が専門の後方支援



部隊であるために、薬品など色々と物品を扱うからそのことに書類が増えていくのだ。

卯ノ花ほどの事務処理の能力が無ければ、これだけの量を終わらせることも出来ないだろう。

だが、一土にとってはそんなことはどうでもいいとばかりに彼女の部屋に来て、第一声は勝負しろ、という事だった。

バン、と少しだけ大きな音を立ててから卯ノ花のハンコが最後の一枚に叩きつけられて、その音で書類の整理が終わるのを待っているながらお茶を飲んでいた一土は肩を一瞬だけ揺らす。

チラリと横に視線をやれば、卯ノ花の身体から何やら霊圧の様なものが迸っているようにも見える。

いや、霊圧は見えないのだが。

「良いでしょう。お相手しますとも。ええ、今すぐにも」

そこは、まさしく戦場であった。

隊長格の靈圧がぶつかることによって悲鳴を上げるように軋む床。何事かと様子を見に来た席次を持たない隊士たちが靈圧に当てられて気絶して山を築く。

道場の中では、二メートルを超える巨漢と体格が一回りどころか二周りも三回りも劣る女性が互いに竹刀を手にして打ち合っていた。

男 伊吹一士は漸くみすばらしく無くなった着物に相変わらずのボサボサな髪の毛。

筋骨隆々と言う言葉はその男の為にある、とでも言わんばかりに磨きのかかった肉体をその着物の内に秘めたまま、目の前の女性に竹刀を打ち込んでいく。

剣道には似つかわしくなく、片手で持った竹刀は、それとは思えないほどの膂力によって絶大な威力のままに女性を襲う。

一振りすれば道場が軋み、二振りすれば突風が吹き荒れる。

それは斬魄刀であろうと、竹刀であろうと、そこまでの膂力があれば変わらないことであった。

女性 卯ノ花烈は死神の証である死覇装に四の文字が背中に入った隊首羽織。

仕事の時は前に降ろす髪の毛は珍しく背中側に。

一士のように別段大きくも無いその体で完全に一士と打ち合っているのは技術によるものであることは間違いなかった。

いや、それだけではない。

彼女の靈力が膂力を底上げしているからこそ、一士と互角に打ち合えることができるのだ。

鋭いその気迫は、靈圧に乗って一士に叩きつけられる。

一般隊士であれば即座に気を失ってしまうような圧を一士は受け流し、それどころか同じように気迫を靈圧に乗せて飛ばしていた。

五年前と違うのは、一士の實力、それだけではない。

何があつたのか彼は理解していないが、しかし卯ノ花の剣がいつもと違う事は目に見えて分かることであつた。

相手の剣をいなし、受け流した直後に攻撃に反転して隙を逃さずに攻める。

その流れるような一連の動作は今の卯ノ花にはなく、むしろ昔の一士と同じような直線的な動作で、しかも霊圧すら使っていた。

激しい剣戟は一士に防御という一手を選択することを強制させて、さらには日頃の鬱憤を晴らさんとばかりの猛烈な攻め。

メノスすらも裸足で逃げ出さんばかりの殺気とも呼べる怒気

いや、気迫は隊長格の中でも格別の霊圧に乗せて一士に叩きつけられる。

が、彼は愚鈍なことにそんな卯ノ花の心の内も知らずに嬉しそうにするだけである。

これが未だ、勝負ではなく互角稽古だというのだから凄まじい、の一言に尽きる。

ぶつかり合う霊圧は道場を揺らしており、此処が四番隊の道場ではなかつたら大変なことになっていただろう。

実際に、一般隊士たちは何事かと様子を見に来ては入り口に近く前に霊圧に当てられて倒れているのだから。

気の毒というほかない。

隊長格の霊圧を向けられた訳でもないのに、そこに殺気が加わって撒き散らされていたのだから。

片方は愚鈍で馬鹿な男。

もう片方はその男のせいで色々と鬱憤がたまっている女性。

負のスパイラルの完成であつた。

「止めんか！ この阿呆どもが！！」

その戦場へ、一人の壮年男性が足を踏み入れた。

持っていた斬魄刀が封印してある杖で床を打ち、中で霊圧を撒き散らしていた二人を制する。

背後には死者の山とでも呼べばいいのか、四番隊の隊士たちが積み重なっている姿。

そしてその横には肩で息をしている四番隊副隊長。

「お主ら、場所を考えて霊圧を抑えぬか！ 四番隊を壊滅させる気か！」

その壮年男性の名は、山本元柳斎重國。

最近白髪に染まった髭を伸ばし始めて、チャームポイントにしようと思論んでいる男である。

長きにわたる尸魂界の歴史の中でも最強と言われる死神であり、護廷十三隊の総隊長を務めるほどの男だ。

まさしく、四番隊の副隊長にはその背中がまるで勇者のように映っていた。

実際、勇者なのかもしれない。

四番隊の副隊長はこの事態を非常事態だと確信して、一番隊の隊舎に行って泣きついてきたのだから。

この二人戦争を止められるとすれば、総隊長しかいないと。

「……申し訳ありません。私としたことが」

「そつだな、お前が悪い」

後に四番隊副隊長、山田清之介は弟の山田花太郎にこう語る。

『僕はその時導火線に火が燃え移った音を確かに聞いた』と。

そして山本元柳斎重國も語る。

『あんな卯ノ花隊長を見るのは初めてじゃった。じゃが……アレが戦争が始まる音だったのかもしれない』と。

「……ほう。悪いのは私、ですか」「そりゃそうだろ。あんたが何時もみたいに冷静に勝負してれば俺も霊圧を使う事はなかった」「どこの誰が霊圧を使えば良いとかそそのかしたんでしたか?」「それはあんたが余りに弱かったからだ。あのままじゃ勝負にならなかつたからな」「……弱い? 言うに事欠いてこの私が一土より弱かつたと?」「どう考えたって俺の方が強かつたな。まだ俺は本気の半分も出してなかったし」「私は本気の半分どころか三割も出していませんが」「はっ、俺は本当は二割も出してなかったぞ。お前がそう言うと思つて半分つて言ったんだよ」「私もそう思つて三割だと言いましたが。本当は一割も出していません」「……負け惜しみか? 俺があんたより強くなつたからつて」「僻みですか? 何時まで経つても私に勝てないからと」

後に山田清之介は弟にこう語る。

『ああ、隊長も意外と子供っぽいところがあつたんだなあつて思つたんだ』

山本総隊長は同じく、

『俺が総隊長になつて初めて直面した瀟霊廷崩壊の危機じゃつた』

「ク……ハハハハハハハハハハ!!」「フフ……フフフ!」「年寄りの負け惜しみはみつともないぞ」「……年寄り? 今、貴方年寄りと言いましたか?」「それがどうした。実際に年寄りだろうが。これを機会に引退でも考えたらどうだ?」「言うに事欠いて……ッ! この万年負け男!」「誰が万年負け男だこの野郎! 俺はお前より強いって言つてんだらうが!」「……口で言つても貴方は分からないみたいですね」「……どうやらちゃんと身体で分かせて欲しいみたいだな」「私に勝てると思つているんですか? 万年負け男さん」「俺に勝てるだけでも? オバサン」「……」「……」



## 第五話 それが日常（後書き）

調子にのって正解とかやりそうになったけど、卯ノ花隊長の正解は未定という。

というか今作では出てこないはず。

## 第六話 救護・補給 否、混沌専門の四番隊

そこは四番隊の隊首室。

書類が一番多くあることで有名な、そして護廷十三隊の中で唯一の後方支援部隊の隊長が執務を行う部屋である。

隊首室は隊長が勝手に模様替えて良いことになっているが、四番隊の隊首室は他と比べると際立って特徴的であると言える。

机の上には大量の書類がつまれているにもかかわらず、それとは似合わずに日の当る所やそうでないところにも調和を目的として花が置いてあり、何とも女性らしい部屋となっている。

護廷十三隊の中で女性の身でありながら隊長であるのは今の所、その四番隊の隊長だけだ。

そもそも彼女が女性死神の中で初めて隊長格にまで昇進したのだから、その実力は推して量るべしという事になる。

そしてその四番隊の隊首室からは、ごく稀に怒声やら剣戟の音やら、霊圧やらが飛び交うらしい。

その噂が噂でないことは、四番隊の副隊長が最近回復鬼道を他人に使うのではなく、自分で胃薬を愛用することになり、げっそりとしてきたこと。

そして山本総隊長がストレスによって髪の毛を失い、一気に老けて顎髭が伸びたことによつて立証されている。

そう、四番隊の隊首室ではたまに痴話喧嘩が起きるのである。当人たちは絶対に否定するのだろうか。

「熱っ……」

大男が舌を出して熱さに耐えかねている様子は何だかおかしい風貌だが、それもまあ仕方ないとあきらめるべきか。



よほど湯呑に入っていたお茶が熱かったのだろつ。

一土は湯呑の中の茶に息を吹きかけて冷ましながら、再びそれを飲む。

その湯呑は四番隊を訪れる者の為に用意してある、というものはなく、すでにここへ来ることが頻繁になつている一土の為に卯ノ花が用意したものだ。

「熱いからお気をつけなさいと言つたでしょうに」

卯ノ花が書類に印を押しながらその視界に一土をとらえて、窺めるように言う。

しかしそれは呆れているようなそれではなく、むしろ仕方がないというふうに言っているかのよう。

こんな雰囲気になつたのは確か、伊吹院長が剣の勝負に勝つてからでした、と山田副隊長は語る。

それまでは空き時間があればひたすら一土の事を探していたという事は有名なことであり、卯ノ花のそんな姿を見ていた死神の誰もが、一土が漸く姿を現したことに安堵した。

そして同時に、一土が現れたからこそ駄目になつた部分もあった。卯ノ花が前にもまして、ため息をつく回数が増えたのである。

何のことはない。

それらは全て一土に起因しているという事を誰もが知っている。

「クソツ、何で俺がこんなこと……」

悪態付きながら、一土は手元に置かれている書類を順次整理して卯ノ花に渡していく。

その流れるような作業は、流石に数年間は隊長業務をこなしていただけあり、こなれたものだ。

しかも適当にやっている訳ではなく、きちんと書類の全てに目を

通して卯ノ花に渡すべきものを選定しているのだから能率の良いこと。

雑用ばかりやっていた六番隊の席官での経験では伊達ではないということだ。

「貴方が昨日私に負けたからでしょう？」

楽しそうに卯ノ花は言う。

最早名物となりつつある院長対四番隊隊長の剣の勝負は、いい具合に均衡を保っていた。

一士が帰ってきてからすでに五十年、隊長格もそろそろ様変わりの時期を迎えようとしていて、その中であってこの二人の剣の勝負はずっと続いていった。

当然のように万が一の事があつてから総隊長を呼びに行くのは危険すぎるので、総隊長からのお達しで斬魄刀を無闇に持ち歩かないように厳命され、二人の勝負は今の所熱くなっても木刀止まりだ。

そして一士に至っては、虚圏にどうやって辿り着いたのかという原因説明がなされていないものの、彼が虚圏で限定霊印を付けたまま命がけで戦っていたという事が分かり、そのおかげでとんでも無い霊圧を手にしたことが分かった。

命がけの実戦が経験値として鍛えてくれるのは人間にしても死神にしても、変わらなかつたようで、一士の霊圧は最早隊長格のそれとも隔絶されている。

その為に彼は終始手首にリストバンドの様なものを巻いて霊力を消耗し続けていて、それでどうにか隊長格と同じくらいに霊圧を落とすことが可能となった。

そのハンデを付けて尚、一士は卯ノ花との勝負に一進一退を演じていた。

まあ、元々剣の勝負などというものは霊圧を使わないものであり、

臂力にしたところで一士が目標にしているのが剛の剣ではなく、卯ノ花が使うような柔の剣だ。

その為に霊圧などあっても無くても同じようなものであり、滅多にそれを外すことなどない。

「この野郎……っ」

睨みつけるように一士は卯ノ花を見て、しかしそれは飄々としてかわされる。

ここ十年間の戦績は、二千勝二千敗三百引き分け。

いや、そんなに切りの良い数ではないことは確かだが、しかし途中から数えるのをやめたからそれ以上であることだけは確かだ。

二人とも互いに研鑽を続けている結果として互角の実力であり続けているのだが、それがためにいつの間にか負けた方は勝った方の言いなりに翌日の一日だけなるというルールが追加されている。

そして昨日は卯ノ花が勝ったので今日一日一士は彼女の言いなりになって働いているという事だ。

「明後日も働いて貰いますからね」

「……明日も俺が負けるみたいない言い方じゃねえか」

「ええ、ここ一週間は全て私の勝ちですから明日も間違いは起こらないでしょう」

「良く言うよ、先週は全部俺が勝ったのに。どっちかって言えばここ一週間が間違いだろうが」

「迷い事を。とうとう剣だけではなく頭の方まで弱くなってしまいましたか。……ああ、頭の方は最初からでしたね」

「……喧嘩売ってんのか？」

「買ってくれるんですか？」

ピシッ、と何処かに亀裂の入る嫌な音を山田清之介は確かに聞いた。

そして同時に、彼は机に突っ伏して胃のあたりを押さえる。

逆の手ではどうにか引き出しに入っている胃薬を取りだそうとするが、しかし彼はとうとうその手に胃薬を掴むことはできなかった。そして丁度その時、報告書を持ってきた隊士が扉を開ける。

「失礼します、卯ノ花隊長。報告書を　や、山田副隊長！　大丈夫ですか！？」

手に持っていた報告書の束をとりあえず机の上においてから、彼は山田副隊長の肩を揺らす。

どれだけ揺らしても返事が返ってこずに、そして彼が自分の手で腹のあたりを押さえて、その部屋の中では隊長と院長が火花を散らしていたところを見て事情を把握する。

そこに至るまで、副隊長の肩に触れてからわずか二秒。

「誰か！　担架を！　副隊長がいつもの発作だ！　副隊長、しっかりして下さい！　貴方が倒れたら誰がこの混沌部隊を纏め上げるんですか！！」

「……ああ、花太郎。僕もそろそろそつちに……」

「行かないで下さいよ！？　って言うか弟さんは死んでませんよね！？」

「……」

「副隊長おおおおおお！」

カオスだった。

第六話 救護・補給 否、混沌専門の四番隊（後書き）

早くもこの話、三千文字に到達していないという事が発覚。  
さっきの後書き書き直すのも面倒だし……このままでいいか。

## 第七話 恋とは何ぞや？

直感。

戦闘においては経験値に基づいてそれは発揮される。

第六感と言っても良いのかもしれない。

年を経ることに経験値は蓄積されて、そこから導き出される直感というのは次第に冴えていく。

だからこそ、死神の中でも年を経ている者ほど強い傾向にあるのだ。

その直感で、一士は今、自分が岐路に立っているという事を確信していた。

事の始まりは昨日にまでさかのぼり、そして本質を辿るとそれは千年も前に及ぶ。

一士がそれに気付いたのは偶然のことだった。

朽木銀嶺が孫、蒼純の恋について相談を受けていて、一士は好きな人でもないのかと言われて、思いついたのは当然とも言つべき一人の女性。

千年の前からあこがれであり続けて、背中に追いついた今で尚、それは変わらないと断言できる。

虚圏から奇跡的に戻ってきて常に四番隊に入り浸っているのだから何の事はない。

つまりは、そう言う事だ。

だがしかし、改めて考えればそれは一士にとっては息の詰まることで、要するに年甲斐もなくなんだんと彼は恥ずかしくなってきたのであった。

落ち着いた容姿、言動ともに穏やかな印象、しかし時折見せる変化の激しい多彩な表情。

皆が知っている一面と、それに加えて自分だけが知っているとも  
思える一面を思い浮かべるだけで、何故か落ち着きをなくしてしま  
う。

何なのだ、これは……！

大の男が焦りを隠せないようにして、四番隊舎の前をうろつろと  
していた。

門番を務める二人は、当然のようにその行動を怪しむ。

何時もなら普通に堂々として入ってくるはずの院長が、入るか入らな  
いかで悩んでいるだけではなく、門の前であっちに行ったりこっち  
に行ったりとしているのだから。

そう、誰がどう見たって告白しに行く直前の少年のようにしか見  
えなかった。

「あ、あの、伊吹院長、中にお入りになられないのですか？」

「あ……う、うむ」

門番の一人がそうやって声をかけると、一士はどもって返事をし  
ながらしかし何とか四番隊舎の中に足を踏み入れる。

忙しく足を運んでいた隊士たちが漸くその姿に気付き、しかし挨拶  
をしても覇気の足りない挨拶しか帰ってこない院長をいぶかしむ。  
何時もなら天井に頭が届きそうなほどのその巨体を大きく見せる  
ようにして、返事をしてくれて、気さくに挨拶をしてくれるという  
のに。

ゆえに、若い女性死神は、「も、もしかするともしかする訳？」  
とか会話していたりする。

そうしていつの間にか一士の本能は彼の身体を隊首室の前にまで



運んでいて、そして彼はまた門の前でしたようにづるづるとする。

扉の前を通り過ぎたり戻ったり。

その様子を、若い女性死神だけでなく、何かと四番隊のほとんどの者が集まって見物する。

いや、四番隊の者だけではなかった。

いつの間にか、六番隊の隊長格二人と、どこで異変を察知したのか、京楽隊長まで居る。

しかも霊圧を消してまで。

『あー、山田副隊長、至急第三席の部屋までお越しく下さい。昨日の件について少しお伺いしたいことがあります』

そして京楽春水、女に目が無いその人は身近にいた四番隊の隊士に指示を飛ばす。

いわく、隊首室で報告をしている副隊長を今すぐに部屋から下がらせるというもの。

かくしてそれは四番隊の歴史上、最速で実施されて、数秒後には副隊長が隊首室から書類を抱えて出てくる。

「あ、伊吹院長、どうもお疲れ様です。隊長は中に御在室ですよ」

そう告げてから、護廷十三隊副隊長の中で最も苦勞している山田清之介は三席の部屋に向かおうとして、しかしその途中で京楽春水に身柄を確保されて、四番隊三席に引き渡される。

何という早業か。

流石は隊長格である。

「あー……は、入るぞ！」

「どっぞ」

やけに気合を入れて院長は隊首室に入って、扉を閉める。  
そしてその直後、霊圧に加えて足音まで消した皆が扉の前に移動して、京楽隊長を筆頭として扉に耳を当てて中の会話を拾おうとする。

とても別の隊の隊長に指示されて動いているとは思えないほどの連携を、四番隊は見せる。

それが外の様子。

それに対して、問題の中の様子は

「今日はどうされたのですか？　まだ剣の勝負の時間には早かったと思いますか？」

「あー、いや、その……少し聞きたいことがあってな」

「何ですか？」

「うむ……あ、あんたは、その……こ、恋とかしたことあるのか？  
外では京楽春水が「わくわく」とか外見に似合わないことを言っている。

そしてその隣には、何時の間に騒ぎを聞きつけたのか、副隊長の矢胴丸リサが「うるさいわ」と脇腹を小突きながら聞き耳を立てる。  
これほどまで近くにいれば一土も卯ノ花も普段であれば気付いただろうが、しかし話の内容が内容だけに二人とも外の霊圧には気づけないでいる。

戦闘時でもなければ、殺気も無いのだから当たり前だが。

「……………済みませんがもう一度伺っても？」

「だ、だからな、恋とか、したことあるのか？」

「……………」

固まって、いた。

それはもう、その空間だけ時間が切り取られたように。

卯ノ花は一士の言葉を理解するまで、彼の言葉が耳を通して空気の振えとして脳内に伝わり、それが音として処理されてから言語として頭に浮かびあがるまでに五秒ほど。

そして、そのあとでその言語を言葉として理解するまでにたっぶり十秒ほどかけてから理解する。

何を言われているのかを彼女が理解したその瞬間に、彼女は持っていた書類を手から離してしまい、それが床にはらりと落ちる。照れ隠しのように慌ててそれを拾ってから、卯ノ花も答える。

「わ、私は……！ あ、あなたはどくなのですか！？」

「いや！ その、俺は……！」

キタ (。 。 ) !!!!!!!

と、扉の外では声を押し殺して皆がグツと拳に力を入れて喜びをかみしめている。

だが、喜ぶのはまだ早い。

相手はあの伊吹一士。

何が起こるか分かりませんよ、という六番隊副隊長、朽木蒼純の言葉に一同はもう一度気を引き締める。

流石は四大貴族である。

何が流石なのかは誰にもわからないが。

「あ、あなたが教えてくれるのであれば……わ、私もお教えしまし

「ようー！」

「俺は……そのっ……こ、恋つてのが何なのかよ、良く分からなくてだな、昨日、蒼純に聞かれたからそれを確かめに来ようっ……」

「そ、それはっ、つまり？」

「いや、だから、その……俺は、あんたに」

扉の外はかつてないほどに皆が鼻息を荒くしている。

山田清之介四番隊副隊長など、長年の労力が報われたのかと既に涙を流す準備をしているところだ。

京楽春水など、どこから持ってきたのか既に祝いの酒を手にして  
いる。

朽木銀嶺は既に泣いている。

何だこのカオス。

「恋、してるのか？」

「……………え？」

……………え？

と、中にいた卯ノ花と外の者たちがハモった。

既に京楽など、「え、今の告白する所じゃないの？」などと自分の認識が間違っていたのかと隣にいる副隊長に普通の声で聞いている。

そしてその副隊長も「わ、訳が分からん……ウチにも」と焦っている。

朽木銀嶺はその為に流したのか、先ほどの嬉し涙をすぐさま普通の泣きに変換している。

「それを確かめたくて此処に来たんだが……どうなんだ？」

「フ、フフフ……あなたは私をからかいに来たんですか、そうなんですか？ 私の純情を散々に弄んで……良いですとも、今すぐにそんな真似が二度と出来なくなるように斬って差し上げます。ええ！」

「え？ 俺なんか間違えた？」

スラリ、と卯ノ花は斬魄刀を抜く。

それは輝いているばかりか、持ち主の意志によって血を欲しているようにも見える。

かくしてその騒動は八番隊隊長、六番隊隊長、伊吹院長が奮闘して何とか四番隊隊長を宥めることに成功して、隊首室が崩壊するだけで済んだのだが、その後の話し合いでどうやら目出度い話になったらしい、というのは六番隊副隊長の手記によるところである。

## 第八話 卯ノ花家

紆余曲折あった訳だが、伊吹一士はどうか自分の心の中を理解して、結局は卯ノ花家に婿入りすることになった。

というのも、そろそろ上流貴族として卯ノ花家も後継ぎがないと養子を取ることになってしまっただ。

だが、卯ノ花烈という人は破格な霊力を持っていて、既に千年の時を生きているのでその年に見合うような男を見つけるのも一苦労だ。

で、結局は選択肢としては一士しかいなかった訳だ。

それにどうせ相思相愛だという事は分かっていることだったので何も問題はなかった。

それで目出度し目出度しという話になり、しかし二人とも手の早いこと早いこと。

上流貴族という事でそれなりの貴族の方々に、護廷十三隊の隊長達などが呼ばれる婚儀が済んでから十年、既に娘が一人産まれていた。

こんな年食ってんに子供産めるんだ、とのたまった一士はその翌日から一週間、行方不明になった後に任務に出ていた八番隊の隊長が流魂街の外れの山で生き埋めになっているのを発見したとか言われているが、真相は定かではない。

分かっていることは、二人には娘が生まれて、そこそこ仲良くやっっているという事だ。

いや、そこそこというのは少し程度をぼかし過ぎだろう。

山田清之介四番隊副隊長は、二人が発生するラブ空間に耐えきれなくなつて、滅多なことでは隊首室にはいかないことにした。

喧嘩ばかりだった今までよりも行かなくなつたというのだから、

やはり喧嘩するほど仲がいいという慣用句は当然のように真理を示しているのだろう。

だがまあ、恋とか恋愛とか、そういうものについて考えるようになってしまった一士が京楽隊長と一緒に若い女の子を追いかけるようになってからは、喧嘩 いや、一方的な惨殺 も多くなっているのだが。

それゆえに山田副隊長は胃薬が多くなったとか。  
経費で落ちないという事で彼は嘆いているらしい。

閑話休題。

そんなこともあった中、護廷十三隊では隊長格のメンバーが入れ替わるという節目の時期に来ているようだった。

一昨年に三番隊の隊長が引退し、新たな隊長が就任。

十二番隊の隊長は昇進して、そこにも新たな隊長が就任。

これで開いている十番隊にも隊長が就任すれば、五年の内に隊長が三人も変わることになる。

まあ、ずっと昔の話、奇跡の六番隊と言われた山本総隊長が六番隊長だった時、卯ノ花烈が副隊長、伊吹一士が三席という彼らが総隊長、隊長になった時を思えばそれほどの変化ではないのかもしれないが。

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ 破道の三十一 赤火砲！」

ポツ、と小さな火塊が掌から発せられて庭に作られていた的手前で火は消えてなくなる。

威力を調節することで照明としても使える中級鬼道だが、真央霊術院の一年目の演習でも使われるほどに基本的な鬼道だ。

霊力がそれなりあって、霊圧もそれなりにあれば使う事はそこ

まで難しくはないが、しかし一回目に使った的に当てるのはそれなりに才が必要なことも確かだ。

伊吹一士 いや、婿入りしたから卯ノ花一士か　目の前では十歳に満たない少女が鬼道を使って一生懸命的に当てようとしている。

黒髪は間違いなく母親から受け継いだもので、顔も同じく母親から受け継いだもの。

父親から受け継いだと思わせる外見のものは、ぱっと見て分かるようなそれはないが、考えるとそれで良かったのかもしれない。

巨漢とも呼べる一士のごつい　いや、精悍さの際立つ顔が遺伝していたら、女の子としてどうか。

烈に似て良かったと思われるところだ。

「初めてにしては上出来だ。それにまだ八歳だしな。焦らなくてもこれから当てられるようになるよ」

「……母上は初めてで当てたと仰っていました」

「いやまあ、烈は特別だからな。回復鬼道が使えるような人は大概鬼道が得意なんだよ。そこら辺は生来の霊圧の器用さという奴だな。残念ながら俺のが遺伝したみたいだが」

「父上は初めてで出来ましたか？」

「俺かあ……覚えてないけど最初は爆発したんじゃないか。それに俺が使った時は天雫と違ってもっと年上の時だからな。天雫は凄いや。流石俺と烈の娘だ」

近づいて頭を撫でてやると、天雫は嬉しそうにほほ笑む。

一士と烈の娘である彼女は、その二人の娘であるという事を照明



するように霊圧が高い。

それに四大貴族であってもこんなに早くから鬼道の修行は普通しないだろう。

朽木家の白哉君でも、まだ竹刀を振ることしかしていないと銀嶺に聞いたような気がする」と一士は思い返す。

それを考えると、この年で、しかも初めてにして的に当たる直前まで行ったというのは十分に才能を受け継いでいると言えるだろう。そもそも一士の予定では、真央霊術院の特進クラスの教育カリキュラムに乗っ取って家で暇な自分が教えるつもりだったのだが、それを烈に話したところで最初は鬼道からやると説得されたのだ。

教育ママという性質を持っていた烈は、破道の一から順番に教えていて、いつの間にか三十一番にまで来ていたという事である。

「私も何時か父上と母上の様な立派な死神になれますかっ!？」

「うんと一杯修行したらな。きっとなれる」

「ならば頑張ります!」

元気よく告げてから、再び天雫は鬼道の練習に戻る。

どの程度の早さで成長するかは分からないが、しかし確実に言えるのは百年以内に上位席官には絶対になっているという事だ。

いや、副隊長ですら夢ではないかもしれない。

隊長格を両親に持っている天雫は、霊力、霊圧ともにこの年にしては破格のものを備えているのだから。

鬼道にしたって、一度で成功直前にまで持っていくのだから全く持って未恐ろしい。

だが、やはり一人で修行するというのは身が入らないものだ。それは、自分がずっと烈を目指して修行したから知っている。

目標があつて、ライバルが居ることは成長に大いに助長してくれる。

その意欲が、良い方向に働きかけてくれることは間違いないのだから。

そう考えるとやはり真央霊術院に入れるのが良いのかもしれないが、年齢的にはまだまだだ。

それこそ、あと最低でも五年は経たないと入れられない。

それならばいつそのこと、朽木の孫を呼んで一緒に、という事も考えないでもなかったが、しかしあの生意気な子供は良く考えたらかなりの美男子であるという事を思い出して、一士は即座にそれを考えなかったことにした。

もしも天雫があんな糞餓鬼に惚れたらどうする、と。

ただの親バカである。

当然、彼は今の所娘を嫁に出す気など到底ない。

天雫の男としてふさわしい条件は、ただ一つ。

一士を越えることに他ならない。

だが、良く考えると今の所全死神の中で一士を越えられるような人物は、総隊長を抜くと一人もない。

いや、女性も含めれば烈がギリギリ剣だけでどうにか、ということころなのだが。

つまり天雫は一士が生きている限りは男に恵まれないということか。

哀れ。

「一士様、表の方に護廷隊からの使いの者が」

「ん、すぐに」

卯ノ花家に仕えている者が一士を呼びに来たことで、修行はいつ

たん中断となる。

ついこの間から流魂街で起こっている魂魄消失事件について、烈は四番隊の隊長として検証の為に家には帰ってきていない。

そのタイミングでの使いの者、という事はその事件について何かしら一土の手を煩わせなければならぬほどの事態が起こっているという事なのだろう。

「じゃ、天雲。今日は此処までな。俺は表に出てくるから」

「はい、気を付けて行ってらっしゃいませー！」

「ん、なるべく早くに帰ってくるよ」

## 第九話 魂魄消失事件

ここ一カ月、流魂街の住人が消える事件が続発。

原因は不明。

服だけ残して跡形もなく消えてしまいうらしい。

服を残して何処かに行っているという事ではなく、文字通り消えてしまいうらしい。

報告書によれば、生きたまま人の形を保てないようになって、消滅した、そうとしか考えられないようだ。

生きたまま人の形を保てないようになったという事については靈子が何かしらの異変を起こしたのかもしれないと書かれているが、それについても消えてしまった以上は何も分かっていないらしい。

要するにほとんどが不明という事だ。

残された衣服についても、靈子化していないという事で死んだわけではないらしいのだが、衣服から分かるようなことなどたかが知れている。

そしてその調査に九番隊が隊長、副隊長を含めて上位席官と共に現地に赴いたらしいのだが、彼らの霊圧の反応が消えたという事で、総隊長はこの事態を重く受け止めたらしい。

席官だけならばともかく、隊長と副隊長がともに赴いていて二人の霊圧が消失するなど、異常事態の何ものでもない。

という事で、隊長格には緊急招集がかけられて隊首会が開かれて各隊隊長は一番隊に集合がかけられた。

「入れ」

総隊長からお声がかかって、扉が開かれると同時に三人が会議の部屋に入る。

一人は錫杖の様なものを持っていて、もう一人はそれに追隨するような形で。

鬼道衆の長とその副官であるその二人は、特徴的な髪の毛と髭を蓄えている。

「握菱鉄裁か。表に出てくるのは久しぶりだな。それに……院長まで」

もう一人は、ボサボサの髪の毛に多少は生地の良い着物。大きな身体は鬼道衆の副官にも負けず劣らずというほどの体躯であり、前述の二人とは違って腰に死神のそれである斬魄刀を差している。

「どうも大事になってきたねえ……」

笠を深くかけ直して京楽がそう言う。

鬼道衆の総帥が表に出てくるだけでもかなりの大事だということに、それに加えて真央霊術院の院長まで。

特別な肩書は院長というそれだけになっているとしても、その院長の力量がこの隊首会に参加している隊長達のほとんどと隔絶していることを知る者は半分もない。

「話は伝わっておるな。お主らには現地へ向かってもらいたい」

総隊長がそう言うてから京楽が自分の副隊長を行かせることにして、大鬼道長は休むことになる。

副鬼道長が行くことになるというのは、おそらくは結界を張る時などに必要になるからだろう。

状況も分からない現地では結界が必要だという事は十分にあり得る。

そして一士が行くという理由は、救護隊の長を現地に行かせる訳にもいかないから、代わりとして回復鬼道の使える十分な戦闘要員として選ばれてのことだろう。

前線から退いて既に何年も経っている者の、しかし剣の勝負という事で烈と毎日のように勝負を繰り返していた一士であれば、戦闘能力は十二分だ。

何よりも経験という観点から言えば、隊長の霊圧も消えたというこの異常事態、その経験がものを言う事も少なくはないだろう。

「以上の六名を以て、魂魄消失案件の始末特務部隊とする！」

その言葉に特務部隊に選ばれた者たちが会釈をしてから、瞬歩で隊首会を飛び出す。

まあ、瞬歩を使って行ったのは一士を除いた五人であったが。

一士は彼らが瞬歩で移動してから烈に少し目をやって、遅れてそのあとを追う。

頭を下げた直後に飛び出すことなど全く聞いていなかったから反応できなかつたのだ。

ずっと昔の隊首会では、総隊長が終わったと宣言してから出ることが許されるのが決まりであったから、それが染みついていていたのかもしれない。

「……どんな状況だこりゃ」

少し遅れて一土が現場にたどり着けば、そこはどうしてそうなったのかも分からないほどの有様であった。

ホロウと思われる霊圧が二つ。

しかしその二つは間違はなく九番隊の隊長と副隊長の外見をなしている、その隊長にかけられた六十番台の縛道が力任せに破られようとしていたところだった。

そしてそれは破られて、新しく戦闘が始まる。

「ハッチ、他に手え、あらへんの？」

「あります……ただしあの鎖条鎖縛を簡単に破られています。今度は最大限の力で行かないとダメです。それには、皆さんで縛道を仕掛ける確実なチャンスを作っていた必要があります。しかし、私の縛道の道連れにならないとも限りません」

八番隊の副隊長の言葉に、副鬼道長が答える。

どうして虚の様な霊圧を発しているのかはともかくとして、此処へ来ている以上は自分も戦闘に参加する義務があると一土は考えて早速分析を開始する。

霊圧はどうやったのか知らないが、隊長格のそれよりも少しだけ上のように感じる。

死神からホロウへと変化したことで、霊力が上がったという事なのか。

「そんなことかよ」

「羅武……」

「俺が引きつける。その間に拳西を捕まえろ」

「あたしも行ったるわ」

「ボクもね」

愛川羅武が上半身の死覇装を破かれた状態でそう言い、それに二人、援護するように言う。

だが、霊庄は確実にホロウとなっている彼の方が強いというのが一士の分析。

それでもまだ総隊長には遠く及ばないが。

「いや、俺が行こう」

「……院長が？」

そこで漸く、一士は瞬歩を使って全員の一步前に入る。

大きな背中中は安心して前を任せられるほどの自信に満ちていて、

霊庄には微塵も油断など感じられない。

真央霊術院の始まりから千年も院長に就任していると言われていたその男は、今までに重要な案件には何度か顔を出したこともあったが、しかしそのベールは未だに隊長格ですら、下を見たことのある者が少ない。

百年以上も隊長を務めている者でやっと、その力量を知っているのだから。



「若い奴らは下がってる。縛道の六十一 六杖光牢！」

言うや否や、一土は指を向けて虚となった拳西に六つの帯状の光が胴体を囲うように突きささる縛道を使って一瞬だけ動きを止める。しかし副鬼道長の使った六十三番の縛道が既に腕力で破られているのを見ているから、それだけでは終わらない。

「縛道の六十三 鎖条鎖縛」

続いて、太い鎖が蛇のように巻きついて身体の自由を奪おうとする。

それが完成するころには既に彼は先ほどの縛道を力だけで解こうとしていて、しかしその前に一土は既に次の縛道の為に霊圧を消費していた。

「縛道の七十九 九曜縛」

周り縦方向に八つ、胸に一つの黒い鬼道の玉のようなものを出して縛り、動きは此処で完全に封じられる。

駄目押しとばかりに最後に指を特殊な形に結んでから、両方向に開いていた手を打ち合わせる。

「最後だ。縛道の九十九 禁！」

黒いベルトが出現して、ホロウを縛り上げて地面に引きずり倒すとその上を鉾が固定して拘束する。

そこまで縛道を連発して、一土は息一つ乱す様子が無い。

それどころか、見ていた隊長格でさえも、啞然としてしまうほどに素早い技だった。

上級鬼道を連発することなど、出来ることなのか。つて言うか、九十番台つて詠唱破棄出来たのか。そんな思いだろう。

「さて、副鬼道長。動きは封じたが」

「……ワタシ、それをやるつもりだったんですが」

「ん？ そうなのか」

呆然とする彼らを放ってから、動きが完全に止まったホロウを調べに一土は近付く。

その体に刺さっている いや、それも身体の一部と化している白い物体に触って霊圧を確かめたり、顔を覆っている仮面に指を触れてみたり。

「これは……」

少しだけ、記憶に残っている霊圧の感触に一土はどこで触れたものなのか思考する。

ここ最近の大きな事件であれば覚えがあったはずだ。

そうならば、忘れることなどないはず。

十年前、百年前、と一土は自らの記憶を手繰り寄せるようにしてさかのぼり

「ッ！？」

気付けば十二番隊の副隊長が同じようにホロウの仮面を付けて大声を出す。

そしてその直後に、もうひとつ霊圧が増えたかと思った瞬間に視

覚が封じられたことに気が付く。

視覚だけではない。

わずかコンマ数秒の間に、一士は自分の聴覚、嗅覚、霊圧感知能力が封じられていることにも気が付く。

そして同時に、触角は失われていないことを。

それらを認識して、一士は立ちあがってから膝の力を完全に抜いて何時でも動けるようにする。

考えられるのは誰かの斬魄刀の能力。

烈の斬魄刀の様に何かの生き物に呑みこまれたか、或いは京楽の斬魄刀の様に互いの条件を同じくする能力か。

そこまでの分析が終わるまで、視覚を失われてから実に一秒。まさに驚異的な速度であった。

それもこれも、全ては彼の修行の賜物にして、経験に裏打ちされたものだろう。

それが証拠に、他の隊長格は同じように斬魄刀の能力に囚われてからなす術もなく斬られていく。

敵が誤算していたのは いや、誤算ではなく見誤ったのは一士の力量だろう。

たかが霊術院の院長と侮って一士を最後に斬る選択をしたのか、それとも別の何かの要因があって一士を最後にせざるを得なかったのか。

いずれにしても、一士が最後になったのはその斬魄刀の能力を使っている者にとっては不幸でしかなかった。

「フツ！」

首の皮を斬り、それが皮膚のすぐ下を走っている神経を斬られて痛みを知覚した瞬間に、一士は重心を斬られた方向とは逆に倒して

刀から逃れると同時に、その刀を捕えた。

そこに至るまで、かかったのは三秒。

その短い時間を思えば、自分の卍解を使ってこの斬魄刀の能力から逃れることと、腕に巻いているリストバンドを取って霊圧を高めることをしなかったのが一士の最大の幸運だった。

いや、幸運などではなく、そこまで行くと最早直感というもののだろう。

視覚を奪われてから、すぐに斬られると思った彼は立ちあがることを第一にした。

それが命を救う事になったのだから。

「一骨！」

首を刎ねられそうになった直前、一士は刃を握ることに成功して知覚が元に戻る。

そして敵の姿を視覚で確認して、居場所が分かったその瞬間には頭で命じるよりも早く、強烈な打撃が敵の腹に命中して吹き飛ばされていた。

「今のは……九番隊の席官か」

敵の姿が攻撃範囲から遠ざかったことを確認してから、一士は周りの状況の把握に努める。

そうすると、特務部隊として来ていた隊長格の全てが地に伏せていて、かろうじて意識を保っているのは五番隊長だけであった。

そして、此処に近づいて来ている霊圧が二つ。

それは五番隊の副隊長と、もう一つは霊術院を天才的な速さで卒業した少年。

「五番隊副隊長……何故此処に？」

「総隊長から増援として向かうように言われて来ました」

「ふむ……ならば早急にその首を落としていくと良い」

そう言いながら一士は自らの刀を腰から抜き放つ。

長いそれは月光に照らされて輝き、その存在感を放つ。

総隊長が増援など出すはずもない。

それは一士が良く分かっている。

曲がりなりにも総隊長の斬魄刀を唯一凌ぐ可能性のある天水の所持者。

そんな男が此処に来ているのだから、増援として向かわせるのであれば副隊長と席官ではなく、総隊長自身か、隊長格の全てだ。

だからこそ、一士は霊圧を解放させて刀を抜く。

「万物悉く水面に沈」

が、解合を唱えて始解を行おうと霊圧を消費する直前で、自らの意にそぐわずに彼の顔から白い物体が出てくる。

魂魄に乱れを感じて、一士は今から目の前の敵を殺すどころの話ではなくなる。

それは急速ともいえるほどに顔の全てを覆って、意識が混濁しそ  
うになる。

「ハア……ハア……グッ……！ 天水！」

何とか斬魄刀を解放して、彼の刀からは水が出る。

自分の身を守るために出そうとした水。

雨を降らせようとしたが、しかし魂魄に乱れを感じている今の身体では一士にはそれも出来なかった。

刀身は高圧の水で覆われて一土がそれを振ると、敵の二人に激流が襲い掛かり、そしてそれが当たるかと思われた直前、一土はそのタイミングで気絶した。

## 第十話 vs 斬魄刀

そこは、見渡す限り海が広がっている世界。

空にはいくつかの雲が漂い、どこまでも途切れることのない青空が広がる。

海は深く、底は見えない。

世界を構成しているのはその三つと海と空を分け隔てる空気だけであり、それが世界の全てだった。

一士は此処に、何度か足を運んだことがある。

最初の一回目は自分がピンチになった時に偶然にこの世界に入り込み、名前を聞かされたとき。

二回目以降は、対話を重ねようと足を運んだ。

その世界は、自らの精神世界。

そしてそこには、見たことのない男が一士の前に立っていた。

「……誰だお前は」

「誰だあ？ 俺が分かんねえのか、王よ！」

色は、およそ白と呼ばれる色だけで構成されているその者。

髪の毛も、死覇装も、腰に差してある斬魄刀も、身体の全てに至るまで色が違うが、しかし外見は一士に酷似している。

いや、酷似というレベルではなかった。

まるで、一士から色を抜いてしまった存在であるかのようだ。

「……天水はどこだ？」

あたりを見回して、霊圧を探って、一士の斬魄刀の本体を探そう

としてそれが見当たらずに目の前の自分に、一土は問いかける。

感じられる霊圧はホロウのそれに似ていて、しかも自分の霊圧に一致する。

自分の霊力から作られている筈の天水が居なく、しかし此処は間違いない自分の精神世界であり、同じ霊力を持っている自分に似た姿のホロウが居るといふ矛盾した状況。

「天水だあ？ 天水つてのはお前の腰に刺さってるそのことか？  
それとも」

彼は腰に刺さっている刀を抜いて、斬りかかってくる。

当然のように一土も斬魄刀を抜いて、二人は斬り結んだ。

「俺の持つてるこいつのことか！」

二人が切り結んだ衝撃で、下に悠然と構えていた海が弾ける。

それでも底は見え、波紋が広がって行くだけ。

同じ姿をしているから若しかしたらと思ったが、その予想は間違っていた。いなかった。

斬魄刀を抜かずに、手で押さえようものなら手首から先が吹き飛んでいた。

それほどに、鋭く強い斬撃。

まるで鏡の中に映っていた自分がそのまま出てきたかのような錯覚に陥る。

上から降りおろせば下から跳ね上げられそうになり、右から攻めれば左から攻められる。

それを繰り返すだけで、全く同じ姿、能力であるが故に勝負はつきそうにない。

右手に持った刀で相手を攻撃して、それが同じ刀で防がれた次の



瞬間には左の拳を打ち合わせて距離を取る。

「テメエは強い。認めてやるよ。流星はオレだ。だがなあ、テメエよりもオレの方が強い!!」

奴がそう叫ぶと、こちらが天水を始解させると同時に奴も斬魄刀を解放する。

刀身からは水が迸り、霊圧を高める度に刀身を纏う水は圧力を上げていく。

雲の少なかつた空はいつの間にか雲に覆われて、雨が降る。

一士の周りに降った雨は重力を無視して彼の周りで漂い、何もかも寄せ付けないように彼を守る。

それは相対する奴も同じことで、斬魄刀を解放させたところで勝負がつかないという事は頭で理解できた。

「フッ！」

「ハッ!!」

一士が刀を振ると刀身を纏っていた水が激流となって襲い掛かり、しかし同じように奴の刀からも水が襲い掛かってきて、ぶつかつたそれは相殺される。

それを隠れ蓑にして近づき、相殺された場所では同じようにしてまた切り結ぶ。

一士はこれだけの戦闘で、理解する。

相手は自分と同じ、それこそ自分と戦うというそれをやってのけているのだと。

だが、自分の霊力で作られているはずなのに、霊圧はホロウのそれに近い。

それが影響か、数分ほどそうやって戦っていると、次第に一士は

押され始めていた。

水によって防御されている攻撃は、それが無かったら確実に一士の肉を斬り裂くほどの一撃になっていただろう。

自分と戦っているのだから当たり前だ。

手首につけていた器具を外し、霊圧を完全開放して戦えばそんなという事は容易に想像できることだった。

「オレはテメエでテメエはオレだ。同じ姿、同じ力。だが、オレの方がテメエよりも強い。そこにあるのは本能の差だ！ 分かるか！ テメエは理性で戦って、オレは本能で戦う！ それがオレとテメエの間にある絶対的な差だ！！」

言われて、頭で考える前にそれを理解する。

いや、頭で考えても分からなかった。

戦士として、剣士として、死神として、鍛え上げられた直感に裏打ちされた本能がそれを肯定した。

原初の階層、魂魄の奥深くに残っていた戦いを求める本能。

強くなるために戦いを求め、戦いを求めるために強さを欲し。

最初は、憧れだった。

目の前に突如として現れたホロウを華麗な剣捌きで葬る少女の剣筋に見惚れて、自分がそんなふうになりたいと願って死神になった。斬魄刀を手にして、死神となつて、その背中を追い続けて何年も何年も自分を追い込んで鍛えこみ、強くなろうとした。

そこにあつたのは強くなろうとする意志を形成していた戦いを求める本能。

次は停滞。

その背中にやっと追い付いて、追い越すためにひたすらお互いを高めあつた。

追い越すためがいつの間にか一緒にいることになり、結果として剣を振らない日々が続いた。

強くあるうと願って剣を振っていた毎日が置き去りにされて、互いに負けないようにする日々が始まった。

それは、ただ只管に強さを求めたのではなく、技を磨き、分析し、冷静な頭で戦い、勝ちを求めること。

それがいつの間にか一緒に過ごす日々になり、何時しか剣は自分を落ち着かせるものになった。

安寧の日々が続き、穏やかな日常が流れる毎日。

そこに、ただ圧倒的な強さは必要なかった。

思い出されるのはいつかの日。

『あなたの剣は何処かぎこちないですね。剣の道は己の道。型はあってもその先は自分で切り開くものです』

見惚れたその剣筋を自分も扱いたくて、ひたすら彼女の姿を目に焼き付けるようにして剣筋を真似て。

そこにあつたのは自分に合わない剣。

憧れのその人にそう言われてから、自分は自分のあるべき強さを求めて戦ったはずだ。

そう、そこには技も、分析も、理性も無かったはずだ。

あつたのは、唯只管に強くあるうと前に進むだけの意思。

それは、戦いを求める本能。

「  
」

刀身を纏う水はさらに霊圧によって圧力をかけられて、それは高速で回転し始める。

それは触れた瞬間に全てを自分と一体化させてしまうほどの、存在感を放つ。

それは一士が言葉を口にすると同時に止み、刀身を覆っていた水

は霧散して、刀身だけではなく柄すらも何処かへ消える。  
残っているのは、水になった斬魄刀。

「解！！」

一士の持つ斬魄刀は、その全てが水に変化する。

重力にも、引力にも、熱にも、冷氣にも、風にも反応することなく刀としての形を崩さない水。

それが、一士の手の中にあつた。

「……大海天水」

一士の卍解。

名は、大海天水。

解放と同時に、刀は水そのものになって、空は鳴く。

流水系最強の斬魄刀の卍解は、始解の能力が増大したものであり、およそ水である物を自在に操り、発す。

卍解ともなればその力は大きくなって、大きくなるのが通常だが、一士のそれは大きさを変えていないように見える。

が、見えるだけだ。

卍解としての戦力は、最強の名に恥じずに強大であり、とても刀一本の大きさに留め切ることなど難しい。

それこそ最強の名を冠すほどの斬魄刀であればそれは尚更だ。

つまり、この場所においては彼の卍解は、水で構成されている海であつた。

「水天……………」

その言葉によって、一士の刀が天に掲げられると同時に、空は海になる。

雨によって作られた水の層はどこまで空を覆っているのか、上にも、横にも、最後が見えないほどに分厚い層を形成していた。

「……………一碧」

そして一士の刀は敵に向けられて、空も海も、その境目を無くす。水の青と空の青は一つになり、敵は呑みこまれる以外の選択肢が無い。

全ては水に吞まれ、その圧力によって海の奥深くへと沈む。海上であるからこそできる技の一つ。

使えば味方すらその水の中に呑みこんでしまうほどに強大な技であり、誰もそれに逆らう事は出来ない。

それは、絶対的な強者にだけ扱う事を許される技。

「……………本能か。お陰で思い出した」

その技に相手は呑みこまれて、一士は精神世界での闘争に勝利した。

後に残ったのは、雄大な海と広大な空。

そして、一人の男だ。

ギラギラと輝く眼光は、まさしくずっと昔に無くしたものを取り返していた。

## 第十話 VS 斬魄刀（後書き）

さて、予告ではあと一話を今日中に。  
……更新出来るか？

## 第十一話 卯ノ花天掣（前書き）

いきなりルキア救出編とか、現世での戦いにするのもアレだったの  
で一応一話だけ挟むことに。

## 第十一話 卯ノ花天霽

伊吹一士、その人が死んだと聞かされてから既に数十年。

魂魄消失案件という事件では元十二番隊の隊長が主犯で、その共謀犯として鬼道衆の大鬼道長が何かしらの事を企んだという事で靈力をはく奪される処分を受けたらしい。

一士を始めとする（ギヤグではなく）魂魄消失案件特務部隊の者たちについては、虚化という実験の犠牲によって、ホロウとして厳正に処理されることが中央四十六室により決定される。

が、突如として現れた賊によって十二番隊の隊長と大鬼道長、そして特務部隊の者たちは姿を消す。

結局、ホロウとして処理するべし、という中央四十六室の決定は執行されることがなく、その事件で姿を消した者たちについては記録が抹消されて、口にするのは禁じられることに。

だが、当時幼かった卯ノ花天霽はそんなことを許容できる訳もなかった。

父上は、すぐに帰ってくると言ったのだ。

だれよりも強かった 唯一母上にだけは頭が上がりたようだったが 父上が、死ぬはずなど有るわけがない。

だから、死んだというのは絶対に嘘だ。

そう思っただけに母上を問い詰めて、結局有耶無耶にされるだけ。

故に、自分が強くなったら。

父上の様に強くなれば、母上に真実を教えてもらえらると思っただけだ。

だが、口外が禁じられている事件について母上が教えてくれる訳も無く、結果として幼いころの努力は無下に終わっただけだった。

いや、無下に終わった訳ではなかったのかもしれない。



結局、その努力のお陰で入隊した四番隊では数年で三席にまで上り詰めたのだから。

そして、その頃から漸く考えを変えるようになった。

強くなれば、何が起きても生き残っていて、そうすればいずれは父上に会える日が来ると信じてひたすら強くなるうとしてきた。

今にして思えば、母上には多大な迷惑をかけたことだろう。

朽木家の先代当主、銀嶺様に聞いた話では、母上は数百年もの長い間父上の事を思い続けていて、漸く思いが通じてからわずか数年の内に父上は居なくなってしまったのだ。

しかも一人娘であった私を残していくばかりか、その一人娘はひたすら父上の事を探してばかり。

四番隊長としての業務もこなさなければならないのに、その上で私の面倒まで見なければならず、父上が居なくなつた日々を悲しみに明け暮れる訳など行かなかつたのだから。

母上は、二度目の喪失を経験したことになる。

一度目は父上は母上でも知らない内に行方不明になつて。

そして二度目は、母上は事情を知っているのかもしれないけれど、それでも父上は今尚帰つてこなくて。

それがどれだけ苦しいことなのか、番となるべき愛しきものが居ない私には分からないことだ。

それでも、母上の様子を見ればどれだけ苦しんでいるかは分かる。父上が帰つてこなくなつてから数日は食も取らず、睡眠もろくに出来ていないようで、目に見えてやせ細つて言つたのだ。

ここ最近では元気になつているが、最初の数年は酷いものだった。原因の一端である私が言つのも何だが。

それでも最近は、我が身を振り返るようになって、少しだけ母上の悲しみが理解できるような気がしてきた。

同期で、幼いころより仲の良かった白哉が、緋真を亡くして呆然としていた様を知っているからだ。

父上が朽木家と親しかつた影響で、幼かった私は遊び相手と言えば白哉くらいのもので、競うようにしてお互いに強くなって行った。だから、彼の流魂街に住む女性を妻に迎え入れるために掟を破らなければならぬが、どうすればいいのかという相談にも付き合ったりしたし、長年、友と呼べるような存在は彼だけだったから自然と私は惹かれてしまっていた。

多分、緋真とも仲が良かったから、彼女という膜が無くなってしまったことよって、私は白哉を昔の母上が父上を思っていたのと同じように思ってしまったているのだ。

それは、嘆かわしいことだと思う。

親友である緋真が居なくなつてから、自分の想いに気付くことになつたのだから。

しかも、どうやら母上と緋真は父上から受け継いだ、私の自分の気持ち分からないという愚鈍を理解していたようだ。

緋真の死後、私に宛てられた手紙には妹をよろしく頼む、という文言に加えて、白哉の事にまで言及してあった。

「……何だ、今日は随分と早いのだな」

「……緋真に言いたいことを言つたら、父上の所に行かないといけないので」

緋真の遺影の前で、彼女から貰った手紙を手に黙禱を捧げ終わったところで丁度白哉が現れる。

黒い死覇装に、白い隊長羽織。

首にはマフラーの様に白い布が巻きつけてあって、髪の毛は貴族の証が付けられている。

手に持っているのは梅の花が咲いている枝だ。

「梅、ですか。緋真はそれよりも妹を連れてきて欲しいと思いますか？」

「そう、だな。早く見つけてやりたいものだ」

言いながら白哉は近付いて来て、梅の花を緋真の写真の前に置く。死してから既に四年。

流魂街の生まれである緋真とは一緒に故郷に行ったりもしたが、結局彼女の妹を見つけることは出来なかった。

残っている手がかりは、緋真と似た顔の子供を探すだけ。

それだけで妹が見つけれられるかと言えば、確率的にはかなり低いものになってしまっただろう。

墓前で手を合わせて緋真に祈りを捧げる白哉を盗み見て、少しだけ良く分からない感情が胸の内に沸き起こる。

それもこれも、緋真は分かっていたみたいだという事は手紙を読んだから分かる。

母上も、一時期行方不明になった父上を探していた時はこんな風に苦しんだりしたのだろうか。

いや、私のそれとは感情の形成過程が違うから別のものなのかもしれない。

「……緋真に言いたいこと、とずっといたな。もう良いのか？」

「ええ。それに謝ったところで緋真は許してくれないでしょうから」

「謝る？」

自分の気持ちをないがしろにするなどが、父上を言い訳に使うとか。

色々と緋真に怒られてしまう事が有る。

それでも、私は父上を見つけるまでは強くなって、いらぬ感情は捨て置くと決めたのだ。

「白哉には関係なくて関係のあることです」

「問答か。……私には分からんことだ。お前と緋真が納得できるのならそれで良い。それと、一土殿の所に行くのだったか。私も一緒に行こう」

「そうですか、父上も喜んでくれると思います」

父上は、未だに死んでいないと信じているが、それでも墓を立てない訳には行かなかった。

父上も緋真と同じように流魂街の出身らしいが、今や卯ノ花家の一員。

真央霊術院の院長を務めたほどだったから、その父上が魂魄消失案件によって行方不明になったから、死んだという事にするしかない。

死んでないと信じていても、こうして墓前に足を運んでしまうのは不思議なものだ。

父上には会ったら沢山話したいことが有る。

また会う時になったら、父上は私と母上の何年もの積み積もった想いを受けとめて下さるだろうか。

出来ない、とは言わせないけれど。

## 第十一話 卯ノ花天雫（後書き）

白哉に天雫のフラグが成立。

それが果たしてどうなるのかは作者も知らない。

とりあえず分かっているのは、空白期にやることがなかったからやってみただけ。

そしてこの後は天雫の視点が主。

尸魂界編を天雫視点で終わらせてから、現世での戦いに。

……あれ？ 流れてそんな感じだったけ？

とりあえず今の所、

一土「天雫はお前にはやらんぞ白哉アアアア！」

みたいな展開が頭の中にあったり無かったり。

どうせ烈に鎮圧されるけど。

第十二話 旅禍（前書き）

暫くは中二病全開。

## 第十二話 旅禍

その日、瀨靈廷は騒ぎに包まれていた。

二日前に旅禍が現れたらしく、瀨靈門が全て降りていたからだ。通行証が無ければそれは自動的に降りるものである。よって旅禍が流魂街に侵入を果たしたという事が分かった。

そしてその旅禍を三番隊長が退けたらしく、そのことについて緊急の隊首会が行われる。

が、その途中で今度は緊急警報が鳴り響いて、瀨靈廷に旅禍が侵入してきた。

遮魂膜を奇妙な霊子体が通り抜けてそれは四つに分散して旅禍の侵入に対して瀨靈廷を守護していた護廷十三隊は緊張に包まれていた。それは護廷隊の中でも特に十三番隊に現れていることであり、それは隊長がいつもの持病で隊首会を欠席している中、相手は三番隊長から生き延びた実力者だと分かっているからだ。

その上、遮魂膜にぶつかれば消滅する筈だったのが通り抜けて四つに分かれて吹き飛んだのだから。

「副隊長、どうしますか？」

「……あれを追います。第五席から第十席までは私に、残りは清音と仙太郎が指揮して守護配置のままに」

「了解しました！ 副隊長！」

「ああっ！ あんた何一人で指示受けてんのよ！ 私が副隊長に」

そうしてから十三番隊副隊長 卯ノ花天晴は五人の部下を率い

て南の方角に落ちた一つの光を目指して走る。

長い黒髪は母から受け継いだもので、それに見合うだけの背丈は父から受け継いだものだ。

女性死神の中でも、180を超えるほどの身長を有しているのは天栗と四番隊の副隊長ぐらいだろう。

母が隊長を務める四番隊で二足飛びに上位席官にまで上り詰め、現在は十三番隊の副隊長に。

数百年に一人の天童と呼ばれた十番隊長に比べれば昇進の早さはそこまででもないが、しかし一般隊士に比すればその昇進はかなり早いと言える。

上流貴族、卯ノ花家に生まれたことで、両親から英才教育とも呼べるだけの訓練を受けて、真央霊術院は入学も果たすことなく護廷隊に入隊。

母から受け継いだ才能は、霊力を回復鬼道に使えるだけのものがあつたので四番隊に入隊し、斬魄刀の解放までを即座にやってのけて、十三番隊の副隊長が殉職してから数年でその副隊長に就任した。今の副隊長の中では割かし古株と言える。

だがそれも、彼女の實力あつてのことであるし、その人柄ゆえに多数の人から好まれている。

男から、好意を告げられることだって少なくはない。  
が、天栗にはそういったものに構っているひまはなかった。

百年前。

父上が護廷隊から呼び出されるとある事件の始末特務部隊に選ばれて流魂街に赴き、そうして帰ってくることはなかった。

事件の真相は知らされていない。

母上はどうやら事の顛末を知っているのかもしれないが、教えてはくれなかった。

だけど、それだけで分かる。



死んだのであれば母上もそう言うてくれるはずだし、墓も作られるはずだ。

なのにそれが無いという事は、父上はまだ生きていたという事。どうして帰ってこないのかという事は分からないが、そこにも何かしらの理由があるのだろう。

そうでなければ帰ってきて、昔のように頭を撫でてくれるはずなのだから。

「ッ！ 全員抜刀！」

角を曲がったところで報告にあつた男を発見する。

オレンジの髪に、出刃包丁のような形状の巨大な刀身、鞘も柄も無い斬魄刀は壁に立てかけてある。

あの男が三番隊長から逃げおおせたという死神の恰好をする男か。確かに靈圧は上位席官に並ぶだけのものがある。

そしてその男の横に倒れているのは……十一番隊の三席か。

「斑目三席！」

第五席がそうやって声を張り上げて、彼は返事をしない。斬られて死んだか、或いは気絶しているだけか。どちらにしてもあの男を斑目三席から引き離す必要がある。

「破道の四 白雷！」

構えを取ったオレンジ髪の男に対して、天雫は指先から一条の雷を放って牽制する。

斑目三席に被害が及ばないように、威力はかなり抑えてある。

そうして、オレンジ髪の男はそれを斬魄刀で受け止めて、その衝撃によって少しだけ斑目三席から距離を取る。

今の攻撃に反応出来たという事は、最強の戦闘部隊を自称する十番隊の三席を倒したのは実力によるところか。

斬魄刀の始解をしているところを見ると、どうやら上位席官の実力はあると思っても良いようだ。

「斑目三席をお救いしなさい！」

「はっ！」

天霏は瞬歩で斑目と男の間に入り込んで立ちふさがり、油断なく刀を構える。

市丸三番隊長から逃げおおせて、今こうして実際に十一番隊の三席を倒すほどの実力者だ。

いくら自分が副隊長でも、油断はしてはいけない。  
それは母から何度も教わっていることだ。

何の目的で瀨霊廷に侵入したかは知らないが、部下を救うために十三番隊が必死になって動いているこの時に侵入した旅禍は許せない。

隊長も、清音も、仙太郎も、朽木ルキアを救うために必死になって中央四十六室にかけ合っているこの時にわざわざ侵入するなど何と時期の悪いことか。

今でなかつたら天霏は、自分でこの男を見逃していたかもしれないと思う。

状況的には斑目三席を四番隊の救護詰所に運ぶのが先であるし、三席がやられている以上は数をそろえたところで五席以下は当てには出来ないだろう。

その上で、十一番隊の三席ともなれば他の隊の副隊長にも、場合によっては匹敵するほどの力量だ。

五席から十席までを率いて来たのは失敗だっただろうか。

「破道の六十三 雷吼炮！！」

斬魄刀から手を離して、それが地面に刺さると同時に詠唱が終了して両の掌から相手に向けて雷を帯びた爆砲が放たれる。

着弾すると同時に放電を開始して攻撃半径を広げるが、詠唱破棄とはいえ、鬼道名に入っても避けなかったことと、距離が近かったことが幸いしたのか、威力は先ほどの白雷と同じように低めだ。

それは此処が開けた場所ではないという事と、余りに被害を拡大させてしまえば隊の出費が増えてしまうから。

こんな狭い道で六十番台の鬼道を全力で使ったら、あたり一面が吹き飛んでしまう。

「ハア……ハア……」

威力を抑えたから生き延びたのか、それともあの大きな斬魄刀の能力を何か使ったのか、荒い息を吐きながらもしっかりと立っている姿が視界に映る。

余り被害が拡大しないようにしたとはいえ、六十番台の鬼道だ。

なにも抵抗をせずに喰らったのであれば、霊圧硬度によっては消し炭になってもおかしくないはず。

やはり、どう見立てても副隊長クラスの實力の持ち主だ。

「仕方ないですね」

その瞬間、天雫の姿はぶれて見えただろう。

瞬歩に特殊な回転を加えて相手の背後に回り込む閃花。

それを用いて旅禍の背後にまわり、意識を奪うために刀の峰の部分で首筋を打とうとする。

「朽木白哉と同じ技か。俺にはもう通用しねえ！」

「ッ！」

刀身で受け止められて、そのまま反撃に転じられる。

天雫はそれに反応して再び距離を取り、実力を見誤っていたことを悟る。

敵の口から六番隊の隊長の名前が出て来た。

そして、実際に彼の得意とする技を使ってみたが、それも難なく受け止められる。

これは副隊長クラスという評価も改めなければならないかもしれない。

副隊長クラスの中でも、卍解を会得するまであと一歩ということころまで来ているくらいの者と同じくらい。

それならば、此処で戦うのは得策とは言えない。

旅禍の侵入に対して今回は斬魄刀を持ってこれたが、しかし副隊長、隊長の斬魄刀解放までは許されていないはずだ。

斬魄刀を解放せずに目の前の旅禍と戦うとして、勝率は高く見積もって五割。

相手の能力も分からず、こちらは味方を守りつつ戦わなければならないのだからもう少し低いかもしれない。

「……」

「あ、おい！ 逃げんのかよ！」

「今のままで勝つためには相応の覚悟をしなければなりません。私は斑目三席の治療もしなければならぬ身。見逃してあげるだけです」

刀を納めて、天隼は再び瞬歩で移動してから、隊士を率いてすぐにその場を退散する。

縁があればまた会う事もあるだろう。

そうなったら、今度は斬魄刀の解放が許されていて、場所に気兼ねせずに戦えることを祈っておく。

反応は上々、霊圧も中々。

何をしたのか知らないが、彼の足元にはこちらに向かって真っ直ぐな線も入っていたから、おそらくは何かしら能力を使ったのだろう。

斑目三席に勝ったのであれば、これから先の戦闘次第では化けるかもしれない。

そうなったら戦ってみたいものだ。

美味しいものは後に残しておくタイプだ。

それは自分でも自覚している。

だから、彼を見逃したのは状況と実力を考慮に入れての冷静な判断だと思っているが、それも少しだけ含まれているのかもしれない。戦いを楽しむなどという性格は、母上と父上のどちらに似てしまったのか。

前線に行くことの少ない母上では絶対にはないだろう。

そうになると、父上か。

もう一回会った時に聞いてもらおう愚痴がもう一つ出来た。

## 第十二話 旅禍（後書き）

という事でいきなり尸魂界編に突入。

暫くは天雫の視点。

そして未だにキャラが中々定まらない。

はてさて、どうしたものか……。

それはともかくとして、早めに終わらせてリリカルやりたいなあ。

ブリーチはストーリーが立て難い。

ただ戦ってるだけだし。

色々とキンクリして「……そう、アレは 年前のことだ」的に終わらせても大丈夫だろうか。

### 第十三話 副題が思いつかなかった

天栗は、十一番隊の三席を四番隊の総合救護詰所に運んでから、十三番隊の隊舎に戻る。

彼の斬魄刀の鞘に血止めの薬が入っていることを知っていなかったら、そして天栗が元四番隊で、母の教えによって鍛え上げられた四番隊の上位席官にも劣らぬ治癒能力を持っていなかったら、どうなっていたことか。

あの血の量であれば、誰かが通りかかるのを待っていたら失血死していただろう。

或いは、天栗がああ戦いに執着して決着がつくまで剣を交えていたら、また別の結果になったかもしれない。

しかし、応急の処置と四番隊での処置が幸いして、命を取り留めたのだから結果としては良いと言っても良いだろう。

とはいえ、重傷の為戦線を離脱することには間違いないのだから。

「ご報告申し上げます！ 各隊副隊長は副官章を付けて二番即進室に待機！ これは総隊長殿よりの伝令です！」

「……分かりました。すぐに向かいます」

一番隊からの伝令を受けて、天栗は一旦隊士たちに出していた指示を切りの良いところで中断してから、隊舎の中で自分にあてがわれている部屋に向かう。

とても外見には年頃の乙女の部屋ではなく、その部屋の中は質素なもので統一されている。

それは光ものや調度品の数々など、およそ女性が好むようなものに触れる機会が少なかったからだ。

父が消えてからはずっと強くなればまた会えると信じて修行にはげみ、そのおかげでそういったものに触れる機会はなく、今はこうして副隊長にまで上り詰めることができた。

そんなことを考えながら部屋の一番奥、いつもはそこで書類整理などの仕事をする机の裏に回って、右側の引き出しの一番下からいつもは使わない副官章を取り出す。

副隊長の証である副官章など、隊長就任式などの式典の時にしか使わないから滅多に引き出しから姿を見せることも無い。

その副官章を付けてこい、というからには護廷は今回の旅禍の侵入事件をそれなりに重く見たという事だろうか。

やはり、あの時のオレンジ髪の少年を逃すべきではなかっただろうか。

「父上、行つて参ります」

机の上、写真立ての中に映っている大柄の男に声をかけてから斬魄刀を壁にかけたままにして部屋を出る。

副官章をつけてこいとはいえ、斬魄刀を携帯しろとは言われていない以上、置いて行かなければならない。

万が一にも旅禍が侵入して持つていくなどという事は考えられないが、念の為に部屋には鍵を付けておく。

そんな鍵を付けたところで、刀で切られてしまえば侵入は容易なのだが、それでも無理に突破しようとするればいくらか音は立たざるを得ないはずで、そうすれば隊士たちが駆けつけてくれるだろうという淡い期待のもとだ。

「清音、仙太郎。後のことは任せましたよ」

「はっ！ 副隊長はどこへ？」



「一番隊舎です。副官章をつけて来いという命が下ったので。くれぐれも隊長に迷惑はかけないように」

そう言ったところで彼らは二人の日常茶飯事となっている張り合いが隊長に迷惑をかけていることなど気付いていないのだろうなあと思いつつ、十三番隊舎を出て一番隊舎に向かう。

途中で旅禍に会うという事にはならないだろうか。  
それが一番の心配だ。

今は当然斬魄刀も持っていないし、旅禍の中にあのオレンジ髪の少年以上に強い者がいたら太刀打ちすることは難しくなるだろう。

まあ、十三番隊から一番隊に向かうまでの間には当然のように十三番隊の隊士と一番隊の隊士が警備についているからそんな心配をする必要も無いのだが、

それに死神の戦闘術は斬魄刀だけではない。

斬・拳・走・鬼の四つから成る戦闘術は、全て基礎となるところは母上から叩きこんであるし、副隊長として不十分なところが無いように昇華してある。

たとえ斬魄刀なくても、白打、歩法、鬼道さえ使えば十分とは言えないでも戦う事は出来る。

母上の話では、父上も母上もその全てを魂魄の限界とも呼べるところまで鍛えたらしい。

二人の娘ならば私だって隊長格に匹敵するだけの戦闘能力がいつかは身につくはずだ。

剣道に関して言えば、母上から直伝されているから若しかしたら父上も超えることが出来るかもしれない。

母上の話では、剣道に関してだけは母上の方が一步上手の様だし……でも、それってもしかして母上が意固地になっているだけなのだろうか。

そんなことを考えつつも、無事に一番隊舎に到着して、二番即進室を目指す。

感じる霊圧は自分を除けば十二。

十一番隊の副隊長はこの騒ぎだから、いつものように隊長の背中に乗って旅禍を探し回っているだろう。

そう考えると、数は合わなくなるから、おそらくは定時報告に誰かが来ているのか。

という事は、どうやら旅禍との戦闘になった自分が最後か。

今いる副隊長の中では、副隊長に昇進した時期はそれなりに遅い方だが、死神として働いているのは昔からだったからそれなりに古参。

だけど、この場合は古参なのに副隊長に昇進するのが遅いから頭を下げながら入った方がよいのだろうか。

などと考えながら入ろうとすると、定時報告を終えて出て来た

「伊江村三席、お久しぶりです」

「卯ノ花副隊長！ お久しぶりです！」

「定時報告ですか？」

「あ、はい！ 今ご報告いたしますか？」

「いえ、その紙を渡してもらえば自分で読みます。どうも。……斑目三席はやはり戦線離脱ですか」

「肩から胸にかけての傷が深かったものですから……卯ノ花副隊長の処置が遅かったらどうなっていたことやら」

自分は応急の処置をしたただけだ。  
斑目三席が無事であったのなら、それはやはり彼の気力の問題だろう。

あれだけの傷を負ってまだ息があったのだから凄い生命力だ。  
それに、後を引き継いで処置をした母上の回復鬼道が凄かったのだろう。

定時報告の紙を受け取ってあらかじめ読んでから、それを返して部屋に入る。

そこには自分と十一番隊の副隊長を除いた副隊長達。

「お久しぶりです、皆さん。どうやら私が最後のようでしたね」

「天雲さん。最後って言うか集会はこれで終わりですよ」

「……？ 副隊長は此处で待機という命ではないのですか？」

「いえ、定時報告を一度に受けるためにここに集合したようですよ。と、中に入って挨拶をしたところで勇音にそんなことを言われる。つまり此処に足を運んだのは全くの無駄足に終わってしまったよ。うだ。

というか、定時報告の為にだけに副隊長を集合させるってどういう事なのだろうか。

他にも十一番隊の壊滅による隊の配置の変更とかを話し合ったのかもしれないが。

しかしそんな連絡だったら地獄蝶を使えばよかったのに。

「それなら何か変更されたことなどはありましたか？」

「いえ、特には。それより聞きましたか？ 斑目三席が旅禍にやられたそうです」

「ええ、私が旅禍と戦って彼を四番隊に運びましたから」

「そうでしたか。流石は天栗さん……え？ りよ、旅禍と戦ったんですか!？」

勇音が大声を上げて驚くと、中にいた全員が驚きの表情をする。そんなにびつくりすることだろうか。

別に旅禍と戦ってやられたとか、倒したとかそういう話ではないのに。

「まあ、斑目三席の処置もあつたので途中で退きましたが。かなりの実力者でしたね。皆さんもオレンジの髪の毛をしている、出刃包丁のような斬魄刀を持った少年にあつたら気をつけることです」

「天栗さんが倒せなかつたなんて……そ、そんなに強かつたんですか!？」

「雷吼炮を耐えきつて見せて、閃花で背後に回り込んだ一撃を受け止められました。斑目三席と戦った後でしたから、低く見積もつても副隊長程度の力量は備えているでしょう。私でも始解をしなかつたら勝率は五割だと考えています」

「天栗さんで、五割……」

ゴクリと唾を飲み込んだ音が伝わってくる。

五割は少し言いすぎかもしれないが、それでも敵の実力を高く見ることは、低く見ることよりもずっといいことだ。

副隊長クラスであれば旅禍など全く問題ないと思っているような者がこの中にいればの話だが。

この中にいる何人が果たして旅禍とぶつかるとか。

願わくば、あの少年が強者との戦いを経て自分よりも少し強いくらいになって欲しいものだ。

そうなれば倒す意味が格段に増える。

実力が少し上の者との命がけの戦闘は、自分が強くなるためには一番有効な手立てなのだから。

そうすれば、また一歩父上に近づくことが出来る筈だ。

第十三話 副題が思いつかなかった(後書き)

どうでもいいことだけど~~~~~文字。

切りがよかったので中途半端なところで終わらせてみた。

……あれ？ 矛盾してる。

ま、良いか。

## 第十四話 夜明けの惨劇

旅禍が侵入してきてから既に四日目。

その旅禍達によって倒されてしまった主な面々としては、十一番隊の三席、五席、そして六番隊の副隊長。

副隊長が倒されたという事で上位席官には常時斬魄刀の携帯と、戦時の全面解放が認められて。

そんな翌日に、悲劇は起こった。

「キヤアアアアアアア！」

突然の悲鳴。

それを受けて、集まっていた副隊長達は一斉に駆けだす。

一般隊士ならまだしも、副隊長の悲鳴などただ事ではない。

「雛森君                    ツ！ バカな！」

まず最初に現場に付いた吉良が雛森に声をかけて、そして彼女が叫んだ原因である惨状に気付く。

目の前、言うにはだいたい高いところに、藍染隊長が串刺しにされていた。

流れ出ていた血は既に凝固してしまっていて、霊圧も感じられない。

「藍染隊長……いや、いやです……藍染隊長！……！」

泣き声から外れて、既に慟哭と言っても良いほどの声を雛森は口から出す。

項垂れるようにして両手は地面に。

副隊長として藍染隊長に心酔していた彼女であれば気を失っても可笑しくはないほどの状況だが、良くも持ち堪えている方だと天栗は思う。

隊長格が串刺しにされて殺されているなど尋常なことではない。旅禍の力量を見誤ったか。

そんな思考が頭の中を駆け巡って、まともに状況の判断が追いつかない。

それは他の副隊長達も同じようで、誰も動けずにいた。

「何やあ？ 朝っぱらから騒々しい。おや、これは一大事やね」

そしてそんな状況を碎くかのようにして副隊長達の背後に現れたのは三番隊長。

半袖の白い羽織は風に揺れて、彼もまた同じようにこの状況を把握するのに手間取っている 様には見えず、いつもの様なうすら笑いをしている。

同じ隊長格が殺されたというのにこの落ち着きよう。

それを見てか、或いは別の理由があったのか、天栗が気付いた時には雛森は刀に手をかけて走っていた。

「お前かアアア！」

そして、三番隊長と雛森の間に吉良が割り込む。

天栗が反応するよりも早くに雛森を止めて見せるとはたいしたものだ。

「吉良君……どうして？」

「僕は三番隊副隊長だ。どんな理由が有ろうと、隊長に剣を向けることは僕が許さない」



そして、それを見た市丸は何処か得消えるつもりなのか、雛森の相手を自分の副隊長に任せるようにして背中を向けてすたすたと歩いて行く。

幸か不幸か、そんな事態に天雫の頭は既に思考の渦に呑みこまれていた。

どうして雛森が三番隊長に斬りかかったのか、何で三番隊長は此処からいなくなるうとしてしているのか。

しかし天雫が色々と考えている間にも無情に事態は進行する。

「……お願い、どいてよ、吉良君」

「それはできない」

「どいて！ どいてよー！」

「駄目だ！」

「どけって言うのが分からないの!？」

「駄目だというのが分からないのか!！」

口論は激しくなり、ついに雛森は斬魄刀を解放してしまう。

弾け、飛梅。

その声とともに彼女の斬魄刀は始解されて、火の玉が発せられて爆発を起こす。

続けざまに二発目を撃つと、それは三番隊長の横を抜けて、建物に当たり、三番隊長は足を止める。

そして天雫は、自分で気付くよりも早くに斬魄刀に手をかける。何に反応したのか。

しかしそれを考える前に、戦時解放が許可されているとはいえ、同じ死神に向けて解放してしまつたらそれは許可の範囲を超えているのではないかと考えなおし、即座に鬼道に頭を切り替える。

「縛道の六十二 百歩欄干！ 縛道の七十五 五柱鉄貫！」

詠唱破棄の六十番台に七十番台。

まずは最初の鬼道で空中に飛んで斬魄刀を解放した吉良を、そしてその直後に地面に足を付けたまま構えていた雛森を、それぞれ縛道で捉える。

完全に不意を突いた縛道であつたから捉えきることができたが、二人とも頭に血が上っていないなければこう上手くは行かなかつただろう。

いや、或いはそれは天霽が自分でそう考えているだけなのかもしれない。

副隊長の中では割かし古株とはいえ、その前までは四番隊ですつと四番隊で三席を務めていて、副隊長の座に空きがなかつたから就任が遅れただけの話だ。

実力的には隊長格。

しかし護廷十三隊に空きがないために、天霽は長い間副隊長のままだ。

そしてその長い間、副隊長のままだったから彼女は自分の力を甘く見積もりすぎている。

両親ともに隔絶たる霊圧を持っている隊長格の死神にして、その戦力は歴代の隊長格の中でも五本指に入るほど。

そんな親を持っていて霊圧が低い訳がなく、天霽もまた、自らに与えられた天賦の才と、そして父を目標として努力し続けたおかげで、今や実力は隊長格に匹敵する。

それでも尚、彼女が自分の実力が未だ隊長格には及ばないと誤信

しているのは、そもそも隊長格として彼女が思っているのが、父母の実力が相当だと思っっているからだ。

「二人とも、抑えなさい。それでも尚、剣を引かないのであれば

」

天隼は、地面に這い蹲るようにして縛られている二人の真ん中にゆっくりと歩いて行きながら、腰に差している斬魄刀を抜く。

ゆったりとした動作で引き抜かれたそれは、日の光に当てられて淡く輝き、その存在感を見せつける。

平均的な長さに、代り映えのしない柄。

始解もされていないのだから当たり前だが、しかし天隼の斬魄刀からはまるで解放したかのように霊圧が発せられる。

それは、隊長格のそれと遜色は全くない。

「今、この場で斬ります」

チャキ、と嫌な音が鳴ってから、刀身の面が二人の目を映す。

よく磨かれたそれはそれぞれ、地面に縛られている二人の副隊長の姿を映し出していて、天隼以外には動こうとするものは居ない。

先ほどまで嫌な空気を放っていた三番隊長も例外ではなく、頭に乗血の上つていた二人など、直接に近い距離で霊圧を当てられて身動きなどもとより出来るはずもなかった。

「……賢明な判断です。私も貴重な戦力を失う結果にはならず不安堵しました。市丸隊長、この者たちは如何いたしましょうか？」

「そやね……君の好きに決めてもらうてええよ」

「と言われましても同じ副隊長を拘束する権限がありませんので…

…日番谷隊長に決めて貰うとしますか」

天雫はそう言いながら、斬魄刀を仕舞い、瞬歩で近づいた十番隊長に聞く。

既に二人にかけていた縛道は解いて、最早自分の出番はないかと考える。

そのあとで十番隊長から吉良と雛森の二人について拘置の指示を受けて残っていた三人の副隊長が連れて行き、十番隊長は総隊長への報告に。

天雫は藍染隊長を降ろしてから現場の保存の役目を仰せつかって早速近くに来ていた五番隊の隊士たちに指示して藍染隊長の身柄を四番隊舎に連れて行かせる。

死体の検視は四番隊の役目だ。

回復鬼道を使う四番隊の者たちは一番人体に通じているし、隊長格の死体ともなれば四番隊長の母自ら検視を担当しなければならぬだろう。

その際には、雛森に続いて現場を目撃した者として報告もしなければならぬ。

気になることもあるのだ。

隊長格が殺されるなどただ事ではない。

しかも藍染隊長は隊長格の中でもかなりの古株。

古株という事はつまり同じ隊長格の中でも強いという事。

そして、その隊長格を殺すとなれば不意打ちをするにしても同じ隊長格でなければならぬ。

それなのに、藍染隊長の身体に付いていた傷は串刺しにされていた浅打ちでの一撃だけで、他には傷が見当たらなかった。

そんなこと、母上にも出来るかどうか。

しかもアレだけの血を流していたという事はつまり、あの場所で

殺されたということであり、あの場所まで藍染隊長以外には見つかることも無く来たという事になる。

「……まあ、考えても分からないことです。母上に考えて貰うつもりです。」

## 第十四話 夜明けの惨劇（後書き）

リリカルをやりたいならブリーチからリリカルに飛ばす設定を無くせば？という感想。

……確かにその通りだ！！

という事で同時並行で初めてしまっても構わないのだろうか。

そっちが書いてて楽しくなってきたらこっちは置き去りになる可能性が否めないが。

どうせこの小説そこまで面白くないから良いよね？

と、反動を誘ってみる。

## 第十五話 vs 旅禍

八番隊、演習場。

八番隊の敷地の中で広く区切られたその場所では八番隊の三席が旅禍を待ち受けていて、しかしその三席は十一番隊の者とは実力のそれが全く違っているのです、大柄な旅禍の男に吹き飛ばされた。

旅禍は懺罪宮に向かっていているらしいという情報は既に副隊長で集合していた時には報告を受けていたことであつたから、天雫は藍染隊長の遺体を四番隊舎にまで運んで、その報告を終えた後で十三番隊の隊舎に戻ろうとして、途中で八番隊の隊舎に寄つた。

理由はただ一つだ。

そこで、旅禍が霊圧を発して戦闘をしていたから。

そして天雫が八番隊の演習場に入った時、丁度旅禍の男は三席を一撃で吹き飛ばしたところで。

「どうも。十三番隊副隊長、卯ノ花天雫と申します。以後よろしく」

彼が向かう先にある門の下に天雫は瞬歩で先回りして、門を塞ぐ。身長は女性死神の中で二番目の長身の自分よりも大きく、浅黒い肌の体格のいい男。

前髪で目が隠れていて、右手には何か能力だと思われるものが付いている。

おそらくは、霊力を塊にして飛ばすものだろう。

「十三番隊……副隊長？」

「その通りです。ちなみにこの演出をしてくださっているのが八番隊副隊長。そしてその隣で不貞腐れているのは八番隊隊長です」

八番隊隊長、京楽春水は直前に天雫によって出番を奪われたことで手にとって分かるように落ち込んでいた。

副隊長の彼女が散らす花びらは凜とした、それでいてどこか嫺やかさを兼ね備えている天雫の姿を装飾する。

事前の打ち合わせなど全くなかった。

ただ単に、天雫が自分の隊舎に戻ろうとしたところで旅禍を見つけて、藍染隊長を殺すほどの力量の持ち主が旅禍の中にいるのかと思っ、実際にその一人ともう一度戦う事で、誰が一番強いのかを知りたいだけだ。

その思考の仕方は、荒くれが集う十一番隊のそれと違わないものだが、見目麗しい外見に反したそれは理解できるのは彼女の母一人だろう。

「申し訳ありません京楽隊長。後で酌に付き合ってあげますので」

「あ、本当？　ならボクの愛しの七緒ちゃんと三人で　」

「　私は断固として遠慮させていただきます」

「……連れないなあ」

靈圧はそれなりに高い。

十一番隊はともかくとして、他の隊であれば上位席官など先ほどやってのけたようにいとも簡単に倒すことができるだろう。

副隊長にしても、相性の如何によっては倒すこともそう難しくないかもしれない。

しかし、隊長格が相手では絶対に無理だ。

という事は、目の前のこの男が藍染隊長をやったということではないということか。

侵入者は確か五人。



うち一人は目の前に、そしてもう一人はオレンジ髪の死神。彼も藍染隊長を殺せるほどの力量の持ち主ではなかった。

という事は、残りの三人の内に強いものが居るとい事なのだろうか。

「さて、その旅禍の貴方に聞きたいことが一つ。貴方がたの中で一番強いのはどなたですか？ 出来ればその方の特徴も教えていただけると助かります」

「……どういう意味だ」

「簡単なことです。貴方がたの中で一番強い者と戦って私はさらに強くなりたい。その為には他の隊長、副隊長達が動いている中、早くに戦いに行かなければなりません。先を越されてしまつてからは遅いですから」

「他の隊長？ 一護や他の連中も、隊長格に襲われているのか？」

一護、というのはおそらく彼の仲間のことだろう。

そしてその名前が真つ先に出たという事はその者が彼の最も大事な仲間であるか、或いは彼らの中ではリーダー的な役割を担っている者か。

後者であれば話は早い。

つまり、その一護という者が彼らの中では一番強いのだろう。だが、そんな確証は存在しないから確かめなければならない。

「その一護、という方が貴方方の中で最も強い方ですか？」

「……答える義理はない。それに……そこをどいてもらおう。急がなければならぬ理由ができた」

構えは、なかなかどうして堂に入っている。

重心は低く、膝の力は抜けていていつでも初動に入れる構え。

霊圧は右手に集中していて、何かの装備を思わせるその右手には、三十番台の鬼道でも使うというほどに。

だけど、足りない。

私と戦うには、もう少し成長してくれないと。

天掣はそう思って刀に手もかけない。

「単純明快、実に明朗。貴方が私を倒せばここを通ることが出来る。そして私が貴方を倒したら、一番強い者を教えてもらおうとしましよ  
う」

霊圧を上げる。

それでもまだ、全力には遠く及ばず。

五割にも見たっていないが、感覚としては彼の今の右手にためている霊圧とそんな色ないほど。

それを開始の合図と受け取ったのか、それとも上で酒を片手に見物を決め込んだ京楽隊長に出てこられると拙いということが分かっているのか、彼の右手に寝られていた霊子は収束して打ち出される。

「 素晴らしい」

「 うわっと！ 危ないじゃないか、天掣ちゃん！！」

思っていたよりも威力があり、そして早かったそれを、天掣は霊圧を左手の甲に集中させて上に弾く。

そしてそれはそのまま上にいた八番隊の隊長副隊長にめがけて飛来して、杯を片手に持ちながらも京楽隊長はいとも簡単に天掣によって弾かれた攻撃を建物に当たらないように横にそらす。

さすがは隊長。

これで意識でも失ってくれば約束の酌もしなくて済むかと思っただのに。

まあ、どうせ被害が及ばないだろうことは、天雲は七緒が上に同じくいた時点で把握していたから上に向かって弾いたのだが。

「何を呆けているのです。私はまだ、刀も抜いていないのですよ？」

そうやって注意を促すと、再び彼は姿をとらえようとする。

注意を促す直前まで、攻撃によって弾かれた先を見ていて、相手の姿を視界に収めきっていなかったが、やはり戦闘に関しては初心者なのだろうか。

これ以上七緒に被害を及ぼせる訳にも行かなかったから瞬歩で横に移動したが、彼には若しかしたら私が何時移動したのかも分からなかったかも知れない。

惜しいことだ。

人間にしては非常に高い素養を持っているというのに、後少し戦闘を積みばそれなりに心躍る戦いになっただろう。

今でさえ、技が一つしかないが、これから先に増えて、フェイントを混ぜることができるようになるかもしれない。

そうすれば副隊長クラスなどすぐにも辿り着いてくれるはずだ。

「ウオオオオオオオオ！！」

「甘い」

首を曲げることで頭に向かってきた霊力の塊を避ける。

その後も二発三発と放たれるそれは瞬歩を使わずとも目で見てから次の事を考えて避けることができるほどに速度が足りない。

確かに早い。

おそらく、速度としては鬼道とそう変わらないだろう。  
が、問題は彼のその撃ち方にある。

右手からしか打てないから一度撃つた後にもう一度右手を引く必要がある上に、大振りのそれに加えて軌道が直線的だから予想しやすい。

しかも遠距離で撃つ一方だから、今のままであれば撃つ直前に移動して避けることも可能だ。

「……他に何かあると期待しましたが、貴方の技はどうやらそれだけの様です。正直興ざめにもほどが有ります。私はこれから貴方の言う一護、という方を探しに行くとしましょう」

天栗は、これ以上付き合って戦っても自分の技量の向上は全く望めそうになかったので、息を切らしている男を見て嘆息する。

こんなことであれば、見たことも無い能力を使っているからと言って戦いを引き延ばして分析するのではなく、自分で鍛錬を続けていた方が幾分か良かった。

旅禍なのだし、総隊長からの命令も出ていることだ。  
斬ってお終いにするか。

そう考えたところで、しかし同時に近づいてくる小さな霊圧が裏廷隊の者であることが分かり、考え直して詠唱に入る。

「雷鳴の馬車 糸車の間隙 光もて此を六に別つ」

使うのは縛道。

藍染隊長がお亡くなりになったという事を考えたら、今の段階でこの旅禍を殺してしまうのは得策ではない。

聞くべきこともあるだろうし、藍染隊長を殺したのが旅禍でなかったとしたらそれこそ一大事だ。

確認できていない旅禍が紛れ込んでいるのか、それとも死神の中

に反乱者が居るのかという事になってしまつ。

「縛道の六十一 六杖光牢！」

六つの帯状の光が胴体を囲むようにして刺さり、彼は動きを止める。詠唱を伴つた六杖光牢。

これでもう動けることも無いだろう。

さつさと彼の言っていた一護という者を見つけに行かなければならない。

同じように十一番隊の隊長も狙っているのだろうし。

「おい、天雲ちゃん！ 裏廷隊からの報告で」

「 藍染隊長のことであれば存じております。私が四番隊舎に運びましたので」

「……そうかい」

男を縛道で捉えたところで、裏廷隊からの報告を受け終わった京楽隊長と七緒が近付いて来てからそんなことを言う。

いつもの様に、思慮している様を他人に見られないように京楽隊長は笠を深くかぶりなおして、一瞬だけ旅禍の男を見遣る。

藍染隊長の死因は刀傷であるし、霊力を固めて打ち出していた能力の彼は犯人ではないだろう。

という事は、これから色々と情報を聞き出す必要もある。

「それでは私は一護、という者を探しに行きますので」

「天雲ちゃん、一回十三番隊に戻った方がいいんじゃないかい？

浮竹もそろそろ起きるころだと思つし、今日は一回も顔出してない

んじゃないの？」

「……それもそうですね。では、京楽隊長の酌に付き合っつのは無し、という事で」

「うん。ボクとしてもその方が……えっ？」

「それでは失礼します」

「あ！ ちょっと！ 天雫ちゃん！ ……逃げられちゃったか」

## 第十五話 vs 旅禍（後書き）

目指せ、後数話で完結！

……無理か。

畜生、俺の指がキンクリしたくてキーボードの上で震えているぜ！！

つまらないか。ごめんなさい。

## 第十六話 手がかり

京楽隊長に捕縛した旅禍を任せて、十三番隊の隊舎に向かう。各隊士たちが持ち場について油断なくあたりを見回している中で、戻ってきた天栗に挨拶をしたり。

或いは天栗が隊首室に向かう途中に上位席官から報告を受けたり。その中で、十三番隊の隊舎には現在隊長が居ないどころか、三席が二人ともいなくなっているらしい報告を受ける。

どうやら藍染隊長の死の報告を受けて、浮竹隊長が何処かに向かわれたらしく、そして三席の二人がそれに付いて行ったようだ。

懺罪宮に最も近い十三番隊であればこそ、本来は旅禍と遭遇する確率が一番高い筈だったのだが、どうやら今の所目立った被害を受けている訳ではないらしい。

四席も十分に指揮を発揮しているし、別に副隊長の自分がわざわざ残って何かをする必要も無いかと思ひ、天栗はその場を後にした。

理由は二つ。

一つ目は、勿論、旅禍の内、藍染隊長を殺したかもしれない一番強い奴を探すため。

結局情報を聞き出すのを忘れたから一護、という名前を頼りに探すしかないのだが。

そしてもう一つ、こちらは単純明快。

つい先ほど、報告を受けている途中で良く知っている霊圧を感知したからだ。

霊圧の感知に関してはまだまだ修練が足りていないところだが、隊長格の霊圧にもなれば、しかもそれが幼馴染であれば否応なく戦闘に入ったその瞬間に感知できる。

朽木白哉、その人の霊圧が懺罪宮の近くにあるのを感じて、急いでそこに向かう事にしたのだ。



彼の霊圧が高まったという事はおそらくそこで戦闘があったはずなのだから。

「この霊圧は……オレンジ髪の。それに浮竹隊長」

懺罪宮に向かう途中で、浮竹隊長の霊圧に、一度だけ会ったオレンジ髪の旅禍の霊圧を感じる。

そして、旅禍の少年の方を肌で感じて、思わず向かっている途中にもかかわらず笑みがこぼれてしまう。

前に会った時よりもだいぶ成長したらしい。

霊圧だけならば既に隊長格と言っても過言ではないだろう。

しかしにやけそうになった顔を即座に引き締めてから、瞬歩で急いで向かう。

白哉の霊圧が有って、さらには浮竹隊長の霊圧もあるのだったらいくら彼でも一瞬でやられかねない。

そうになったらせつかくの戦いを楽しみにしていた私の期待が台無しだ。

瞬歩を連発するのは疲れてしまいが、この後の事を思えば無駄ではない。

今日は既に副隊長二人を止めるための縛道、そして旅禍の男と一度戦った後での縛道を使っているから、霊力としてはそれなりに消耗しているし、この瞬歩で向かったころには満足に戦うという事は出来ないだろう。

だがまあ、仕方ないこと。

そう思って漸く浮竹隊長の姿を視界に入れて彼の背後に移動して、白哉の突きさすような霊圧を感じる。

相対しているのはやはりオレンジ髪の旅禍。

「間に合わなかった……」

「おお、天霽か。久しぶりだな」

「お久しぶりです隊長。と言っても二日空けただけですが。お身体の方はもう、大丈夫なのですか？」

「ああ、動いて回る分には問題ない」

「そうですか。それは結構です」

白哉が閃花で少年の背後に回り込んで繰り出した一撃を、少年は受け止める。

どうやら此処に来る前にも誰かと戦っていたのか、腹部にはうっすらと包帯に血が滲んでいるが、そんな身体で白哉と戦おうというのか。

もう、無理みたいだ。

始まってしまった以上、白哉の戦いに参入して譲ってくれという訳にも行かなくなってしまった。

どうしてルキアが牢から出ているのかとか、血まみれで倒れている男の事とか、ルキアの傍にいる花太郎の事とか、色々と疑問は尽きないが今は観戦するほかないだろう。

「……ほう、あの子、朽木隊長の瞬歩について行ってるじゃないか」

「まだ白哉の方は本気の欠片も出していませんが……まあ、あの少年の実力もだいぶ伸びた様ですが」

「何だ、もう戦ったのか？」

「先日一度だけです。斑目三席を四番隊に運ぶために途中でやめ

ざるをえませんでした。ちなみに阿散井副隊長も倒しましたよ、彼……まあ、これで終わりですね」

視界の先では白哉が斬魄刀を垂直に構える。

千本桜を使うつもりだ。

彼の斬魄刀の能力からして、白哉の使う千本に枝分かれた刃を止めることなど不可能だろう。

そもそも、瞬歩の派生形の歩法も使っていないのだから実力差が知れているというもの、

隊長格であるのは霊圧だけだったか。

「散れ」

「あれは！」

「……貴様は！」

が、白哉が始解をしようとした直前に彼の斬魄刀は布に包まれて解放されない。

突如として現れた女性は、オレンジの服に紫の髪の毛

その彼女は白哉の斬魄刀の解放を阻止するとともに、旅禍と白哉の間に割り込む。

どうやら白哉も隊長も知っているようだが、一体誰だというのか。

「久しぶりじゃのオ。白哉坊」

「四楓院夜一か。先代隠密鬼道総司令官及び、同第一分隊刑軍総括軍団長。四楓院夜一。久しく見ぬ顔だ行方をくらませて百余年、死んだものとはかり思っていたが」

そんな突然出現した女性の経歴が語られて、天稔は漸く思いだす。そうだ。

父上の居なくなつた年に、同じく十二番隊の隊長、鬼道衆の長と一緒にいなくなつた二番隊の隊長。

随分と雰囲気が変わつてしまつていようだが。

「夜一さん。手助けしに来てくれたんだろ、サンキューな。でも悪い、退いててくれ。俺はそいつを倒さなきゃならねえんだ」

「倒す？ お主があ奴を？ 愚か者！」

その言葉で夜一は瞬歩を使い、旅禍の少年の腹に貫手を差し込む。元々開いていた傷口を狙つたのだろうか、天稔の側からは上手く見ることは出来なかつたが、旅禍の少年はその一撃で沈んだ。

「な……なにす……夜……ッ!!」

そして倒れる直前に夜一は旅禍の少年を受け止める。

つまり殺したのではなく、意識を奪つたのだ。

それを浮竹隊長は冷静に判断する。

「薬か。牙点か崩点か、強力な麻酔系の何かを、内臓に直接叩き込んだな。彼をどうする気だ、夜一？」

「浮竹……」

何と言つた僥倖か。

ここへ来たのは白哉が戦おうとしていた相手と戦つつもりで、そしてそこにはたまたま浮竹隊長もいたので丁度よくて。

そして途中で現れた旅禍の少年も成長していたから彼とも戦う事

でさらに自分を強くしたいと思っていたが、最早そんなことはどうでもいい事だ。

目の前にいるのは、百年前の事件で姿を消したうちの一人。しかも、魂魄消失案件の始末特務部隊には選ばれていないはずの一人だ。

目の前の女性が、父上の居所を知っている。

「何をしようと無駄だ此処から逃げることは」

「させない。そして、父上の居場所を教えてください」

白哉の言葉を途中で切ってから、天雫は浮竹の背後から一步前に出て霊圧を全開で解放する。

それはすでに隊長格に匹敵しているものであり、とても副隊長のそれであるとは思えないほどだ。

尸魂界の歴史上、非公式には最も霊力の多い父の遺伝子を受け継いだおかげなのか、それとも副隊長にして卍解に至っているからなのか。

或いは、父を捜すために何年も自分を鍛え上げた結果としてか。

「……卯ノ花の娘か。随分と大きくなった」

「父上は、どこです。貴方は父上の居場所を知っているはず。絶対に教えてもらいます」

「確かに知っておる。じゃが、済まぬが……ワシには言えぬ」

言えない。

つまり、それは居所を知っているという事だ。

知らないということではない。

彼女は、父上の居場所を知っているという事。

先代の隠密機動の総司令官だとか、瞬神と呼ばれていたとか、そんなことはどうでもいいことだ。

今ここで重要なのは、やっと得られた父上の手がかりが目の前に有るという事実、ただそれだけ。

「吹き荒べ　疾風！！」

腰に差していた斬魄刀を抜くと同時に、天霏は自らの斬魄刀を解放する。

戦時特例という事で、斬魄刀の全面開放は禁じられていないから、天霏はいざとなれば卍解も使う所存であった。

天霏の解放と同時に強い風が吹き抜けて行って、白哉の千本桜と同じように刀身が消える。

いや、刀身だけではなかった。

天霏が手にしていたはずの斬魄刀が姿を消していた。

柄も、鍔も、刀身も、全てが誰の視界にも映らない。

だが、確かに天霏は斬魄刀を解放して、その手に握っていることだけは確かだった。

「ハッ！」

天霏は、一歩だけ踏み込んで距離を縮めて、躊躇いも無く斬魄刀を振り下ろす。

目に見ることのできない彼女の斬魄刀は、目に見ることのできない斬撃を生んで、それはそのまま夜一に飛来する。

横薙ぎに振りぬかれたことを見てか、或いは聴覚からの音で判断したのか、それとも長年の実戦経験による直感か、夜一は何かが来たという感覚だけでそれを跳んで避けた。

その背後にいた白哉は自分が良ければルキアに当たると知ってい

るからか、手にしている刀で何とか見えない斬撃を受け止める。

白哉でも、天雫の修行に付き合っただけで何年も共に切磋琢磨して彼女の斬魄刀の能力を知り得ていなかったら今の一撃で首が離れていたかもしれない。

「ごめんなさい白哉、隊長。巻き込まないで戦う自信はないから、死にたくなかったら上手く避けて」

言いながら、天雫は次々と見えない斬撃を飛ばして夜一の動きを止めようとする。

当たっても流石に死ぬほどの威力ではない。

が、当たれば確実に動けなくなるだろうくらいの威力は有った。

狭い橋の上、夜一は瞬歩で天雫の背後に回り込んでそれをかわそうとして、しかし人を一人抱えた状態での瞬歩などで逃げ切れるはずも無く、天雫は即座に反応して背後に斬撃を飛ばす。

そしてそれも夜一が避ければ、今度は浮竹に見えない斬撃は向かっていった。

それを彼も避けたことで、背後の塔に当たって、塔が斜めに斬り取られる。

視界に入れた浮竹は流石に冷や汗を流し、天雫に話しかける。

「さ、流石にやりすぎじゃないか？　今は俺も当たってたら死んでたぞ……」

「流石は瞬神と呼ばれていただけのことは有ります。手加減は不要の様です」

聞いていなかった。

もうすでに、天雫の頭の中には夜一しか映っていない。

百年も探し続けて全く見つからなかった父の手がかりが目の前に

ぶら下がっているのだ。

何も得られなかったではこの百年の研鑽が無駄に終わることになってしまう。

「仕方ありません。此処からは私も 殺すつもりで」

霊圧は一気に膨れ上がる。

押しつぶすかのようなそれは、懺罪宮とをつないでいる狭い橋を軋ませてしまうほど。

そしてそれは確実に、本気の一撃を放つ霊圧の上がり方であるという事を、この場の誰よりも天雫の事を熟知している白哉はいち早く感じ取った。

「烈風」

「六杖光牢」

その本気の一撃が放たれる前に、白哉は縛道を使って天雫の動きを阻害する。

本来であれば彼女の事を手伝ってやっても良いというほどの心境であったが、アレだけは拙い、そんな思いが白哉の中にあった。

既に義妹を始めとして、この霊圧の被害を受けている者も少なくはない。

その上で、天雫が見境も無くあの一撃を放っていたらこちら一体の塔が全て切り落とされて崩壊し、相当の被害を出してしまう。

そんなことは技の開発に付き合った白哉が一番よく分かっている。

「白哉、離して！ あの人は父上の事を！」

「あのまま放てば浮竹を巻き込んだ上に奴は死に、情報は聞き出せ



なくなつたぞ。少しは頭を冷やせ。一土殿は無関係の者を巻き込んでまで自分の事を探して欲しいと思うような御方か」

「っ……」

白哉の言葉に漸く天雫は止まって、その隙に瞬神は旅禍を抱えたまま屋根の上に移動する。

ところどころ破けているのは、天雫の斬撃を避けきれなくて裂かれてしまったからだ。

それでも一人を抱えたままで身体にまでは届かせることがなかったのは流石に先代の二番隊隊長と言ったところか。

まだまだその実力は、この程度の戦闘では衰えを見せないらしい。

そして夜一は三日で旅禍の少年を白哉よりも強くすると言い残してから天雫の事を一瞥して、瞬歩で姿を消す。

後に残された天雫は、既に白哉の腕の中から逃げようとはせず、斬魄刀に纏わせていた風を解除して封印状態に戻し、彼が離れたところで斬魄刀を鞘に納める。

「天雫、済まぬ」

「良いです。手掛かりは掴めそうですから。それに暴走していたのは事実ですし。ご迷惑をおかけしました、朽木隊長」

「……そうか」

それだけの会話で、白哉は一度だけルキアを見てから、すたすたと歩いて消える。

その表情に浮かんでいたのは、一抹の悲しみであった様にも感じられるし、全く別の感情であったようにも感じられる。

だが、天隼はそれに気付くことはない。  
やっと手がかりを見つけたことが出来た。  
そして、四楓院夜一が生きていると分かった以上、人間界ではな  
く尸魂界にいるのだから探しようはある。  
後は、穿界門を抜けられる前に捕縛してしまえば居所を吐かせる  
だけだ。

「ッ！ ルキアさん!？」

パタリ、と前のめりになって倒れたルキアを心配して、傍にいた  
花太郎が駆け寄る。

おそらくは、白哉が消えたことで緊張の糸が切れてしまったのだ  
ろう。

傍にはなじみのある天隼もいて、浮竹隊長もいたとはいえ、流魂  
街から四大貴族に迎え入れられたルキアにとって白哉の存在は絶対  
だ。

その占める量も多い。

「おい、仙太郎、清音！ 出てきてくれ！」

「お呼びでありますか！ 隊長！」

「やっぱりついて来ていたか……いつからいた？」

現れたのは十三番隊の三席が二人。

どうやらその二人の存在には隊長も気付いていたらしい。

そう言えばあのまま技を放っていたら二人にも被害が及んでいた  
という事を今さらながら天隼は理解して、漸く冷静さを本当に取  
り戻す。

部下の命を危機にさらすところであった。

そしてその二人が隊長の質問に答えてから、いつものやり取りに嘆息して天隼の方を向いて告げる。

「天隼、治療は任せて良いか？」

「……一応四番隊もお願いします。それと、彼にも手伝わせて下さい。上級救助班の班長ですから腕は確かです」

「そうか、ならそちらは任せる。清音は四番隊に連絡を、仙太郎は、朽木を……もう一度牢に入れてやってくれ」

## 第十七話 処刑の日

処刑の日。

極囚朽木ルキアが処刑される双極の丘に集まっているのは、隊長及び副隊長がそろっているのが一、二、八だけだ。

四番隊と十三番隊は副隊長だけ。

残りのこの場に集まるべきメンバーは未だに全くそろっていない。少し霊圧を感知してみると、此処へ近づいて来ているのは白哉のそれが一つ。

残りは天琴の探知能力ではほとんど感じることもできない。

かろうじて分かるのは、三人の隊長格が戦っているという事だけだった。

そして処刑の予定時刻である正午になってようやく、白哉が現れる。

予め集まっていた隊長格の面々は全く気にしていないようだったが、幼馴染としての特権なのか、天琴には白哉がいつものそれとは全く違うという事が分かってしまう。

副隊長の阿散井を連れていないのは良いとしても、いつもは首に巻いている銀白風花紗がない上に、表情をひた隠しにしようとしているのが分かるように、固く唇が結ばれている。

緋真の墓前でこの処刑について悩んだのか、どうやら満足な睡眠もとれていないようだし、霊力は万全とはほど遠い。

それを見て、天琴は白哉に声をかけようとはしたが、処刑は総隊長の言葉とともに始まって機を逃す。

「朽木ルキア。何か言い残しておくことはあるかの？」

「はい……一つだけ」

そしてルキアが願い出るのは、瀟靈廷に侵入して彼女を救おうとして動いた旅禍を生きて返すこと。

そんな願いはまかり通るはずもないが、ルキアはそれを願い出る。彼女が嘆願をする中で、天隼は必死に浮竹隊長の霊圧を探知する。中央四十六室への進言が全く通らなかつた今、残されているのは双極の破壊という事で昨日から破壊するための道具の封印を解くことに隊長は専念していて、怪しまれないために予め副隊長の天隼は先に双極の丘に行っておき。

そして万が一にも間に合わないような時が有つたら八番隊と共に処刑を止める動きをする予定だったのだが、その万が一が起こりそうだ。

双極は既に解放の段階に踏み切られていて、かなりの霊圧が発せられている。

「良からう。お主の願いどおり、処刑の終わった暁には、旅禍どもを無傷で帰らせてやろう」

「ありがとうございます」

そしてそこで丁度、卯ノ花烈 母上がやってくる。

今までどこにいたのか、副隊長の勇音でも居所を知らなかつたらしい。

旅禍の三人が捕えられて、尋問から刀を使うのはオレンジ髪の少年一人だと分かつたから、藍染隊長の死がますます分からなくなつた今、再び死体や現場を調べていたのかもしれない。

このタイミングで藍染隊長が死んで、しかも中央四十六室には進言が全く通らないという状況だから何が起こってもおかしくないのだから。

「双極を解放せよ！」

総隊長が言うと、鬼道衆によって双極の矛にかけられていた縄が解かれて、双極が解放される。

封印になっていた縄は双極の丘から落ちると、かなりの強度を持つて地面に突き刺さる。

そしてルキアはまるで十字架にかけられたキリストの如く、磔の姿勢を取って宙に浮かびあがる。

未だ、浮竹隊長は現れない。

彼が現れる前に矛は姿を変える。

それは炎で作られた鳥。

全ての隊長格がそれに驚いて見上げる。

「燬？王。双極の矛の真の姿にして、極刑の最終執行者。彼が罪人を貫くことで極刑は終わる」

総隊長の説明の中、未だに兆しの見えない浮竹隊長の霊圧を思つて、天雫は自らの斬魄刀に手をかける。

が、その直後に京楽隊長と視線が有つて、首を振ることで止める。自分の斬魄刀の能力ではアレを止めることは出来ない上に、助長してしまう恐れもある。

そして何よりも、京楽隊長が自分を止めたことがこの場に近づいて来ている霊圧のせいだと分かったからだ。

ずっと、霊圧探知をしていたからいち早く気付けたのかもしれない。

炎の鳥を一本の斬魄刀で受け止めたのは、オレンジ髪の少年。

確か名前は、右手から霊圧を発する少年の言っていた、一護だ。

斬魄刀百万本の攻撃力に値する双極を受け止めるとはたいした斬魄刀だ。

切り結んだ時にも感じたことだが、それが彼の斬魄刀の能力の一つでもある、硬度なのだろう。

「……天琴ちゃん、もしかしてあの坊やが旅禍の彼が言ってた」

「はい。間違いありません」

「そっか……結局間に会ったのは彼らの方だったって訳だね」

近づいてくる霊圧は一つ。

良く知っている者だ。

双極が第二撃の為に距離を取っているが、一応間に合うだろう。

浮竹隊長は京楽隊長や総隊長、母上と並んで最古参の隊長格の人だ。

瞬歩の速さは折り紙つき。

「浮竹隊長!？」

「よお、この色男。随分待たせてくれるじゃないの」

勇音が驚いている中、漸く秘密兵器を持ってきた浮竹隊長が現れて縄を双極の首に巻きつける。

どうやら清音と仙太郎は連れてこなかったようだ。

だが、これから起こることを考えたらあの二人が居た方が足手纏いになってしまうのだから仕方ない。

「すまん。解放に手間取った。だが、これでいける!」

一本の縄は両端が地面に、そしてそれは浮竹隊長が地面に突き刺した盾の様なものに直結している。

二番隊の隊長がいち早くその文様が四大貴族のものであることを見抜いて、自分の副隊長に止めるように言うが、遅い。

浮竹隊長も京楽隊長も同時に斬魄刀を盾の様な物の切れ目に走らせると、霊圧は綱を伝って駆けあがり、双極は破壊される。

そしてその直後に生まれた時間の停止の様な驚きの中で、旅禍の少年は双極の礫架を破壊して見せる。

あんなこと、自分を含めて此処にいる面々のほとんどが出来ないことだろう。

総隊長や父上であれば全く問題はないのかもしれないが。

さらに、事態は急速に展開を見せて、現れた六番隊の副隊長に旅禍の少年はルキアを投げつけると阿散井はルキアを連れて逃げる。

ルキアを助けるための行動だと割り切れば良いのかもしれないが、しかし一步間違えたらルキアが死んでいたかもしれないと思うと、旅禍の少年を睨まずにはいられない。

大切な親友の妹になにをしてくれるというのか。

「何を呆けているのだっつけ共！ 追え！ 副隊長全員でだ！」

碎蜂隊長の言葉によって、一、二、四の副隊長がそれぞれ追いかけて走る。

当然、残っている七緒と天霰は反逆の立場なので追いかけるはずもない。

が、旅禍の少年がその三人の副隊長の間に割り込んだ瞬間に、さらにその間に割り込むようにして瞬歩を使って三人の副隊長に立ちふさがる。

当然、旅禍の少年には背中を向けた状態だ。

「一護、と言いましたか。この三人は私が引き受けましょう。貴方



は白哉の寝ぼけた頭を醒ましてやって下さい」

その事態に付いて行けなかったのは副隊長が三人。

が、その思考を阻むようにしていち早く白哉は一護に襲い掛かる。白哉の万全ではない隊長にしる、素早い一撃を何なく受け止めることができたという事は、どうやら白哉の方は彼に任せても大丈夫そうだ。

どうやら因縁もあるようだし。

それに、私と白哉では情が邪魔して戦うことなどできるはずもない。

白哉と一護が少し離れた場所へ、闘いながら移動するのを見送るのは、阿散井を追いかけに来た筈の副隊長三人。

「勇音に雀部長、大前田、両副隊長。私を前にして呆けていても良いのですか？」

「ッ！ 穿て！ 巖靈丸！」

「ぶつつぶせ！ 五形頭！」

「……。奔れ！ 凍雲！」

三人の副隊長がそれぞれの斬魄刀を解放して漸く、天琴は自らの斬魄刀を抜く。

が、まだ解放はしていない。

天琴が斬魄刀を解放することを恐れてか、それとも先手必勝という事なのか、まずは大前田が自分の斬魄刀である鉄球を天琴に投げつける。

「遅い」

一步、横にずれただけで天隼はその鉄球を避けて、そこに出来た隙を逃さないように雀部長がレイピア状に変化した斬魄刀で胴体を突こうとする。

それを、今度は右足を軸にして回転することで刃の側面に回り込んで、そのまま天隼はすり抜けるようにして避ける。

元上司という事もあって攻撃することを躊躇っていたのか、しかし此処へ来て漸く勇音も攻撃に参加して三人が一度に攻撃に回る。天隼は、ただそれを避けるだけ。

「……三人とも、あまり私をがっかりさせないで下さい。これでは情が挟まっても白哉と戦った方が良かったではないですか」

そこへ来て、漸く天隼は斬魄刀を抜く。

それは未だ誰の目にも捉えることができて、風を纏ってはいない。それでも、三人の目には脅威に映っただろう。

特に、元部下であった勇音は天隼の実力を一番よく知っているだけに冷や汗が止まらなかった。

三人がかりで同じ副隊長を倒そうとしているという認識がそもそも間違っている。

目の間にいるのは、隊長羽織を身に纏っていない隊長格の死神だと考えるべきなのだ。

隊長の席に空きがないから、副隊長に留まっているだけに過ぎない。

四番隊にいたころには、隊長の代わりに最前線に赴いて治療をしながら戦うことのできる死神なのだ。

「……やはり、駄目ですか」

あふれ出る霊圧が双極の丘を限定的に揺らす。

天雫は、斬魄刀を抜き放つと同時に霊圧を全開にした。その余波ではなく、直撃を受けた三人の副隊長は膝について倒れる。

隊長格の霊圧をもろに食らったのだから、呼吸困難になっていないだけ、流石は副隊長と称賛するべきだろう。

そして天雫は、動けなくなった三人を、背後に回って一瞬にして首に刀の峰を叩き込むことで意識を刈り取る。

瞬歩を使って背後に回り込んでから、三度刀を振り、その刀を鞘に納めるところまで、その三人は気付くことすらもできなかっただろう。

だが、残っている面々は七緒を除いていずれも隊長。

「流石は隠密機動総司令官殿」

天雫は、襲い掛かってきた碎蜂の攻撃を右手で受け止める。

放たれた蹴りはかなりの威力を纏っていたが、霊圧同士のぶつかり合いである死神どうしの戦いにおいて、白打の技術はあまり関係がない。

速さに慣れてしまえば、後は力がものを言う世界だ。

そして天雫は、その速さについては白哉との研鑽で高い位置にあると言っている。

さらに霊圧については、隊長格に匹敵するほど。

碎蜂の蹴りを、不意打ちだろうと受け止められない道理はない。

「チッ！」

舌打ちされて、次の攻撃。

右足が受け止められたままだったから、碎蜂は右手を地面につけてからさらに左足で同じ個所に追撃を叩き込もうとする。

当然、片手で両足による攻撃を受け止められる筈も無いし、そう

何度も攻撃を受け止めていたら腕が折れてしまう事は分かっているから、天雫は彼女の攻撃を受け止めずに避ける。

体格差は、およそ30センチ。

体格だけで考えるのであれば、圧倒的に天雫が有利だ。

「！？」

だが、それはあくまでリーチという一点のみ。

いくら白哉との修行によって速さに慣れているとはいえ、六番隊の隊長と、二番隊の隊長では求められている速さの質が違う。

確かに白哉は瞬歩が得意だが、しかし碎蜂は瞬歩のプロなのだ。

白打だけの戦闘に限れば、碎蜂が天雫の二歩も三歩も上を行くことは明白で、それはきつちりと戦闘に現れていた。

腹と、側頭部に一発ずつの蹴りを受けた天雫はその威力を殺し切れずに飛ばされる。

「良い。私が待っていたのはこう言う戦闘です。自分が一歩及ばない、そして油断が即座に死につながってしまうような。しかし残念なことに碎蜂隊長との戦闘はこれまでの様です」

「……何を言っている？」

「貴方にお客さんです。本当は両方とも私がお相手したいところですが……四楓院夜一は、貴方にお任せします」

「ッ！？」

天雫の言葉の直後、瞬歩で近づいてきた夜一はそのまま碎蜂を拉致するかのようにして双極の丘から連れていく。

一歩下がってその速度に巻き込まれないように身を引いてそれを

見送った後で、天隼は蹴られた部分をさす。

痛みは引いていないが、これからの戦闘に支障はない。骨も、どこも折れていないようだった。

残っているのは、浮竹隊長に京楽隊長、そして七緒が、反逆のメンバー。

反対に、保守派と言うべきか、それとも反逆していないメンバーと言うべきか、とにかくルキアを救おうとしているのは反対側に属する筆頭の総隊長、そして母上。

どう考えても、戦力的にはこちらが足りない。

総隊長だけでも厄介なのに、実質今の隊長陣の中では総隊長に次いで強い母上までもが向こう側なのだから。

「……罪人を連れて逃げたのは副隊長。斬って挿げ替えれば替えは効く。後でゆるりと捕えよう。じゃが、儂が許せんのはお主らじゃ。お主らは隊長としてしてはならんことをした」

ダンツ、と大きな音を立てて総隊長の杖が地面に打ち付けられる。幾重にも傷の刻まれた身体からは未だに進むほどの霊圧も放たれていないが、いずれはその殺気と一緒に乗せられて放たれるだろう。それが此処であるのか、或いは逃げた先であるのか。そして母上もそれに参戦するというのか。

それを考えただけで身体は歓喜で武者ぶるいしてしまう。

「それがどういうことか、分からんお主らではなかるう」

「……よし！ 仕方ない。そいじゃあいつちよ、逃げるとしようか、浮竹！」

京楽隊長と浮竹隊長がその言葉で瞬歩を使って丘から飛び降りる。

天雫と七緒もそれに続いて行く。

総隊長との決戦の場は、周りに被害が及ばないように此処からは随分と離れた場所になりそうだ。

## 第十七話 処刑の日（後書き）

感想が全く来ない……

誰か、俺に感想を……

そして聞きたいことは一つ。

前の奴よりもだいたい評価が低いのは前よりもつまらなくなってるのが原因だったり？

やはり早々にリリカルした方がいいということか……

第十八話 疾風（前書き）

これから先は、中二病が全開。  
そう言うのが嫌な人はブラウザバックを。



## 第十八話 疾風

「結構離れたねえ」

「ああ。此処までくれば、他に危害も及ばないだろう」

三人が向かった場所は、旧市街地のはずれの所。

既に誰も済んでいないから、ここならばいくら暴れたところで誰にも迷惑はかかりそうもない。

それに、これだけ広い場所ならばいざという時に総隊長の炎から逃げることもできるだろう。

障害物を壁に、という方法は総隊長の斬魄刀から発せられる炎が全てを燃やしてしまうだろうから無理なことだ。

「七緒ちゃん、ビーン！」

「た、隊長達に天琴さんが早過ぎるんです！ ん？ あっ！」

七緒が何かに気付いたようにして視線を前にしたから、そちらを見遣るとそこには生き一つ切らしていない御老人の姿。

杖について、そこに有った瓦礫に腰掛けて、いかにも到着を待っていたかというような雰囲気漂っている。

「流石。お早い御着きで」

「昔から……逃げる悪がきに撒かれたことはないんじゃよ。来い！

子ども！ もう拳骨ではすまさんぞ」

腰かけていた瓦礫から立ちあがって、その身に迸らせるのは霊圧。

既に、斬魄刀の能力の片鱗が見てとれるほどに、その霊圧は熱を纏っている。

大気を焼くかのような霊圧は、肌にピリピリと来て、着ている服が焼けて無くなってしまいかもしれないと思わせるほど。

その霊圧の余波は、無風だったのに髪が靡いてしまうほどだ。

スタスタと歩いてくるその様は、最早逃げ場所などどこにも残されていないことを暗示しているかのようだ。

そして最後の一步が踏み出されたところで、地面すらも霊圧で焼けて少し焦げる。

その直後、殺気が飛ばされてそれを喰らった四人のうち、一番若い七緒が倒れるようにして膝をつく。

「去ね！ お主の様な赤ん坊に息の仕方から教えてやるほど、儂の気は長うは無いぞ」

「……大丈夫だ。七緒ちゃん。しっかりして」

京楽隊長がその殺気から身を守ってやるようにして七緒に覆いかぶさって、気を確かに持たせるように声をかける。

が、やはり駄目だったようだ。

自分でも父上が最初の心構えとして殺気に対する気構えから入ってくれなければ、今のだけで戦意を失っていたかもしれない。

後は、父上が居たころの母上の無駄に黒いオーラ。

「……ごめんよ。やっぱり連れてくるんじゃないかった」

京楽隊長はそのまま、瞬歩で七緒を被害の及ばない遠くに運ぶ。

一度の瞬歩でアレほどの距離を稼ぐことは、流石に私でも出来ない。

「見事な瞬歩じゃ。一度で随分と遠くまで行けるようになったもんじゃのお」

「どうも」

「思えばお主ら二人の力は昔から飛び抜けておった」

老人というのは、戦いになると昔を思い出すものなのだろうか。

だがまあ、聞いた話によれば隊長達は総隊長が作った学院からの初めての隊長だという事だから仕方ないのかもしれない。

それに総隊長の話を知っている限りでは、自分の子供のように思っていたようだ。

「信じとつた。意気は違えど、歩む道は同じであると。……そして卯ノ花天霽。お主も同じじゃ」

「……」

「儂自らが作った学院を受け継ぎ、儂が剣を教えた中で唯一儂を越える可能性を持っていた一士。流魂街の出身にして、初めて死神になりたいと貴族ではない者が頭を下げて来た日は今でも鮮明に覚えておる。……儂の後を、護廷十三隊を唯一任せられる男であった」

知っている。

父上は、かつて千年前の護廷十三隊において最強と呼ばれた六番隊の三席に、初めて流魂街からの出身の者が上り詰めたその人である。

母上の剣に憧れて死神を目指して、父上が隊長となったおかげで流魂街の出身者も死神になることができるようになったのだと。

流水系最強の斬魄刀であり、最優の斬魄刀と呼ばれた刀を持って

いて、唯一総隊長を超えることのできる死神であるという事は、母上から耳にタコができるほど聞かされた。

幼いころは何度も父上が虚圏に迷い込んでしまったからの事や、その他色々な武勇伝をわがままを言っただけで聞かせてもらったのだ。

最上級大虚と戦った時に付いたという傷をなぞっては訳も分からないままに感心していた幼い日々の事は、今でも鮮明に覚えている。父上と母上の剣で戦う姿を見て、私は父上が母上に憧れたように、父上に憧れたのだから。

だから、父上の事は母上に次いで一番よく知っている。

「自慢じゃった。儂の教えた者が、最強と呼ばれた儂を越える日も遠くはないと。じゃが、最早それは叶わぬ。じゃから、その娘であるお主は儂にとっては孫も同然。才に溢れていたお主に期待した。一土の後を継ぎ、儂を越える死神になつてくれると」

封印状態の総隊長の斬魄刀から炎になった霊圧が迸り、杖を包む。木でできた杖が燃えてしまわないのが何とも不思議に思える光景だ。

「……………痛恨なり！」

封印が解かれて、斬魄刀がその姿を現す。

「元柳斎先生……………」

「何も言つな。最早問答は埒もなし！ 抜け！」

三人とも、斬魄刀の柄に手をかけると、それを見た総隊長は一気に居合抜きを横に一閃。

その威力は、風圧が土埃を撒き散らすほど。

たまらず、三人とも一気に後ろへ下がる。

「どういっつもりじゃ。お主ら、斬魄刀も解放せずに、この儂と戦う気か？」

「どうしても、闘わなくちゃ、駄目なのかい？ 山じい」

「黙れ！ 教えたはずじゃ。正義を揺るがせにする者を、儂は許さぬと」

「自分の正義を貫けと、教えてくれたのもアンタさ。山じい」

「その為に力をつけると教えてくれたのも貴方です、先生！」

「戯けるな！ 世界の正義を蔑にしてまで通すべき己の正義など無い！」

「ならば！ 世界の正義とは何ですか！ 元柳斎先生！」

「……聞き訳が無いのお。言つたじゃろ！ 問答は仕舞いじゃ！」

総隊長は斬魄刀を地面に突き刺すと、隊首羽織を脱ぎ棄てて風に乗せる。

そして今まで以上の霊圧が発せられて、刀からは一瞬、炎が燃え上がる。

上半身の死霸装も総隊長は脱ぐと、彼の肌が露わになって、幾重にも刻まれた傷跡は真っ赤に染め上がる。

身体から迸る霊圧は、既に炎を発している。

そしてそのまま刀を握ると、その炎は刀にも移って、超高熱の刀になる。

「万象一切灰燼と為せ 流刃若火！」

解放と共に当たりは炎に包まれる。

始解にして、既に超然たる霊圧。

その熱は、天を焦がし、雲すら消し、その刃の通る道は、世の一切を灰燼に帰す。

全斬魄刀中、最高の攻撃力を誇り、炎熱系最強最古の斬魄刀。初めて見るその姿、感じる霊圧や熱に、思わず見惚れる。

「どうした。お主らも早う刀を解かんか。抗いもせず、灰となるのを潔しと思うまい」

「……仕方ないねえ。行くか、天栗ちゃん、浮竹！」

「はい」

「……ああ。波悉く我が盾となれ 雷悉く我が刃となれ 双魚理！」

「花風紊れて花神啼き 天風紊れて天魔嗤 花天狂骨」

「吹き荒べ 疾風！」

隊長二人の手には尸魂界全土にただ二つのみ、二刀一対の斬魄刀が握られる。

比して、天栗の手には何も無い ように見える。

見えるだけで、実際にはちゃんと斬魄刀が握られている。

縛道の二十六、曲光で斬魄刀を覆って対象を見えなくしている訳ではなく、それが天栗の斬魄刀の能力。

風を操る彼女の斬魄刀は、技の一つとして斬魄刀を風で纏う事に

よって敵から間合いを分かせないという効果を持たせることができる。

尸魂界全土にただ一つ、姿の見えない斬魄刀だ。

「覚悟は……良いかの？」

「何時でも」

そして四人が一斉に駆けて、全ての斬魄刀が交差する。

三人、計五本の斬魄刀の攻撃に対して総隊長の斬魄刀は一本だけで全ての攻撃を弾き飛ばす。

纏っている炎は、身体に受ければまず間違いなく燃えてなくなってしまう。

アレを一度でも喰らえば、そこでリタイア。

だから、天霽は実力差を十全に理解して即座に距離を取る。

「烈風一刃!!」

霊圧を斬魄刀に込めて、それを居合抜きに一閃。

本来は刀を横にして使う技だが、味方が二人いる現状として横に振れば当たってしまうかもしれない今は、縦に使うしかない。

霊圧の込められた斬撃は風を纏って飛ばされる。

高速で切り裂かれた大気は音を立てて、地面は斬撃によって抉れる。

それほどの威力を誇った一撃は、しかし流刃若火の発する炎が実際強くされたそれだけで、威力ごと燃やされて無くなる。

炎の壁は、天霽が思っているよりも高い。

一度だけ見せてもらった父上の斬魄刀、その防御力に勝るとも劣らない。

父上の解放した斬魄刀が降らせた雨が父上を守り、何をやっても父上に届かなかったことを思い出す。

刀で突こうが、鬼道で衝撃を与えようが、あの水は空間を断絶するかのようには防御力を誇っていた。

今の総隊長の炎は、まさにあの時と同じようだ。

「ふふっ！ もっと、もっと！」

思わず笑みがこぼれて、襲い掛かってくる炎の波を避けながら笑ってしまう。

命の危機だというのに、楽しさが抑えきれない。

この状況を、自分の本能が喜んでしまっているようだった。

こんなにも自分が好戦的だとは思わなかったが、若しかしたらじやじゃ馬の斬魄刀が強敵の出現を前に同じようにして喜んでいるのかもしれない。

「烈風……」

もっと、鋭く、薄く、研ぎ合わせるようにして霊圧を斬魄刀に込める。

刀は抜かれた。

敵は目の前。

後は、斬るだけだ。

「一刀ツー!!」

愚直に、同じ技を繰り返す。

今度は、炎の壁によって防御されてもさらに威力を増すことができるほどの霊圧。

ためを作って霊圧を最大に込めて、さらに居合抜きで振りぬかれ



た斬撃は空気が割かれたことによって高音を上げる。

まるで、金属をすり合わせたかのような音が鳴り響いて総隊長に斬撃が飛び、今度は止めるのではなくかわされる。

その斬撃が通った道は炎が両断されて、深い溝が彫られる。

「遠慮のない、良い攻撃じゃ！」

直後、総隊長が瞬歩で背後に回り込んで刀を一閃。

それは避けなければ確実に上半身と下半身が分かれてしまうほどの一撃であり、背後に迫る危機を霊圧で感知した天雫は、振りぬかれたままの斬魄刀を自分の背中にまわして、斜めに構えてから足を地面から離す。

「あは」

斜めに刀を構えたことで、力を垂直には受けずに多少流して、しかしそれでも流し切れなかった威力によって天雫は空高く打ち上げられる。

力を受け流し切れなかった手は、未だにビリビリと痺れていて、背中にはびっしょりと汗が流れていた汗が炎で一瞬に蒸発してしまっただ。

生命の危機。

それが頭で理解できて、なのに口は勝手に笑う。

一歩間違えたら死んでしまうかのようなこの戦いを楽しんでいるというように。

「もっと、ギリギリまで。もっと、早く」

落ちて行くまでの短い間で、待ち構えていた総隊長は次々と襲いかかる隊長二人の斬撃に横にずれる。

それを目で追いながら、天隼は同じように落ちるまでの間に威力の低い斬撃を牽制するために走らせる。

そして無事に着地してから、その瞬間、瞬歩を使って再び肉薄する。

こんなに楽しい戦いなのだ。

遠距離攻撃などんでもない。

一番近いところで。

一番死に近いところで戦わないと損をする。

その思いはさらに天隼の霊圧を強くして行った。

『護廷十三隊、各隊隊長及び副隊長、副隊長代理各位、そして旅禍の皆さん。こちらは四番隊副隊長、虎徹勇音です。緊急です。これは、四番隊隊長卯ノ花烈と、私、虎徹勇音よりの緊急電信です。これからお伝えすることは、全て真実です』

一旦アツくなっていた頭が、緊急電信によって冷静にさせられる。

総隊長との激戦の途中、既に天雫も隊長二人も相当の疲労に加えて傷を負っている中、総隊長も含めて四人は止まる。

隊長と副隊長の連名による緊急電信など、聞くしかない。

しかも、隊長格だけではなく、旅禍にまで伝えられるべき電信なのだから。

そして止まったままで伝わった緊急電信は、藍染隊長が尸魂界を裏切って中央四十六室を抹殺して、雛森、日番谷隊長を殺したという内容のもの。

「馬鹿な……藍染が!？」

「だってさあ。どうする？ 山じい。こんなことしてる場合じゃないんじゃないの？ 僕ら」

確かに血をだらだらと流しながらもこの死闘を演じている場合ではない。

藍染がなにを企んで双極に向かったのかは知らないが、中央四十六室を殺して、尸魂界に離反したというのは紛うことない事実。

そして双極に向かったという事は、何かこれから起こそうとしているという事なのだろう。

「私としては別に続けても構いませんが」

「……良からう。仕舞いじゃ」

総隊長はそう言うてから、霊圧を元に戻して斬魄刀を再び封印状態に戻す。

焼きつくすような霊圧が消えて、息苦しかった呼吸は元に戻る。

同じように敵対していた三人とも同時に斬魄刀を封印状態に戻して、腰に差す。

総隊長が再び死覇装を着こんで隊首羽織を探す中、天栗はいそいそと鬼道の準備。

「天栗ちゃん？」

「回復鬼道です。貴方がた三人は一応最高戦力ですから」

まずは浮竹隊長と京楽隊長の二人を、両手で回復鬼道を使う事によつて周りの空間と区切る。

中ではまず、霊圧を回復させてから次に肉体の回復。

幸いにして今の戦いで怪我を負ったと言つてもそこまでひどい肉体の損傷ではなかったから、すぐに終わる。

四番隊の三席にまで上り詰めたほどだ。

回復鬼道の腕は、今の護廷十三隊の中では母の烈に次ぐ腕前。

それゆえに、隊長二人の霊圧回復は十数秒にして終わらせてしまふ。

「流石だな」

「どうも。次は総隊長です」

手をかざして何も言われなかったから次は総隊長。

こちらは、回復鬼道を使って数秒ほどで終わる。

三人がかりで総隊長にかすり傷一つ負わせることができなかったのだから当たり前だが。

対して自分は頭から血を流しているのに。

「じゃ、行きましようか」

「天栗、君は大丈夫なのかい？」

「問題ありません。走りながら自分を回復させますから」

やったことはないが、ぶっつけ本番になっても問題なし。

出来れば出来たで、出来なければ出来なかったでも足手纏いにはならないはずだ。

いくら隊長格が三人も離反したとはいえ、こちらは総隊長に古参の隊長が二人。

それに私も、戦闘が出来ないほどの傷は負っていない。

今まで総隊長と戦っていたのだから、別の隊長と戦う事にだって支障はない。

むしろ、今からワクワクして仕舞っているほどだ。

個人的にはそちらの方が問題が有るようにさえ思える。

## 第十八話 疾風（後書き）

いきなり感想が増えて今日見たらびっくり。

そして一様に原因は一土が出てこないことだとの事で。

なんだか意見を求めると全員が一貫して同じことを言っているのが  
凄いと変なところで感心してしまった。

で、残念ながら主人公の一土が出てくるのは次の話から。

そして、さらに言えば烈が出てくるのは二十五話から。

つまり、そこまでは既に書きあげてしまったという事。

ルキア救出の話で終わらせて、二十話くらいで完結とか言っていたの  
にどうしたことが。

どうやら三十話までは行きそうな勢い。

後ついでに、さっき二十五話を書き終わって、読者の一部或いはか  
なりの大多数が望んでいるらしい、一土と烈の2828会話は書け  
た……様な気がする。

乞うご期待。

……と、少し自分へのハードルを上げておく。

ストックが有ってもしようがないと思うし、タグに不定期更新は付  
けてあるから、それになっても良かったら一気に上げてしまっても  
その代わりちよいとリアルが忙しくなって、毎日の更新ができなく  
なるかもだけど。

まあ、リアルが忙しくなったからその毎日の更新の為にストックを  
溜めたんだが。

## 第十九話 その男、帰還（前書き）

とりあえず「私が天に立つ」の部分は原作と同じだし、書いても仕方ないと思ったので省略。

此処からは一土が主人公及び視点に復帰。

という事で、いくつか注意事項を。

これから先、一土の力としては基本的に最後の月牙天衝を使った一護よりも上だと考えてもらって大丈夫。

つまり、最強とかチートとか、そういった類のお話になること間違いないし。

ブリーチでお馴染みの均衡状態による戦闘というのはほとんどあり得ない筈。

そう言うのが苦手な人は戻ることを今さらながらに推奨。

それでも良くて、暇ではない時間をこの駄作の為に割いてやるという猛者は大歓迎。

## 第十九話 その男、帰還

「ふむ……この町に帰ってくるのも二十年ぶりか」

年のころは二十前後、肩まであるボサボサの髪に、がっしりとした筋肉に覆われた身体。

身に纏っているのは上下が黒で統一されているジャージ。

所々のワンポイントとして白い色が入っているが、基調は黒だ。

どれだけ使いこんでいるのか、そのジャージはかなりボロボロになっってしまったている。

当て布が無いのはそれなりに新しいのかもしれないことを匂わせているが。

200と数十センチはあるうかという巨体は、町を歩いているだけで人目に付く。

精悍な顔つきに加えて、その巨体であれば町の住人には知られていても良いようなものだが、彼はこの町に来るのが二十年ぶりという事で彼の事を知っている者も少ない。

そもそも、日本人としてはサイズがおかしいことになっているから居住区域でなくとも誰か知っていても良いような気もするが。

「む……何か落ちた。隕石か？」

山の方角に空から何か光の様なものが振ってきて、辺り一帯にかなりの音を立てる。

隕石だしたらビックニュースだ。

いち早く現場に付いて拾ったりしたら、良い土産が出来るかもしれない。

が、そんなバカな考えを一笑にふすかのようにして大気が揺れる。



「……御出ましって訳だ」

男 伊吹一士は、霊圧の揺れを確かに感じて、目を瞑ったまま  
で静かにそう言う。

空虚町に戻ってきた理由はただ一つ。

藍染惣右介が浦原の作った崩玉の有りに気付いてそれを入手し  
て、尸魂界を裏切って虚圏に赴いたという情報が入ったから。

急ぐ訳でもなく、一步ごとに何かを確かめるように一士は隕石  
ではなく、アランカルが現れた場所へと向かう。

思い出すのは、百年前のこと。

魂魄消失案件の特務部隊として現場に赴いて、ホロウの仮面を発  
症してしまった死神を取り押さえていたら感覚が消された空間に捕  
えられて、その空間からは脱出したものの、しかし同じように自分  
も虚化の症状を発症してしまった。

それゆえに首謀者であった藍染を倒すことができず、百年前は気  
付いたら現世にいたという始末。

死神からホロウの領域に足を踏み入れることになってしまったせ  
いで、中央四十六室はその時にいた死神達をホロウとして処分する  
決定をして、それゆえに浦原は自分たちを現世に密かに連れて帰る  
しかなかったのだという。

中央四十六室の決定は絶対だ。

覆るようなことはない。

だから、いくら自分が望むからと言って尸魂界に戻る訳にはいか  
なかった。

それゆえに、現世でこの百年の間、やるべきことは来る決戦の時  
まで自分の力を磨くこと。

この百年もの間、何度も尸魂界に足を運びたいとは思ったが、し  
かし行きたい場所からの探索を避けるためには行くことは叶わず、

結果として家族には会えないままだ。

ヴァイザードと名乗ることを決めた平子たちは自分たちの事をホロウとして処理しようとした死神、ひいては尸魂界をも嫌っているから自分から尸魂界に行きたいと思う俺の気持ちは少ししか理解できないと言っていたが。

まあ、彼らも家族の様なものを残していれば少しは変わっていただろう。

「む……魂吸って奴か。ここら一帯の人間を殺す気かよ」

死神としての義務として人間を守ることがその一つにあるが、しかし死神では無くなってしまった今、その義務を履行する必要はない。

ヴァイザードは死神からホロウの領域に足を踏み入れることになって、結果として死神から嫌われることになった存在。

それゆえに、ひよ里などは死神だけではなく人間をも嫌う。

その思考が分からない訳ではない。

死神の全てを俺も嫌っている訳ではないが、確かにただ単にホロウとして切り捨てる選択しかなかった中央四十六室を恨んでいるし、それゆえに多少は死神を嫌いにもなった。

だがそれでも、烈も天雫も十三隊の死神として尸魂界にいるのだから死神の全てを嫌いになれるわけがない。

何よりも、俺は烈に憧れて死神になったのだから。

「……近づいてくる霊圧が三つ。二つは人間、一つは死神か。いや、二つは既に戦闘してるか」

この百年の修行のお陰で、少しは霊圧探知も能力を上げることができた。

何も百年間の間、藍染がなにを企んでも潰せるような力を求

めて修行していた訳ではなく、霊圧探知に始まって、斬魄刀との対話など、やることはたくさんあったのだ。

斬・拳・走・鬼の四つの死神の戦闘術は魂魄の強化限界に達するとそこで成長が止まってしまいが、しかし俺は死神からホロウの領域に足を踏み入れてしまったもの。

死神の時の限界を超えて、さらに今は成長しているし、鍛えるべき伸び白は確かに存在していた。

その一つとして、最も顕著だったのは霊圧探知だろう。

死神の時には苦手だった一つだが、魂魄それ自体が強化されたから少しは出来るようになって、個人の識別も今では県をまたがない限りでは判別できる。

「む……一つやられたか。それに死神の方は……卍解が使えるのか」

霊圧が少し重くなる。

山道を歩いて登る中、少し荒削りな霊圧がのしかかってくる。

全く苦ではないが、どこか懐かしさを覚えるのは、この百年の間に全く死神とは接触していなかったからなのか、それともこの霊圧が自分に似ているものだからなのか。

もしかしてこの霊圧の主が、平子たちが言っていた黒崎一護という少年の者なのだろうか。

死神から、自らホロウの領域に足を踏み入れた少年。

そうなのだとしたら、放っておくわけにはいかない。

大事な戦力なのだから。

「さて、少し急ぐか。浦原と四楓院も来たようだし」

瞬歩で近づいてくる死神二人。

どうやらこの事態をあの二人も重く受け止めているみたいだ。

だがまあ、あの二人が来るのと同じくらいに現場に辿り着くこと

ができるだろう。

「潰れて消えろ！」

丁度、片腕を斬り落とされたアランカルの一人がオレンジの髪の毛をした少年を殴って終わりにしようとしている光景が目に入る。

アレが、黒崎一護か。

報告の通りだったらこんな解放もしていないアランカルには負けないと思っていたのだが、予想以上に虚化の進行が早いということか。

そして大事な戦力を失う訳にはいかなないので躊躇いも無くその少年の前に立つ。

同時に、反対方向から浦原と四楓院も出てきて、彼らは驚きに目を見開く。

仕方のないことだ。

俺の霊圧は浦原の義骸によって探知できなくなっているのだから。

「ああ？」

「どーもー。遅くなっちゃってすみません。黒崎さん」

「何だあ？」

浦原がお馴染みの血霞の盾を出してその拳から少年を守った。

そんなことをしなくても一応、俺もあの拳程度は何もしなくても止められたのだが、まあ無駄な力を使わずに済んだと思うておこう。

「次から次へと邪魔くせえ連中だぜ。割って入るってことは、テメエらから殺してくれって意味で、良いんだよなあ！！」

またワンパターンの拳。

今度はいち早く動いた四楓院が手首の部分を掴んで、力の流れに逆らわずに投げ飛ばす。

相変わらず無駄のない動きだ。

流石は先代の二番隊長と言ったところか。

白打での戦闘はお手の物というところだろう。

そして吹き飛ばされている間に四楓院は浦原から薬を受け取って。

「介抱する」

「はいな」

「糞がああああ！」

また同じように三人かたまっている場所をアランカルは殴っていく。

今度は、四楓院が動く前に一士が手を出す。

自分の斬魄刀を抜いたとか、ヴァイザードの証である仮面をかぶったとか、そう言う事ではなく、文字通り手を出したただけだ。

ただそこに、手を置くようにして。

「一々煩い奴だ。もう少し静かにしてる」

「ッがああああ！」

そして一士は、拳を受け止めた手でその拳を掴んで、上に振ってから下に思い切り振りおろす。

その運動に耐えきれずに、アランカルはまず最初に肩が地面に打ち付けられて、その衝撃は頭が地面に叩きつけられるまでわずかな時間も無い。

脳、という部分がアランカルにもあるのだったら今頃は確実に脳震盪で動けないだろう。

「む、存外固いな。右手を肩から裂くつもりだったんだが……」

アランカルはそのまま動かなくなり、四楓院は倒れていた人間の少女の所に、浦原は黒崎一護の所にそれぞれ言っ て介抱を始める。二十年ぶりに会う俺が腕を鈍らせていやしいかと思っていたのかもしれないが、そんな心配は全くの杞憂だ。

この二十年、彼らに会っていなかった時間にもさらに成長しているのだから。

そして一士は、そのままもう一人のアランカルを無視して浦原の傍に近づく。

「それが噂の黒崎一護か？」

「はい。平子さんは既に接触したみたいッス」

「そうか。む……まだ息が有ったか」

先ほど叩きのめした筈のアランカルが再び起き上がる。

雄叫びをあげながら一士の方を向いて、霊圧が急速に口の中に収束する。

赤い玉が奴の口の中に見えたが、しかし一士は全く動きを見せない。

代わりに、放たれた直後に再び手を前にかざす。

「ざまあ見やがれ！ 粉々だぜ！ 俺の虚閃をこの距離でかわせる訳……！ 何だダメエ。何しやがった！？ どうやって虚閃を！？」

「何だ、言わなきゃ分からんのか。ただ掌に霊圧を集中させて握りつぶしたただけだ」

「何だとオ？」

「もう一度やって見せるか？ 今度は」

一士は一呼吸置く。

背後には霊圧が漏れないように、少しの瞬間だけ意識を霊圧だけに集中させる。

人間にしては大層な霊圧を持っているようだが、自分のそれに耐えられるかは甚だ分からない。

「お前の頭で」

「ッ！！」

そして霊圧を放出する。

それは、今までこの場にあつた比ではなく、まるで隊長格が本気で霊圧を放っているかのよう。

先ほどの虚閃など、赤ん坊の泣き声にも思えるほどの霊圧だ。

知らず、本能の内にそのアランカルは恐怖を覚えたのかもしれない。

一歩下がると、次は奥にいたもう一人が前に立ちふさがる。

「ウルキオラア、テメエ邪魔すんのか？」

「馬鹿が。頭に血を上げ過ぎだ、ヤミー。こいつらは浦原喜助と四楓院夜一だ。もう一人は情報に無かったが……。お前のレベルじゃ、そのままでは勝てん。引くぞ」

もう一人の、細身のアランカルは少し後ろに下がると空間に指を当てて歪みを作る。

虚圏と現世を繋ぐ、アランカルやホロウしか作ることでできない扉だ。

その中は、真つ暗な空間でしかない。

そしてその空間が開かれて中に入ったアランカルを、四楓院が止める。

「逃げる気か？」

「らしくない挑発だな。貴様ら三人がかりで、死に損ないのゴミどもを守りながら俺と戦って、どちらにぶが有るか、分からん訳じゃ有るまい。差し当たったの任務は終えた。藍染様には報告しておく。貴方が目を付けた死神もどきは、殺すに足りぬゴミでした、とな」

「逃さん……って駄目か」

そして空間が閉ざされるその直前に、一士は居合抜きで一閃する。少しの間だけでも思考せずに、構わずあのアランカル達は殺しておくべきだったかといまさらになって後悔する。

別に、自分がこの人間たちを守ってやらなければならぬ道理はないのだし、守るべきは黒崎一護だけだ。

浦原も四楓院も、自分で自分の身は守れるのだし。

だがまあ、最後の振りで腕の一本くらいは落とせたことを願うとしよう。

左側の細身の男の霊圧がかなり濃かったから、今後の事を思っただけの一撃だったのだが。

「ふむ。そいつら酷い怪我だな。特にそっちの黒い肌の少年。腕が



歪になつてる。治療の途中だったのか？」

「おそらくそうツス。こつちの彼女の能力の一つに回復術がありませんから」

「だがまあ、どれも俺が必要なほどではないか」

そう言つて一土は斬魄刀を手から霧散させて消えさせる。

現世においては、真剣を所持したまま街頭を歩くことは禁じられているから、斬魄刀をそのまま持つて歩く訳にはいかない。

かと言つて、総隊長の様に斬魄刀を杖の形に封印して持ち歩くにしても、そんな面倒なことはしたくない。

だから、天水と共に編み出した方法は斬魄刀を再び自らの魂魄に仕舞う方法だった。

実際、死神が義骸に入るときには斬魄刀も一緒に仕舞われるから、その点で問題は無い。

だが、元々義骸に入っている一土では斬魄刀を仕舞うという訳にもいかず、結局編み出したのはこの方法だった。

「そう言えば、お久しぶりツス。二十年ぶり、位ですかねえ？」

「そうだな。元気にやつてたか？」

「まあ、ぼちぼちツス。今は藍染さんに崩玉取られちゃったんで対策に忙しいツスけど」

「だろうな。俺もそれで平子に呼ばれて戻ってきたんだし。四楓院は元氣してたか？」

「勿論じゃ。向こうでお主の娘に殺されそうになったがの。父上は

何処に居る、とな」

「そいつは済まなかったな」

しかし天隼は俺の事を今でも探してくれているのか。てつきり百年も昔のことだから忘れ去られても仕方ないと思っていたのだが。

それに四楓院に切りかかるまで必死になって探してくれていたと思うと、自分は幸せ者だ。

百年前の小さいころしか思い出せないが、さぞ成長してくれていることだろう。

「天隼は成長してたか？」

「うむ。ワシも一護を抱えていたとはいえ、一撃貫う所であったからのお。それに今は浮竹の所で副隊長じゃ」

「……そうか。烈は？」

「あの人はお主が一番よく知っておるじゃろ。気丈に振舞っておった。恐らくは姿を消したお主の事を待ち続けているんじゃない。果報者じゃな、お主」

「いや、全くだ」

烈には随分と迷惑をかけた。

恐らくは虚化によってホロウとして処分されることは聞いていただろうし、それに浦原が俺の事を現世に連れて帰ってしまったことも知っているだろう。

その上で待ち続けていてくれる上に、天隼の世話まで。

消息を知らせずに待たせるのはこれで二度目になってしまった訳だ。

頭を下げて許してもらえるかどうか。

「んじゃ、俺は行くわ。平子たちに呼ばれてるんでな」

## 第十九話 その男、帰還（後書き）

いよいよ一士が復帰。

前書きに注意事項を書いておいたけど一応此処にも。

これから先は最強の蔓延る世界。

戦闘とか有ってないようなものなのでご注意を。

ハイスピードで臨場感あふれる戦闘は描写できないので御容赦。

つて言うか戦闘らしい戦闘にはならない予定。

つまりこれから先、ほとんど原作準拠して進んで行って、話として

は中核が一士と烈の会話に当てられる……はず。

そこまでがだいぶ長いのだが。

遅ればせながら、感想を書いて下さっている方々に感謝を。

御指摘のほどもあってお陰さまでpv数も徐々に上がってきていて、自己満足小説の予定で書いていたとはいえ大歓喜。

この駄作を楽しみにしてくれているという人もいて、励まされた。

という事で、藍染をぶっ殺して作者に余力が残っていたらオリスト

ーリーとかやってしまつかもしれない。

烈と一士の過去編とか、或いは未来編とか。

まあ、余力の問題とやる気の問題、それに感想でのリアクションを見て決めるので今のところは完全な未定。

ほったらかしにしている、リリカルの方もどうするか決めてないし。

……どうしよう。

## 第二十話 現世、破面の襲来

この町に久しぶりに戻ってきてから既に五日。

先ほど複数の霊圧がこの町に来たのを感知したが、誰も動かなかつたところを見るとどうやら護廷十三隊からの援軍の様だ。

アランカルが再び現世に侵攻してくることを恐れたのか、それとも今回の援軍の意味は他にあるのか知らないが、少なくとも必要以上に関与する訳にはいかない。

既に俺は平子たちとは違ってヴァイザードでもなし、かと言って元の死神でもない、そう言っても人間でもないから、どこにも属していない自由人という事になる。

形式的にはヴァイザードという事になるのかもしれないが、しかし俺自身はそこまで死神を嫌悪していない上に、烈と天栗のことが有るから、その二人とはかかわりを持ちたい上にヴァイザードの方針がか合わないから彼らに迷惑をかける訳にもいかない。

もとは隊長、副隊長の実力者の集まりだから別に隠密機動が十数人ほど来たところで苦にもならないだろうが、しかし追い回されるというのは気分のいいものではない。

この間の電話では、虚化の症状が発症している黒崎一護を仲間に取り入れて、虚化を習得させてさらなる戦力の強化を狙うとのことだったが、そこら辺は平子たちが上手くやってくれるだろう。

隊長格の中で藍染の完全催眠にかかっていないのが彼ひとりという事だから、若しかしたら今後の決戦の中でカギを握るのは彼という事になるのかもしれない。

だから、虚化を習得させたいのだろう。

それに、一度症状が発症してしまったら収まるという事はないから、嫌でも内なるホロウを抑え込まなければならぬ。

藍染に借りのあるヴァイザードとしては貴重な戦力になるだろう。

そして俺は、そんな彼らとは袂を別つた訳ではないが、しかし彼らが死神とはかわらないと決めている以上、一緒にいる訳にはいかない。

天雫と烈にはもう一度会っておきたいし、藍染との戦いが始まったら二度と会えなくなることも覚悟しなければならないのだから。

それは、虚化を制御してから最初の日に覚悟していたことだ。

これから先の戦いで命を落とすことになるかもしれないし、或いは死神の力を失ってしまうかもしれないと。

「この霊圧は……」

複数の霊圧がまとまって動いていたから中々個人の識別ができなかったが、それでも中にある一つだけは確かに知っている者だ。

自分の、全方向から圧力をかけて動から静へと強制的にさせてしまふような霊圧でもなく、烈の全てを包み込む癒しの様な霊圧でもなく、ただ只管に透き通るような透明度の溢れる霊圧。

確かに知っている。

量も、質も、かなり変わってしまったているが、それでも知っていることに間違いはない。

「天雫……来てたのか」

この間のアランカルとの一戦は尸魂界に捕捉されていたことを知っているから、俺が現世に潜んでいることは霊圧からは捕捉されなくとも、顔写真などが送られていたら誰か俺を知っている奴が送られてもおかしくはないと思っていたが。

候補としては限られていたはずだが、やはり天雫が送り込まれてきたか。

この百年間の間の事は全く知らないが、それでも俺と烈の娘だっ

ただだから治癒能力を備えていてもおかしくはないことだった。

そして四楓院の話によれば四番隊の三席だったこともあるらしいから、前線に赴くことのできる回復鬼道の使える死神という事で、今回の六人の一人に送り込まれたのだろう。

「さて、今すぐに会いに行くべきか否か……」

恐らく、六人という事は一人くらいは隊長格が混ざっているだろう。

だが、天掣以外の霊圧は全く知らない奴らだったから、百年前の事を知っているとは到底思えない。

それに俺は尸魂界からは負われる身だから、アランカルどもが何時こちらに来て襲撃するか分かったものではない現状、そう簡単に鉢合わせる訳にはいかない。

頭の固い隊長格だったら、若しかしたら俺を見つけ次第拘束か、或いは抹殺しろという命令を受けているかもしれないのだから。

そんなことになったら再びこの町を離れなければならなくなるし、今後の藍染との戦闘に参加することもできなくなってしまう。

だからと言ってその隊長格が頭の固い奴だった場合に殺す、という訳にもいかない。

隊長格を殺すようなことは戦力的に考えて最も好ましくないことだ。

「待つか。俺の事を見つけれられるか。これも天掣がどれだけ成長したのかを知るいい機会だ」

最も、見つけるにしても完全に霊圧は遮断されてしまっているから見つけるのは中々に困難だろう。

霊圧探知で見つけることが出来ないという事は、天掣はしらみつぶしに探すしか俺の事を見つける方法が残されていないという事だ。

浦原と接触して連絡先を手に入れるという方法が残されていない訳でもないが、しかしそんなことを思いつくかどうか。

そもそも、浦原と俺が連絡先を知っている仲だという事が理解できなければ思いつかない。

浦原は虚化の実験をした張本人という事になっているから、天雫の中では憎むべき奴、という事になっているのかもしれないし。

「さて、天雫。早いところ見つけに来てくれよ？」

夜も更けて既に星が空に瞬く時間帯。

この町にある自分の家で屋根に寝そべって空を見上げていたら、突如として霊圧を感じた。

現世で済むためには戸籍とかその他色々必要なものが有る上に、家を作らなければいけないのだが、そこら辺は浦原の便利道具で何とかしらから名実ともにこの家は自分の者だ。



金は、尸魂界からこつちに来る時に全く持ち出すことができなかったが、それでも何とか数十年もの間働いて手に入れることができた。

そのおかげでちゃんとローンも既にないし、それにこの家には結界が張ってあるから別に不思議に思われるようなことも無い。

一つだけ欠点と言えば、二十年もの間帰ってきていなかったから、流石に結界を張っていたとはいえ埃がたまってしまっていたから掃除をしなければならなかったことだ。

向こうにいたころは自分で掃除など全くしなかったから道理が分からずに物凄く苦労してしまった。

しかも結局やり方が分からなかったから天水を使って少しの水で汚れを洗い流すという方法にしまった。

まあ、総隊長とかも斬魄刀を火熾しに使っていたし、烈も移動手段として使っていたから問題はないはずだ。

天水は少し嫌がっていたが。

「空飛ぶホロウか。珍しいな」

珍しいだけではない。

普通のホロウとは違う、何か違和感。

若しかしたらアランカルが来るという前兆なのだろうか。

空を悠々と旋回している様子は、遠めに見れば鳶が飛んでいるようにも見えるが、山の方角ではなく市街地の方だからそんなことは冷静に考えればあり得ないと気付くことだ。

それに、鳶にしてはサイズが大きすぎるのだから。

「サイズ何て俺の言うべきことじゃないが。……来たか」

そのままそのホロウを視線で追いかけていけば、誰かしらあのホ

口ウを斬りに来るかもしれない、若しかしたらそれが天雫かもしれないと思っただが、そんなことはないままにアランカルが現れる。

しかも、六体もいる。

この間の二体の来た目的は、藍染に言われて黒崎一護の戦力の確認が目的だったらしいが、今回は何の目的なのか。

その黒崎一護を確実に殺すために六体ものアランカルを送ってきたのだとしたら、それはお門違いというものだ。

青い髪のアランカルはそうでないにしろ、他の奴らはそこまで脅威を感じるようなことがないのだから。

この間のでかい奴の方がよほど強かったようにも感じられる。

「む……探査されたか？ いや、浦原の義骸なら霊圧が外に漏れることはないし、此処に張った結界がさらにその効果を相乗させている筈だ。気にしなれば気付かれるようなことはないが……」

しかし、アランカルの今の何かが霊圧ではなく、霊力を感知するタイプのものだったら若しかしたらという事はあり得るかもしれない。

結界の中にいるから感知されたという事はないだろうが。

仮に俺が今の技で探知されたとするならば、ヴァイザードの全てが探知される可能性が有るといふ事だ。

だがアランカルが六体、全て動いた現状として敵の数にはヴァイザードが含まれていないとやはり解するべきだろう。

「散らばったか。こちらには……一体」

薄眼を開けて空を見上げていると、その一体が上を通り抜けて後ろの方へと移動していく。

六体がばらばらに移動していたことは既に分かっているから、結界から外に出て霊圧を探知してみれば、上を通り過ぎた一体が向か

っていたのは天雫の所。

「どうやら今日こちらに来てからずっと俺を探していたようで、随分と近くにまで来ていたようだ。」

「あと少してこの結界を見つけることも出来たかもしれないが、運がなかったということだろう。」

「さて、行きますか」

「アランカルが来たのだから流石に天雫も無視するようなことは出来ないだろう。」

「となれば、自然と今のアランカルと戦闘することは目に見えている訳で、彼女の成長を見て取ることが出来るはずだ。」

「百年前、まだ卯ノ花家にいたころは基本は教えていたが、どのくらい成長したのか。」

「教えていたのは基本中の基本だけだったし、そのあとのことは独学か、或いは烈に習ったりしたのだろう。」

「戦闘が始まる直前に、霊圧と気配を隠したままで天雫の視界の背後に回り込むことができた。」

「そして始まる戦闘を分析すれば、同じくらいの力量であるようにも思わされる。」

「攻めるアランカルに対して、防御一辺倒の天雫。」

「十四郎の所の副隊長と言っていたから、恐らくは現世に来る時に限定霊印が施されているはずだ。」

「つまり、霊圧は五分の一に制限されているという事になるが、その状態でアランカルと互角に戦えるというのは大したものだ。」

「敵も斬魄刀の解放はしていないが、それでも尚、闘う事が出来ている。」

「が、戦場が空中になった瞬間に天雫は劣勢に立たされる。」

地上で戦っていた時よりもアランカルの速度が速くなっているし、天雫はその速度に対応することができなくなってきた。

限定解除すれば何をするでもなく圧倒することが出来るだろうが、やはり相手の得意な土俵に持っていかれてしまったというのは苦戦を強いられることになるか。

だが、それでも尚傷を受けていないからやはり親バカゆえに心配で斬魄刀を出しているのは無駄に終わりそうだが。

「残念だったなア死神！ 俺の本来の戦場は、空中なんだよ！ 空中戦に対応できねエお前に勝ち目はねえ！ ヒヤッハッハッハ！」  
序とばかりに、そのアランカルはついに斬魄刀を解放する。  
翼が生えて、縦横無尽に動き回る。

その速度は瞬歩を連続で使っているかのような速度。  
しかもそれが、瞬歩と違って直線的ではなく変則的なのだから霊圧を限定されている今の天雫には厄介極まりない。

が、どうやらピクリと動いた自分の肩に反して、天雫は劣勢に置かれているようにも見えるが、楽しんでるようにしか見えない。  
翼が生えたことによって動きが変則的に、且つスピードも上がり、外皮も堅くなつたようで、それによって少し傷を受けているにもかかわらず天雫は笑顔のままだ。

その表情で、自分の娘だと思ってしまうのは如何なものか。

あの表情、戦いを楽しむその顔は以前、俺が虚圏に迷い込んでしまつて数年間にわたる激戦を生き抜いていた時の表情だ。

そして内なる虚を制して、戦いを求める本能という奴を改めて自覚している自分に一番近い感情であることは間違いない。

顔のつくりは烈に似ているのに、表情は俺とそっくりだ。

剣は烈にそっくりだが、恐らくは彼女に叩き込まれたのだろう。

見ていて美しいとさえ思えるような剣技に、そして加えることの

俺の要素は戦いを求めて力を求めているそれ。

お世辞や親としての鼻屑抜きの美人が、そんな表情をするものではないと思うが。

「吹き荒べ 疾風！」

とうとう、天雫が斬魄刀を解放する。

少し霊圧が跳ね上がるが、しかし限定されている現状ではあまり意味のないこと。

刀の能力によっては一気に劣勢をひっくり返すことができるかもしれないが。

「……ほう、中々厄介な能力だ。まさか見えない斬魄刀とは」

いよいよ斬魄刀を解放したから実力のほどがきちんと測れるかと思っただが、まさか見えない斬魄刀とは。

そんな能力は聞いたことも無い。

いや、唯一藍染の斬魄刀の能力が完全催眠だったから似たようなものだが、しかし天雫が戦っているところを見れば精神支配系の能力ではないという事が分かる。

空を飛んでいる敵に対して、その場で刀を振って斬撃を飛ばしているその一撃一撃に風が纏わされていて、天雫の死覇装も揺れていることから、風の能力であるという事が分かる。

だが、その風を刀に纏わせて自らの斬魄刀の間合いを計らせないようにしてしまうとは驚きだ。

それに、遠距離からの攻撃をすることでききなり近距離に転じて間合いを計らせないように戦えばそれだけで驚異。

見えなければ避けることもできず、防御するにもかなりの広い範囲を守らなければならないのだから。

だが、戦いを求める彼女の性格がその斬魄刀の能力を低くしてしまっている。

そう言う戦い方をすれば近距離に持ち込んだ時に一気に勝負を終わらせることもできるだろうが、敢えて近距離だけで戦って、最初の遠距離攻撃を使っていないのだから。

勝つための戦いではなく、自分を鍛えるため、力を求めるための戦い方だ。

どうしてそんな戦い方になったのかは分からないが、少なくとも今はそれを見ていられるような落ち着いたことはできない。

目の前のアランカルに、娘が倒されそうになっていて落ち着いていられる父親がどこの世界にいるというのか。

「　　ちよいと失礼するぞ、お二人さん」

## 第二十話 現世、破面の襲来（後書き）

原作との相違点は、当然のように日番谷先遣隊に天雫が加わったこと。

そして一士と天雫の邂逅については次回に。

これから先の戦闘で一士が苦戦することはほとんどないだろう。

とりあえず書いている内に楽しくなってきたから今後は中二病が炸裂する予定。

オリジナルの斬魄刀は作ったから、後はオリジナルの鬼道か。

……黒歴史ノートでも探してみるか。

そう言えば気付いた人は気付いただろうが、天雫の斬魄刀の能力の一つについてはセイバーの風王結界を盗用。

烈がエイ……？ で、一士が流水系だから、同じ流水系か海の生き物にするか迷ったところだが、最終的に鯨の斬魄刀とこれとで悩んでこちらにすることに。

鯨がハリベルに使われてしまっているのが痛かった。

使われてなかったら即座に採用したのに……。

## 第二十一話 親子、邂逅

「ちょいと失礼するよ、お二人さん」

一気に距離を詰めた二人の間に、突如として一士は割って入る。片方の手のひらで天雫の斬魄刀を掴んで止めて、もう片方の掌ではアランカルの翼を掴んで止める。

斬魄刀はその手になく、死覇装も来ていない。

かと言って仮面の一部が付いている訳でもなく、戦っていたアランカルの男は、一士を見た瞬間に人間が割って入ってきたとは思えなかった。

しかし、即座にそれが違うと理解する。

ただの人間が死神の斬魄刀を受け止めて、解放した自分の攻撃を止められる筈はないのだ。

「……テメエ何者だ!!」

「近くで喚くな。耳に響く」

何ものだとアランカルの男は問うて。

そして一士がその視線を彼に向けたその瞬間に、アランカルは全速力で飛び去って後ずさりする。

頭で理解するよりも早くに、獣としての本能が警鐘を鳴らしていた。

この男だけは拙い。

霊圧が放たれていないにもかかわらず、視線が交差しただけで飛びのいてしまっていた。

「……うそ……そんな……ちち、うえ？」



「おうよ。久しぶりだな、天稟」

反対に視線を向けて、呆然と空中に足場を作って立っていた天稟の頭を、一土は撫でる。

その動作で、天稟は自分が探し求めていた父だと確信して抱きつく。

今までの戦いでやられて血が出ていたとか、そんなことは全く関係なかった。

ただ、百年ぶりに会う父が、自分に再び笑いかけてくれているというそれだけで今は良かった。

「すぐに帰るって言ったが、こんなに遅れてごめんな」

「……はい」

ああ、父上の手だ。

泣いていた私をいつもこうやって抱きすくめて背中を撫でてくれる父上の手だと天稟は感激にふるえる。

先日に見世に現れた成体のアランカルを撃破した黒いジャージを着ていた男の写真を見た時に、父上だと分かった。

だから、今回の先遣隊に無理を言って入れてもらった。

やはり、見間違いではなかった。

「大きくなった。もうだいぶ烈よりも身長高いな。髪は烈と同じで長くしてるのか」

「父上が……長い方が好きだった……」

「ああ、そうだったな」

母上に似て、綺麗な髪だと褒めてくれて、短いよりも長い方が好きだというから母上と同じように伸ばしている。

母上は仕事の時は前で結んでいるけど、私は後ろに流したままだ。懐かしむように父上の手が髪を梳いてくれる。

それも、父上の動作に寸分足りとも違わなかった。

「まあ、色々と積みもり積もった話もあるだろうが……そろそろ敵さんが痺れを切らすころだからな」

そう言っただけで父上は私から手を話して、デイ・ロイに向き直る。

霊圧は全く感じられず、斬魄刀も手にしていないのに後ろに立っているだけで感じられる安心感。

その大きな背中は、何度も背負われたことのあるそれ。

「何モンだっけって言うてんだらうが!!」

「ああ、自己紹介がまだだったか。伊吹　いや、卯ノ花一土。天雲の父親だ。よろしく」

キレた敵に、父上は何も動じることなく自分の紹介を終える。

解放したアランカルの力を知りたくて、斬魄刀の解放をさせて、その力が予想以上だったから思わず戦いを楽しんでしまったが、その予想に反した霊圧に比べて父上からはいつもの大きな霊圧が全く感じられない。

義骸に入ったままかもしれない。

だけど、先ほどの私の一撃を素手で掴んでしまったことから、父上の力量は劣るところかさらに磨きがかかっていると感じられる。そして実力差が分かるのか、アランカルは解放して速度も力も霊圧も上がったというのに、斬魄刀も持っていない、そして霊圧の欠

片も感じられない父上に対して襲撃してこないでただそこで冷や汗を流すばかり。

「どうした、名乗ったから、かかってきても良いんだぞ？」

「ッ……」

父上が敵に向かって挑発する。

斬魄刀を解放した相手に対して、未だ斬魄刀すら手にしていないその姿で。

仮にも戦いを楽しんでいたとはいえ、加えて限定霊印の状態だったとはいえ、副隊長の私が傷を負わされた相手に対してこの余裕。

総隊長との戦いを経て、いくら強くなったと思っていたが、未だ父上のいる場所までは距離が有るみたいだ。

手を伸ばしたら届く距離にあるかと思っていたのに、そんな生易しいものではなかった。

「仕方がない。ならこっちから行くでしょう。気を緩めるなよ？」

一瞬で終わるから」

敵に自分が動くことを告げて、それで敵は身構える。

空中戦が得意だと言っていたはずなのに、飛びまわっている方が彼にとつては有利なはずなのに、父上が動くその一瞬に対して神経を張り詰めて身構えているようにしか見えない。

私も、父上の戦いを見逃さないように集中して父上の姿を見ておく。

斬魄刀も使わずに、どうやってこの相手を倒すのか。

そして、そう思った瞬間には父上の姿は目の前からぶれていた。

「 蒼火墜」

一瞬、いや、刹那。

時間など無いに等しいほどの速度で父上はいつの間にかアランカルの頭を左手で掴んでいて、目で追えたのはやっと父上がその左手に霊子を収束させたところ。

当のアランカルなど、何が起こったのか分からない内に命を落としたのだらう。

悲鳴を上げることも無く、父上が掴んでいた頭だけではなく身体の全てが鬼道によって燃やし尽くされる。

瞬歩で敵の上空に移動して、その頭を左手で掴んで、詠唱破棄の鬼道を使い終わる。

その全ての動作が洗練されていて、早過ぎて目では追い切れなかった。

いくら限定霊印を施されているとはいえ、身体が追いつけないならともかくとして、目で追えないというそのことが父上と私の間に広がっている差を如実にする。

「済まんな、名前を聞いてやる暇も無かった」

詠唱破棄の、三十番台の鬼道でこの威力。

アランカルの外皮にはそこその霊圧硬度が有ったはずなのに、それを無視するかのようにして一瞬で存在をも消し去ってしまった。凄い、という言葉でしか表現できない。

百年も必死に修行して、卍解まで会得してやっと父上のいる場所に辿り着いたと思ったら、まだまだ追いついていなかった。

白哉の祖父が、確か父上の後の六番隊の隊長の筈。

白哉の力量は知っているし、卍解を会得して隊長格に匹敵する実力は持っていると自負していたのに、それでも尚遠すぎる。

これが、総隊長を唯一超えると認められた父上の力。

「さて、邪魔者もいなくなったところで親子水入らずの話でもするか」

自分の家に戻ってきて、戦況が変わったら参戦しなければいけないという天雫の事を考えて、お茶を入れて茶菓子を持ってきてから屋根の上へ。

読み通り、天雫は無理に行きたいと言った上にそれならば治癒要員且つ前線に送ることのできる人材という事で、現世に来たらしい俺が現世に潜んでいるかもしれないことについては、現状としては戸魂界は見つけても静観するつもりらしい。

というのも、中央四十六室が全て藍染によって殺されてしまったから、全決定権が山本総隊長に降りてきていて、それゆえの英断によって、仮に俺が現世にいたとしてもいなかったとすることになっているようだ。

藍染との決戦が控えている以上、無理に俺や平子たちを殺そうとして戦力を失いたくないというのもあるのだろう。

仮に俺を殺すのであれば、烈に浮竹、春水、総隊長の四人で来なければ危うい。

総隊長と俺の斬魄刀の能力は完全に優劣関係にあるし、十番隊の隊長が氷雪系の斬魄刀を持っているらしいが、此処から遠く、見えている戦闘を見るに大したことはなさそうだ。

つまり、俺一人を殺すためだけに三人もの隊長格が抜けた護廷十三隊の隊長全てをつぎ込まなければならぬという事になる。

しかも、総隊長や烈が知っているころよりも俺の実力は自分でもわかるほどに上がっているし、奥の手が残されているからたとえ隊長格が何人相手でも負けるようなことは思いつかない。

そもそも、烈が敵になるとは考えにくいうえ、天霽が俺の味方で居てくれるというのだから尸魂界も、決戦を終えた後に中央四十六室が再編されたとして、俺を抹殺する命令を出そうなどとは思えない。

「む……空間凍結か。今さらだな」

「本当ですね。他の方々には必要でしょうが」

「どいつもこいつも負けそうだな……今の護廷十三隊の隊長達は一切どうなってるんだ？　いくら限定状態でも酷過ぎるだろ」

ポリポリと煎餅を齧りながら見物。

天霽の目には戦場が見えないそうだが、霊圧探知でどうにかどちらが劣勢でどちらが優勢かは分かるだろう。

幸いにしてこの義骸は、魂魄の状態には一歩及ばないものの、使用者が霊力を消費すればそれなりに動いてくれるから視力の強化もできる。

それゆえに、数キロ先までしっかりと見ることのできる視力によ

つて、戦況は随時把握できる。

氷雪系最強の斬魄刀であるらしい、氷輪丸という斬魄刀を持つ十番隊長は数百年に一人の天童と呼ばれているらしいが、それにしてはかなりの劣勢だ。

というか、卍解まで使い、傷を氷で一時的にふさいでいるから動いているにすぎない。

アレで天童と呼ばれるなら、昔の烈はどうやって呼ばれていたのだろうか。

「そう言えば烈は怒ってたか？」

「あ、そうでした。母上からの手紙を預かっています」

貰い受けて読もうと思ったら、その長さに二人して絶句する。

どんな力で畳んだのか、四つ折りにしてある手紙だと思ったら封の中は四つ折りの状態が四つ折りにされていて、びっしりと文字が埋め込んであった。

一瞬だけ読むのをやめようかとも思ったが、

「……読まないと怒られるよな？」

「伝説の流魂街ポイ捨てにされるかと思えます」

という天雫のアドバイスに従って数分をかけて読むことに。

手紙など貰うのが初めてだったから何故かむずがゆかったが、中身はその大半が俺に対する愚痴。

急に消えたから苦労したのだ、天雫が俺に似て戦闘を楽しむようになったってしまったのだ、天雫がこの間総隊長に十四郎と春水と三人で喧嘩を売ったのだ、俺が消えてから俺の墓（仮）に若い女の子が現れるのはどうということかだの、帰ってきたら覚えているよこの野

郎的な内容。

多分、帰ったら二十四時間耐久説教コースが待っているに違いない。

しかもその上で、抜け出そうとしたら捕えられてゴミの様に捨てられるのだ。

思い出しただけで震えてしまう。

「凄く怒ってるな……。……って言うか、お前総隊長に喧嘩売ったのか!？」

「あ、はい。浮竹隊長と京楽隊長と三人で。ですが、全く齒が立ちませんでした」

「良く生きてたな……。あの人は昔剣道で俺と烈が二人がかりでやっとな引き分けに持ち込んだんだぞ？ 死んでないだけでも上出来だよ」

「えへへ。褒められてしまいました」

「いや、照れるほど褒めてはいない。生きてることに感心してるだけだ。……。っと、限定解除か」

許可が下りたのか、限定解除して隊長一人に、副隊長二人の霊圧が急激に上昇する。

そしてそのまま見物していたら、どうやら何とか勝利したみたいだが、直後に十番隊長が血を吐いて倒れる。

無理が祟ったということだろう。

氷で傷口をふさいでいて、敵を倒して安心したことで霊圧を解いてしまったからそうなることは自明の理だったが。

これで残っているのは、黒崎一護が戦っている蒼い髪のアランカ  
ル。



「……天栗。一人死にそうだが良いのか？」

「……え？ あっ！ 父上、私は失礼します！」

「おう、気をつけて行けよー」

霊圧探知ではなく、視力に頼って状況把握をしていたから気付くのが遅れた。

二人で戦っていたはずなのに、いつの間にか女性死神がやられていた。

そしてそれを天栗に教えてやれば、霊圧探知を使ってから焦るようにして現場へ。

先遣隊として来ていたから、知り合いだったのかもしれない。

まあ、そもその話として実力者が送られてきているという事だから知り合いじゃないという事はあまり考えられないが。

そして天栗が移動して治療を始めてから数分後、ズボンのポケットに入れていた携帯が鳴ってそれに出ると、今度は浦原から。

どうやら先ほどの戦闘で、浦原商店の子供が一人重傷を負ったらしい。

という事で俺は治療の為に浦原商店に向かう事に。

あそこにはテッサイもいたはずだが、まあ天水の治療能力には流石の元大鬼道長も及ばないだろう。

「……死ぬなよ、少年」

最後にオレンジ髪の死神、黒崎一護を一瞥してから瞬歩で移動する。

どうやら相変わらず劣勢に立たされているようだったが、あのアランカルがなぶり殺そうとしている間は手を出さなくても大丈夫だ

ろう。

それに、天稟も近くに向かったから万が一の時には助けしてくれるはず。

平子が、彼が死ぬまで放っておくという事はないだろうが。

## 第二十一話 親子、邂逅（後書き）

これから先は、ストックのあるところまでの更新になりそう。

というのも、本日発売の『Rewrite』を早速買ってやり始めているから。

鍵作品だから恐らくは一カ月程度かかるのではないかと思われる…

…。

## 第二十二話 修行

「ほう……中々立派な所じゃないか」

「そうツスカ。喜んでもらえて何よりです」

浦原商店の地下、その広い空間の中には複数の者たち。

そのうち、一士が此処へと足を踏み入れる前から既にこの広い空間を利用して戦っていた者たちが二人。

一人は一士も隊長を務めたことのある六番隊の現在の副隊長。

この間のアランカルとの戦闘では何とか限定解除によって撃退したが、それ相応の傷を負っていた者だ。

その彼が今は卍解を使って、もう一人と修行と称して戦っている。相手は、浅黒い肌を持つ右手に何か装備の様なものを付けている人間。

背丈は人間にしてはかなり高く、恐らくは天霽よりも身長が有る。能力は見る限り、右手の装備の様なものから霊圧を固めて打ち出すもの。

威力は中々だが、それだけではこれからの決戦に向けてとても戦場に足を運ぶことは許されないだろう。

だが、確かに浦原の言うとおり、伸びる余地はあるように感じられる、と一士は見ながら思う。

「そんじゃ、まあボチボチこっちも始めるとするか」

「……本気でやらないで下さいよ？ この場所作るのが大変だったんですから」

「心配するな。そのあたりの加減は心得てる。天霽、行くぞ」

先日のアランカルとの戦いから既に二日目。

天雫は怪我をしていなかったし、その天雫に修行を付けて欲しいと頼みこまれたので浦原商店の地下の空間を貸してもらおう事に。

平子たちの所でも良かったのだが、あそこでは今、黒崎が虚化の修行をしているから邪魔をする訳にもいかず、かと言ってそこそこ広くて周りを気にしなくても良い修行の空間を自分の家にも持っていないから、結局は此处に落ち着いた。

一土と天雫、二人は地下の空間に入ってから別の二人組とは大分離れた場所へと移動して、それぞれに戦闘の準備を始める。

天雫は、死神の標準の衣服である黒い死覇装に、邪魔にならないようにと後ろで一つにくくられたポニーテール。

髪形は偏に一土の希望のままである。

いつもは腰に差してある斬魄刀も既に抜かれていて、うっすらと怪しげな光を放っている。

一土は最近のスタイルとなりつつある、黒いジャージに動きやすいようなスニーカー。

その手にはこれから修行と称して戦うために必要な斬魄刀は握られていない。

「……父上、斬魄刀は？」

「必要ないだろ。天雫は勿論卍解まで使っているぞ」

「むーっ……絶対に斬魄刀を使わせて見せませす」

「そりゃ楽しみだ」

ニヤニヤとしている不敵な笑み。

それに対する天雫は、頬を膨らませていかにも遺憾であるという事を示す。

崩玉の完全覚醒まではそれなりの時間がかかるという事で、決戦は冬になるという事が分かったから、天雫の頼みを聞いて始めた修行であるが、天雫は一土に自分の成長した姿を間近で見てもらえると楽しみにしている一方、斬魄刀すら抜いてもらえないことを少しイラツとする。

三、五、九の隊長達が反旗を翻して護廷隊から抜けて、そして卍解を使える副隊長の中でも最も古株の自分は既にどこかしらの隊長になることは決定事項だ。

隊長の空席は早いところ埋めなければならぬし、卍解を使えるのであれば隊長としての資質には申し分なし、加えて既に総隊長と戦った時に浮竹隊長、京楽隊長とも一緒に戦ったから、隊首試験の枠である隊長三人の検分も通過している。

「行きます!」

「おう」

天雫が予告をしてから、斬魄刀を両手で持って上から下に振りかぶる。

剣速は隊長格としては申し分なし、むしろその隊長格の中でも早いと言える方だろう。

その剣速で上段から振り下ろされた刀は、確実に一土のいた場所を捉えて、正中線をなぞって身体を縦に裂く。

「え?」

力量差から考えて、本気でやっても確実に避けられると思っただけに、一度目で当たってしまったことに天雫は自分でも驚く。

いや、驚きという感情も無いかもしれない。  
自分の父を、修行とは言いながらも斬ってしまったのだ。

「何してる、天雫。敵から目を離すな」

「……うそ」

直後、自分で父を斬ったと思っていた天雫の背後から、その当人の声が聞こえてゆっくりと振り返る。

そうすると、そこにいたのは確かに先ほどと変わらない姿で悠然と立っている一士。

傷など何一つ見当たらない。

「早過ぎて目で追えなかったか？ 今のは瞬歩も使っていないんだが」

「そんな……私が目で追えないなんて……」

「一つ目の教示だ。敵の動きを見るんじゃない。その前の動き始め、予備動作で判断しろ。じゃないと早い敵に触れることも出来ずに終わる。次、行くぞ？」

「……はい」

再び、構える。

今度は油断など微塵も無く、しっかりと重心を意識して。

頭は戦闘に切り替える。

何処かで過信していた。

すぐにでも父上の斬魄刀を出して、解放させると。

傲慢になっていたのかもしれない。

総隊長との戦闘を経て、隊長二人と一緒に戦って、その上で自分

の力が隊長格にも劣っていないと思つて。

何処かで、父上のいる領域には既に足を踏み入れていると思つていた。

だが、この間と同じくして、それは再び間違いだつたと漸く確信する。

この百年間、私が修行して強くなったのと同じように、父上もこれからの藍染との戦いを意識して百年もの間、自己の研鑽に励んでいたのだ。

「白雷」

「くっ！」

放たれた鬼道を、どうにか避ける。

瞬歩ではない、何か別の歩法を使って近づいてきた父上は指を私の肩に押し当てて、当然のように詠唱を破棄して鬼道を使ってきた。その一条の雷は寸前で私が避けたことで後ろの岩にまで飛んで行って、着弾すると跡形も無くその岩を消し飛ばす。

その威力を見た瞬間、ゾツと冷たいものが背中を走る。避けなければ、確実に肩が撃ち抜かれていた。

修行など、とんでもない。

父上は、本気だ。

「吹き荒べ！ 疾風！」

「ふむ……漸く良い顔をするようになった。死を意識した、戦士の顔だ」

ツーンと汗が流れ出る。

そしてようやく、意識が冷静になったところで父上の霊圧に気付



く。

先ほどからこの空間を充滿している父上の靈圧に。

「義骸のせいで靈圧がないように感じられた訳ではなかった。

確かに義骸の効果としてこの間までは靈圧が閉じられていたけれど、今は父上も靈圧を放出している。」

修行を始めてからか、それとも鬼道を使ってからか、或いは私が気付いた一瞬からか。

多分、最初の一撃を私が放ってからだ。

全てを呑みこむような深海の圧力を思わせる靈圧。

靈圧が周囲を構成するものとは別だと気付かせないほどに、靈圧の中にいると誤認させてしまうほどに巨大で濃い。」

「烈風一刃！」

靈圧を刀に込めて斬撃を横に。

一番避けにくい、腰の所へ。

左右に回避することはできない。

靈圧を可能な限りこめている斬撃は、幅が十メートルほどはある。本気で、殺すつもりで放った一撃。

「……良い一撃だ。まさか二撃目で終わりとは」

限定状態とはいえ、本気で放った一撃を、父上は避けるようなことはせずに、真っ向から手の甲ではじいた。

昨日見た、靈圧を一部分に集めてその靈圧硬度を上げる技術だ。彼我の実力差を理解したうえでの、殺す気の一撃。

それはどうにか父上に血を一滴、地面に落とさせるほどには通用したようだ。

「次、行こうか」

そしていつの間にか、父上の手には斬魄刀が握られている。  
一般隊士の持つ浅打よりも長い、柄が碧く、鍔が蒼い斬魄刀。  
尸魂界史上、流水系最強の斬魄刀にして全斬魄刀の中で最優の斬魄刀。

総隊長の流刃若火とはまた違って、何も為す術が残されていないかのように重い霊圧。

まだ、解放していないというのに。

そして、漸く父上に刀を抜かせたなどという喜びは一瞬で消えうせる。

先ほど父上に言われたとおり、修行とはいえ死ぬ覚悟を。  
そして、一度剣を握ったのならば、敵を斬る覚悟を。

父上の握った斬魄刀の刀身に映っている自分の姿を見て、こんな表情を出来るのだと初めて知った。

相手を前にして、尻込みしそうなほどになっている自分。

死ぬ覚悟と、殺す覚悟。

それを伴っている自分の表情。

そしてそれだけならばずっと昔にしていたはずなのに、相手を前にして弱気になっている自分は初めて見た。

死ぬ覚悟をしているのに、力の圧倒的な差に僅かながら怯えている。

「ほら、呆けるな」

「！」

右から迫って来ていた命を奪う刃を、何とか受け止める。

父上は片手で振っているはずなのに、両手で持っていてもその威力に負けて横にずらされる。

止めていなければ、確実に頭が半分に分かれていた。本当に、本気でやらなければ殺されてしまう。迷っている暇などない。考えている暇などない。ただ、この戦いに集中するだけ。

「卍解」

斬魄刀を地面と垂直に、身体の前に構える。そこへありつたけの霊圧を込めて、二回目の解放。卍解は、今までに白哉と母上以外には見せたことはない。他の者たちは私が卍解を使えるという事を知っているが、実際にこうやって目にするのは父上が三人目。こんな地下の空間では使うべきではないのかもしれない。けれど、使わなければ戦えない。

「颯風灰塵」

斬魄刀は卍解になったことでさらに大きく。けれど、能力ゆえに刀身をはつきりと見ることはできない。そして、自分を取り巻くように霊圧が回る。それは風になって、竜巻のようにして私を守ってくれる。立っているだけで地面を少しずつ抉って、土は砂塵へと変わる。そして周りには一本、攻撃用の竜巻が荒々しく回る。

「凄くないか。これならもう少し本気で良さそうだ」

「私の斬魄刀の卍解は、風を意のままに操る能力。本来であれば五本の竜巻が襲いかかる筈ですが……残念ながら限定状態では一本が限度。それでも、今の父上になら対抗できるはずです」

「なら、やってみるか」

まるで準備運動でも始めるかのようにして屈伸してから、伸びの瞬間に一気に力を爆発させた。

高く飛び上がったから力を込めて、そのまま重力による落下を力に加えて一気に刀が振り下ろされる。

それに対して竜巻を移動させて、父上にぶつける。

飛び上がっている状態にぶつければ、下から上へ巻き上げるように吹いている風の餌食。

「フツ　！」

短く息を吐いたのがこちらからも確認できて、正解で起こした竜巻は一刀両断にされる。

巻いていたはずの風が消えてなくなったことに動揺を隠しきれず、一瞬だけ動きが硬直してしまう。

けれど、次の一撃の為に父上は膝に再び力を溜めていて、それを見た瞬間に消された竜巻をもう一度発生させる。

「遅い」

その攻撃は追いつかず、肉薄されてしまう。

それでも、父上の振った刀は私の体には届かない。

私の周りに吹いている風は、内側から外側へと吹き付けているから、ちよつとやそつとの衝撃ではこの防御を破ることはできない。

風に刀が当たって弾かれたその瞬間に、再び竜巻を父上にめがけて移動させる。

今度は完全にとらえることが出来て、父上をそのままなすすべなく上に吹き上げる。

外へ出ることのできない場所に閉じ込めたら、そのまま上に跳躍して、唯一の出口である上から中に剣を刺す。

「なるほど、必勝のパターンか。相手が俺じゃなかったら終わってたな」

「そんな……」

「まだ続けるか？」

「……お願いします」

そのあと三十分近くも戦い続けて、結局父上に一太刀も打ち込むことはできなかった。

その代わり父上にも攻撃を貰わなかったけれど、多分手加減をしていたのだろう。

私が知覚できるギリギリのラインを見極めて、気を抜いたら死んでしまうくらいの力で戦っていたのだ。

霊力は、死の危険に直面した時に一番上がりやすいから、父上はそれを狙っていたのかもしれない。

結局、次の一日は起き上がることすらできなかったから聞けなかったけど。

## 第二十二話 修行（後書き）

天雫の卍解。

出てきてそれだけという。

まあ、今後使うようなことも一回くらいは有るだろう……多分。

そして隊長格の卍解に対して封印状態で戦って圧倒する一士。

最早戦力は計り知れない。

そして今日、Rewriteをやりながら少し進めたところでスト

ックの部分ではあるが大変大きな間違いを発見。

何と一士が限定霊印とやらをやってしまったているせいで、例のリス

トバンドと合わせて霊圧が隊長格の20倍に（笑）

俺はあと二回、変身を残している。

的な展開にしようとした結果がこれだ。

さて……どうしよう。

## 第二十三話 vs 破面

「お……？ アランカルか」

今日も今日とて、相変わらずこの一カ月は天栗の修行に付き合っ  
て午前中は天栗を追い詰めるばかりであり、午後は自分の斬魄刀と  
の対話に費やすだけだと思っていたのだがそうもいかないらしい。

この一カ月、天栗の修行はかなり過酷にしておいて、最初の方こ  
そ一日休みを入れなければ続けられなかったのが、この修行方法に  
なれたのか最近では午前中を修行で午後を休憩にするという方法が  
とれるようになったからほとんど彼女もレベルアップしている。

この修行方法は、俺自身が強くなるために使っていた方法だから  
間違いはない。

虚圏に入ってしまった時に、毎日が死と隣り合わせの戦いであり、  
そこで否応なく鍛え上げられた経験を適用しているのだ。

死の危機に直面した時が、魂魄の靈力上昇を促す最も手っ取り早  
い方法であることは間違いないし、靈力の上昇はそのまま靈圧の上  
昇につながり、単純に言えばそれは力の増大になる。

尸魂界にいたころ、男と女という性別の区別が有るにもかかわら  
ず、烈が剣道においてあの強さを誇っていたのは何も技の冴えだけ  
ではない。

靈力による膂力の強さもあってこそそのことだ。

つまり靈力、靈圧が強くなればなるだけ、自分も強くなれるとい  
う方程式は間違っていない。

とはいえ、常に死を感じていなければいけないからかなり危険な  
修行方法であるという事は何も否めないし、そこまで急速に成長する訳  
でもない。

この一カ月、そんな危険な修行をしていた天栗でも、靈圧は三割

ほど増したかもしれないという程度。

まあ、元々隊長格の霊圧が有ったから伸び白は少ないためにそれでも驚異的な成長率なのだが。

「……そう、みたい、です」

「おいおい、無理だから動くなって」

伝令神機を片手に、アランカルが現れたことを知らされた天隼が動かない身体を無理に起こそうとする。

とは言っても、起き上がるのは土台無理な話だ。

今日も午前中はギリギリまで追い込んだから、疲労が激しいだけではなく、集中力も今日はもう持たない筈だ。

というか、そんなに早くに起き上がれるようなら俺の追い込みが甘いという事になる。

それはつまり、明日からはさらに追い込まなければならないという事だ。

「行かなきゃ……エスパードが来てるんです……」

「ああ、強い奴が十体いるんだっただか。何体来てるんだ？」

「四体、です」

現世に來ている死神は、隊長が一人に副隊長が三人、そして席官が二人。

問題はそのうちの一人の副隊長は向こうの方で修行の疲れを押しでも出て行こうとしていること、そしてもう一人の副隊長は此処で起き上がることもできない状態であるという事。

多分、黒崎は平子たちに仮面の保持時間を延ばす訓練を受けてい



るはずだから、戦力には数えられないと考えた方が良さだろう。

という事は、戦える戦力は四人。

限定解除の許可が既に降りていて全力で戦えるとはいえ、同じ数のエスパルダが相手では勝てない……か。

「寝てる。俺が行くから」

「父上、が？」

「ああ。どうやら向こうも代わりに浦原が出るみたいだしな」

視線をやると、死神の男一人に、人間の一人が、浦原に諭されている。

で、斬魄刀を浦原が既に抜いているという事は代わりとして出るのだろう。

であれば、こちらも天雫の代わりとして出なければならぬまい。

今の状態でアランカルの上十体にランクされる奴らがどの程度なのか、という事は知っておきたいし。

浦原商店の地下を出てから、少し離れた場所にまで移動する。

激しく揺れている霊圧は六つ。

エスパーダが四体に、迎え撃っている死神も四人の筈だから数が合わない。

二人か、二体か、或いは一人と一体が戦わずに休んでいるということか。

そして近くまで瞬歩で移動してみれば、戦っているのは三人と一体で、二体のアランカルは休憩している。

遠くの離れたところで戦っている霊圧がもう二つ。

一つはこの間の青い髪のアランカルに、もう一つは黒崎のものだ。どうせそっちは危なくなったら平子たちがどうにかしてくれるだろうから、こっちをどうにかすれば良いか。

「って、おい……掴まってるのかよ。役に立たないな」

「そう言わないで上げて下さいよー。あの人たちはまだ隊長格じゃないんですから」

「そう言えば昔から思ってたんだが、隊長格つてのには副隊長は含まれないのか？」

「そりゃそうでしょ。隊長のクラスの実力を持っている人たち、って意味で隊長格って言うんツスから」

「ふむ……なら確かにあの三人は隊長格ではないな」

八本の、タコの様な足に対して全く近づけずに、しかも掴まってしまうっている。

アレで本当に護廷十三隊の死神か。

しかももう一人いるはずだった十番隊長は最初にやられたのか、霊圧は感じられるものの見当たらぬ。

天雫が万全の状態なら普通に互角以上に戦えそうな敵だが……。同じ相手とばかりこの一カ月戦っているから、俺の基準もおかしくなっているのだろうか。

「あれは拙いな。浦原、任せた」

「はいな。啼け 紅姫！」

針の様な物で女性を串刺しにしようとしていたから、浦原が彼の斬魄刀の能力を使って紅い斬撃を飛ばしてそれを未然に防ぐ。

確か名前は、紅極波だったか。

斬撃の威力としては、かなり高い方に分類されるだろう。

地面を走ったそれは、見事に最後に上昇して触手の様なものを斬った。

「いやー、間に合った間に合った。危なかったツスねー」

「相変わらず何かムカつく演技だな」

「そうツスか？ 商店の主人としてお客さんに愛想よくするために会得したんツスけど」

「……誰だよ、君ら？」

斬られてからこちらの存在に気付いた間抜けのアランカルがそう

たずねてくる。

恐らく、この三体の中で一番強いのはこのタコのような奴だろう。

霊圧が一番強く感じられる。

ただし、もう一体のこの間来ていたヤミーとか言う奴は何だか霊圧に空きがあるような感じがするし、もう一体の訳のわからない方は文字通り霊圧も訳のわからない形をしている。

「あ、こりやどーも。ご挨拶が遅れちゃいまして。浦原喜助、浦原商店ってしがない駄菓子屋の店主やってます。以後、お見知りおきを」

「伊吹　じゃなかった。卯ノ花一土だ。俺の方はよろしくしないでいい。どうせ以後なんてのは無いだろうからな」

どうにも苗字を間違えてしまう。

公的なもので必要な書類には、この百年間、ずっと伊吹と書いていたから仕方ないと思うが。

百年間も違う名字を使っていたのだから、今さら元に戻って名乗りをするというのもなんだか不思議な感じだ。

「へー。随分変わった人がいるじゃないツスカ」

背後から訳のわからない方のアランカルが襲い掛かってきているから見向きもせず蹴り飛ばしたところで、浦原は背後を振り返ってそう言う。

どうやら後ろの変な餓鬼の方をやるつもりらしい。

まあ、既に解放している奴の方がエスパーダとやらの実力を十全に測ることができそうだからこちらはそれで良いのだが。

「アー！」

霊圧の高まりを感じて、一瞬にして瞬歩でその場所から移動する。どうやら何らかの技を使ったらしいが、浦原が直前に避けて下さいと言わなければ避けなかったかも知れない。

どうせ血霞の盾で防ぐだろうと思っていたから、少しだけ拍子抜けというか、予想外というか。

そして浦原はどうやら俺と同じように空に避けたらしい。

まあ、背後の二体は浦原に任せて問題ないだろう。

新しく開発したとかいう携帯用の義骸を使っていたから、もう一体にぼこぼこにされているようには見えても問題ないはず。

「やれやれ。ボクの邪魔してくれた奴だから、ボクがやってやろうと思ったのに。ヤミーの奴……アレじゃどの道生きちゃいないな」

「おい、よそ見してるなんて余裕じゃないか」

「まあね。君、どうやら図体がでかいだけで霊圧はそこまで大きくないし。そんな霊圧じゃこのお姉さんたちと同じですぐに捕まえられそうだし」

「そうか、じゃあやってみろ」

分析をするまでも無く、この男は間違いなく自分に過剰な自信のあるタイプだ。

外見や感じられた霊圧だけで判断しようとするから、相手の真の実力を見逃す。

こちらはまだ始解も卍解も、虚化もしていないというのにそれで俺の実力のほどを理解して彼我の実力差だと思っただらしい。

勘違いも良いところだ。

奴は既に斬魄刀も解放して、こちらは十分に相手の力量を正確に

測ることができているというのに。

そして、襲い掛かってきた触手の一本を、防御するまでも無くかわす。

ギリギリまで引き付ける必要も無ければ、思い切り回避する必要も無い。

ただ、来たからかわすと言った感じ。

速度も大したことはない。

限定状態の天雫の剣速の方が、まだ早かった。

「クソッ！ これなら！」

一本で駄目ならば、二本、三本と本数を増やしてくる。

そしてついに、三人を捕まえていた以外の五本の全てを使って俺を捕えようとしてくるが、論外にもほどが有る。

本当にこいつがエスパードなのか、理解に苦しむほどだ。

せっかく強敵との戦いに手加減しなくても済みそうだと思っていたのに、これでは期待はずれも良いところ。

「ハア……つまらん」

しょうがないから、三人を拘束していた触手を全て切り落とす。

耳にうるさい悲鳴を上げなかったのは大したことだが、先ほど浦原に切り落とされた時にも痛がるそぶりは見せなかったから、即座に生え変わったりするのだろうか。

「四人とも下がってる。巻き込まれて死にたくなかったらな。後、俺が誰かとかそう言う面倒なことは後で浦原に聞いておけ」

「クソッ！ クソッ！」

「……おい、その小さい隊長さん、俺は四人って言ったからな。あんたも下がってる」

有無を言わずに何か仕込んでいたらしい隊長も下がらせる。

何か色々とアランカルが喚いているが、問題なし。

どうせ自分の腕は切り落とされても生えるとかそういう関係の事を言っただけの驚愕を誘う演技だというのは分かり切っていることだ。そんなことをせずに、話している今の隙を狙えば良いのに。

まあ、隙に見えるだけで実際は隙でも何でもないが。

「おい、喚いてないでさっさとかかってこい。五本じゃなくて自慢の八本の触手が有れば、こんな霊圧の持ち主の俺はすぐに捕まえられるんだろ？」

ランサ・テンタクロ  
「蝕槍！！！」

「良いね、うん。やっとエスパードって言うくらいの迫力は出て来た」

八本の触手が、前後左右、さらには上下をもふさいで一度に襲い掛かってくる。

檻の様にして囲んでくるその触手に対しては、逃げ道は最早残されてない。

が、それは普通の死神の話。

生憎とこちらは百戦錬磨にして、そこらへんの隊長とは訳が違う。

「が、まだ遅い」

「ハッ！ 死ね！」

「虚閃か！」

嘲笑うかのような後に、八本の触手の全てから虚閃が放たれる。やはり奥の手を残してはいたようだ。

流星に攻撃手段がこの触手だけならば、エスパーダと言う割にはあまりに弱く、この間来ていたエスパーダではなかった奴らの方が強かったからあり得ないと思っていたが。

流星に虚閃が八つも混ざった砲撃を喰らえば、ひとたまりも無い。

「縛道の八十一 断空」

防御壁を作り出して虚閃を完全に防ぐ。

八つの虚閃が混ざってそれ相応の威力になっているとはいえ、虚閃で肩を挟られながらも何とか倒した最上級大虚の自分の血を虚閃に使う霊圧に混ぜる技には到底及ばない。

あの技は空間を歪めてしまうほどだったから、詠唱破棄の断空では簡単に破られてしまう筈だから。

「さて、お返しに俺も同じようなことしてみようか」

どうやら奴の最大級の技だったのか、あの虚閃を防がれたことだから俺の事を警戒しているらしい。

が、今さら警戒したところで遅いというもの。

警戒するならばこの戦場に現れて、しかも死覇装を着ていない上に気配に気付かなかったという時点で警戒しなければならなかった。

そして、今さらこちらの霊圧が本気ではなかったという事に気付いたところで遅すぎる。

「破道の八十八 飛竜撃賊震天雷砲！！」



「なっ

!？」

急いで触手を自分の前に展開して、八本のそれで防御する。

が、そんなものなどお構いなしに掌から放たれた巨大な光線は、八本の触手だけでは飽き足らずにその後ろの本体にまで届いて消し飛ばす。

隊長格の霊圧が完璧に込められた、そして一片の無駄も無い八番台の破道は詠唱を伴ったのと同じ完全な威力を誇り、先ほどの八つの虚閃よりも高い威力で少し空間を歪めた。

そして、エスパーダの一人はその存在を完全に消し去られる。

「やはり以後は無かったな……名も知らぬアランカル」

## 第二十四話 援軍

冬の決戦に向けて、尸魂界の死神のみならず、現世に先遣隊として派遣されていた死神達もそれぞれに修行をして力を蓄えていた中、虚圏から十刃クラスのアランカルが四体現世に送り込まれた。

先遣隊として現世に向向っていた十番隊長以下、四名の死神がこれに応戦するも、一体のエスパーダに副隊長クラス三人でも歯が立たずにやられそうになったが、救援として来た浦原喜助と卯ノ花一士によってこれを撃退。

アランカルを一体倒して、残りの三体は倒し切れずにネガシオンによって手出しすることができずにアランカルは虚圏に戻った。

そしてその翌日、人間の一人、井上織姫という少女が虚圏に拉致されたか、或いは自らの足で藍染のもとに向かったようだ。

その証拠に、その前日の戦いで黒崎が右手首を敵に刺されたらしく、しかし翌日になったら傷が見事にふさがっていて、件の少女の霊圧がその手首に残っていたらしい。

浦原の話によればその少女は人間にしては特異な力を持っていたらしく、藍染が狙う危険性が有ったから浦原が予め戦闘からは外すためにきつく言ったのだという事を後日になって一士は聞いた。

空間回帰でもなく、時間回帰でもなく、その上の次元の能力である事象の拒絶。

そんな能力を人間のままで有しているなど信じがたい話だが、実際にそうなっていて、藍染が彼女を虚圏に何らかの形で連れ去ってしまったのだから仕方ない。

そして虚圏側の戦闘準備が整っているという事が分かった現状、日番谷先遣隊と称されていた死神達は尸魂界の守護に戻らなければならぬらしく、その一員である天琴も早々に尸魂界に戻って行っ

た。

という話を聞いたのは、戻った後、一士は浦原に教えてもらったからである。

何しろ、井上織姫は朽木ルキアという死神の少女と、もう一人の男の死神にとつては大事な仲間らしく、それゆえに総隊長の命令に背いて虚圏に向かうやもしれない可能性があったから、即座に戻らされたのだとか。

その話を聞いて、一か月前から万が一にも突如として天雫が向こうに戻らなければならぬ場合を考えて、烈宛ての手紙を予め書いておいて天雫に渡しておいて良かったと一士は無性に安堵した。

アレだけの長い手紙をもらっておきながら、何のリアクションもなしでは総隊長の命令に違反しても烈が現世に乗り込んできかねない。

そしてそんなことになればかなりの仕置きを受けることになるのは最早決定事項であり、決戦が控えている今一分一秒も惜しんで修行に励んでいるというのに、そんなことに付き合っている暇はなかったのだ。

いや、そんなこと呼ばわりをしていることが知れたらそれはそれで新たな火種を産むことになりかねないのだが。

「おお、そうだ浦原」

「はい、何すか？」

「俺のことが尸魂界に知られてる以上、義骸に入ったままにいる必要もあるまい。義魂丸くれ」

「ああー！ そっぴやそっぴやでしたねー。忘れてました。テッサイさん！ 一士さん用の義魂丸持ってきてください。アタシの部屋の

机に置いてありますから」

一士が頼むと、傍を通りかかったテツサイに浦原が頼みこんで、義魂丸を取りに行ってもらおう。

尸魂界に、既に一士の生存が知られてしまっていて、しかも黙認されている以上、霊圧遮断型の義骸に入って生活する必要はもはやない。

既に決戦に向けて皆が力を蓄えているのだし、これ以上窮屈な義骸に入ったまま暮らさなければ追手に悩まされるという事も無い。

何年かかけて浦原が完成させたかなり魂魄の動きと一致する精緻な義骸だが、しかし本人の動きを完全に再現できる訳ではないのは困ったことだ。

いや、一士に限ったことだが。

本来であれば、平子たちも同じように使用しているその義骸は、魂魄の状態でいるのと全く変わらない動きをすることができる。

それこそ、一般隊士が使うのであれば本来の動きよりももっと早く、力も強くなるだろう。

それほどに能力の高い義骸なのだ。

最近の技術開発局は人間とそう変わらない義骸を作ることにも力を入れていくらしいが、義骸の状態でも魂魄の状態と変わらずに戦えるというのは魅力の一つだ。

そしてそれは数十年かけても完成しなかった訳だが、技術に関しては右に出る者のいない浦原が数年かけてそれを完成させたのだ。

しかも、霊圧遮断型をつくって、しかしそれも原因の一つで彼は尸魂界を追放された訳だが。

「これですか、店長」

「あ、そうツス。ありがとうございますテツサイさん。ささ、一士

さん」

「おう、済まんな」

一士はテツサイから義魂丸を受け取って、それを飲み込む。技術開発局が提供している普通の義魂丸ではこの霊圧遮断型の特殊義骸から抜け出すことはできない。

そもそも、魂魄と変わらない状態の動きをすることができることがこの義骸の特殊性であり、特徴でもあり、そして何よりの利点だったために、抜け出すという事は想定されていなかったのだ。

だから、抜け出すためには浦原が開発した特殊な義魂丸を呑む必要がある。

そして一士がその義魂丸を呑みこんでから直後、魂魄と義骸は何の問題も無く分かれる。

「……ふむ」

「どうツスか？ 久しぶりの御自分の身体は？」

一士は握り拳を作り、それを開いて握力を確認したり、或いは斬魄刀の柄を握ったりその刀を抜いたりして自分の体の調子を確認する。

百年ぶりの魂魄の状態だ。

足の指先から頭のとっぺんに至るまで、身体の各箇所を丹念にチェックして自分で動けるか確かめる。

その調査は身体の動きだけではなく、霊力や霊圧、さらには動体視力なども僅か十数秒の内に全てを終える。

「……調整が必要だな。身体は縮こまってるし、霊圧も萎んでる」

「アタシの義骸は尸魂界史上でも最高傑作だと自負してるんですがねえ……やはり物足りませんでしたか」

「まあ、こればかりは仕方ないことだ。元々魂魄の動きに完全一致する義骸つてのが無理な話だったんだから。しかし……死覇装は兎も角としてこの手袋まであるとはな」

「……？ 何すか、それ？」

懐かしげに手袋 というよりはリストバンド を一土は眺めて、そんな様子を浦原商店の者たちを代表して浦原は尋ねる。

部屋には義魂丸を呑みこむときに既に全員が集まっていて、一番大きな部屋と言えどかなり窮屈になっている。

まあ、大の男が三人に子供が二人、そしてもう一人義骸に入っている義魂丸がいるのだから仕方ない。

とりあえず一土は説明する前に自分の義骸を家に戻らせて、色々と指示を与えておく。

これから当分は自分の家に戻らないから、義骸が家に済むことになる。

食べたりという事は必要ないが、せめても掃除くらいはして欲しいのだ。

「そついや言っただけじゃなかったか。俺はこいつで霊圧と霊力を抑えてるんだよ」

「……………ハイ？」

「だから制限してるんだよ、霊圧と霊力を」

「……………ちなみに外したらどのくらいになるんすか？」

「倍だったか？ まあ、昔のことだから忘れたが。それじゃちよいと地下の空間借りるぞ。身体の感覚取り戻さなきゃならないからなあ、この二人借りてくわ」

そう言っで一土は子供を二人、拉致するようにして地下に連れていく。

何の事はない。

相手がいなければ戦闘に入った時にどの程度動けるのかという事は分からないし、ある程度の衝撃を与えてもらわなければ今までの義骸と違ってどの程度まで素手で耐えられるのかという事が分からなくなる。

それゆえに一土は二人の子供を地下の空間に連れて行って調整の相手としたのだ。

浦原の方が良いことは確かだが、しかし彼は今現在、総隊長から与えられた任務をこなしているからその頼みをすることもできないし、テッサイはその手伝いをしているから彼も同じことだ。

そして部屋の中に残された浦原は、地下の空間に行った一土を見送って帽子を深くかぶりなおしてから独り言のように呟く。

「霊圧に封をしてるならともかく……霊力もですか……」

霊圧の封をするということであればそこまで驚くことではない。

先ほど感じた霊圧は隊長格の平均的なそれに匹敵していたから、その倍ということであれば総隊長の霊圧とさして変わらないことになる。

護廷十三隊に入ったところから伊吹一土という人物がどの程度凄い死神なのかという事は有名なことだったし、当然のように霊圧も高かったことは記憶している。

だが、霊力にも封をしているとなれば話はそんなことでは収まり

きらない。

霊圧は、魂魄が発する霊的な圧力であり、霊力が高いものほど発する霊圧も強くなるために、霊圧で相手の霊力の高さを測ることに使用され、それは魂魄のコンディションによって常に強弱の波がある。

そして霊圧で霊力の高さを測るのは、つまり霊力が高いほど霊体の動きは俊敏になり、霊力の高さと戦闘能力の高さが〃で結ばれることになるからだ。

斬魄刀の能力も持ち主の霊力に比例して強ければ強いほど、強力な斬魄刀であることは周知の事実だ。

だが、その霊力をも封じているのであれば、それはすなわち戦闘能力を文字通り半減させていることになってしまう。

しかも、戦闘に用いることの多い霊圧は、霊力に封をされている状態だから、その制限のかかった状態でしか使えないという事になる。

「一土さん……アナタはやはり怖い人だ」

やはり、この戦いの力ギを握るのは黒崎一護と、そして卯ノ花一土であるという事を浦原は改めて感じる。

前者は藍染の始解を唯一見ていない隊長格だから。

そして、虚化を会得している現在、虚圏での戦闘によってはさらなる成長の余地が見込まれる。

後者は言わずもがな、その霊力の高さ。

斬魄刀の能力は、一定以上の霊圧を持っていれば無効化することもできる。

藍染の霊力は確かに総隊長に次ぐか、或いは並ぶほどに優れているが、それだけならば確実に一土の方が霊力が高いという事になる。

そうなれば、鏡花水月の能力である完全睡眠は効かないから、純粹に地力が出ることになる。



が、浦原が驚愕してそんなことを思う中でも、彼は自分が未だに一土の実力を誤解していることには気付かない。

悲運なことに、技術者という視線で見ているからこそ一土の実力に気付けないのだ。

一土の力を最もよく知るのは、修行で戦った天雫だけだろう。

それでも彼女も、浦原よりも一土の実力を高く見ているとはいえ、まだ尚足りない。

正確に一土の力量を知っているのは、一体だけだ。

最初に一土と戦ったアランカル。

彼は、正確に一土の力量を理解　いや、本能で把握したからこそ目が合った一瞬だけで飛び退いてしまったのだ。

そう、未だその実力は、限定霊印を施されたままであることに本能の内に気付いて。

「おや？　お客さんですかね」

浦原は一旦作業の手を中断してから立ちあがって表の方に向かう。呼び鈴もならず気配を感知したから一応斬魄刀を封印状態にしてある杖を持っていく。

そして彼は、そこで思わぬお客に声を上げた。

「いらっしやいませ。皆サン、お早い御着きで」

「黒腔の準備が整ったと報告したのは兄であろう」

「フン、こんな薄汚い所、本来ならば来たくなどなかったのだがネ」

「……ちっ！　入口が狭え」

浦原商店の入り口の前で、たむろするようにしていたのは護廷十三隊の死神達。

隊長が四人に、副隊長が三人、そして席官が一名。

黒腔の準備が整って、隊長格でも安全に通行できるという事が分かったために、その報告を尸魂界に送ってから、増援として虚圏に送り込まれる面々だ。

そうそうたるメンバーであり、これだけの人数であれば虚圏を制圧することも可能ではないかと思わせるほど。

しかも、そのリーダー格の様な存在であるところの四番隊隊長は既に殺る気 誤字に非ず 満々なだから。

「浦原喜助。一士はこちらに居ると聞きましたが今はどこに？」

「ち、地下の空間ツス、はい。今はそこで身体の調整を」

「調整？ ならば今すぐに私がして差し上げましょう。あのねじ曲がった頭も一緒に調教 ではなくて、調整して差し上げましょう。ええ」

「……調教って」

「何か言いましたか？ 勇音」

「い、いえ！ 何も言っておりません！」

「そうですか。ならば私の刀を。これから少し制裁を ではなくて、説教をしてきますから」

いい笑顔で、四番隊隊長は一足先に地下の空間へと足を踏み入れる。

黒腔を隊長格が一度に通るまではそれなりの準備がまだ必要だから時間はある。

そして誰も、説教に刀が必要なのか、という事についてはツッコミを入れなかった。

十数秒後に、この世のものとは思えないような男の悲鳴が聞こえてきたからだ。

## 第二十四話 援軍（後書き）

まさかの更新を忘れるという事態。

弁明するならば、Rewriteやってたらいつの間にか三時半だった（笑）

という事で今日はもう一話更新

## 第二十五話 痴話

「やばい……死ぬ……」

全長がかなりある死体が一つ、地面に横たわって死体の癖に言葉を吐く。

僅かに口の端から漏れたその言葉は、言葉とも最早分からぬほどに脆弱にこぼれただけ。

言葉ではなく、或いは魂の叫びという奴だったのかもしれない。

身体が筋繊維の一本まで動かぬほどに打ちのめされて、首は可動範囲を超えて一度あり得ない方向に曲がってしまったせいか、変な方向を向いている。

魂魄の魄動を感じられず、言葉とも取れない言葉が口から出てきていなかったら、変死体だと思わざるを得ないほどの状態だ。

そしてその横には、そんな変死体を見ないようにしてお茶を啜っている烈の姿。

抜き身になっている斬魄刀の刀身に付いている赤い液体は、断じてそこで死んでいる一士の血液などではない。

そう、断じて違う。

多分、治療で使った何かだ。

と、四番隊副隊長の虎徹勇音は自分で思いこみをかけることにする。

「あの……出来れば……俺に、回復鬼道を……」

「はい？」

「いえ、何でもありませんでした」

完全低頭姿勢である。

文字通り、頭は地面に付いているのだが。

女は弱しされど母は強し。

そんな格言があつたが、意味は女性は母親になると、子供を守るために強い力を発揮するというものだ。

断じて、母親になつたから物理的な力が強くなつたとか、膂力が増加したとか、霊力が増えて霊圧が増したとかそういうことではない。

母の力は子供を守るために発揮されるのであり、夫を打ちのめすために強くなるのではない。

だが、そんな格言の意味を間違つて捉えてしまうほどにその状況はある。

あまりに惨かつた光景に、浦原商店で預かつている子供二人は、開始五秒にして上の部屋に逃げ込んでしまつたほどだ。

哀れ、今日の出来事が彼らのトラウマにならないように祈るだけである。

「……。よつと」

そして一土は数分ほどそうして俎板の上の鯉の状態であつたから、そして横たわつたままだったのでその異常な回復能力でギャグ補正とも思えるほどの回復力を見せて、仰向けの状態からどうにかうつ伏せになつて、視線を烈の方へ。

散々にストレスを発散してからは年甲斐も無く（削除されました）いじけているので、一土の方から見えるのは彼女の背中だけだ。

死ぬ、とか、このままじゃやばい、とか、もう駄目だ、とかそういう類の言葉を連発して気を引こうとしていたのだが、どうやら自分でどの程度やっても大丈夫かという事は流石に四番隊の隊長として熟知していたらしい。

いつそ霊圧を閉じてしまっただけから、音をたてないようにして見て反応を誘ってみようかとも思ったが、そんなことをして本気の怒りを誘ってしまったら元も子もないのでその案は却下。

そしてどうやらお姫様は自分に対して駆け引きを挑んでいるらしい、と一土は分析する。

いや、お姫様は無いか、と自分でツツコミを入れながら。

俺が声をかけるか、それとも根負けして自分で声をかけるか。

前者であれば、烈の勝ち。

百年もの間ほったらかしにしておいて、色々と迷惑をかけた拳句に連絡一つよこさず、拳句の果てには天雫を経由した手紙で全てを済ませようとする愚行を俺が謝って。

後者であれば、俺の勝ち、という訳ではない。

それはただ単に、そう言う酷いことをした俺が単純にぐうの音も出ないほどのバカだったというだけ。

千年もの付き合いだ、どちらを望んでいるかなど、頭で考えるまでも無く理解できる。

尸魂界史上、最強の鈍感とも呼ばれていたが、自分の好きになつた女のことくらい目の前にすれば全て理解できる。

「謝ったら許してくれるか？」

「……絶対に許しません」

ツンとした態度を崩さないようにしている、らしい。

会ったら絶対に怒ると決めていたのかもしれない。

顔も見たくない、という事を示すかのように未だ視線は合わせてくれない。

ならば、仕置きの最初に合った時は何だったのかという疑問が生じない訳ではないが。

謝るべきことは山ほどある。

勝手に居なくなつたこととか、それで苦勞をかけたこととか、良く分からないけど手紙に書いてあつた若い女の子の事とか。

最後の事について無過失、と断言できる訳ではないが、まあそれはさておき。

一士はこのいじけた烈をどうしたものかと思案する。

そして彼が思考に耽る傍ら、絶対に黒腔の準備が終わつて虚圏に行くまでは一士の事を許さずに怒つたままであることを分からせると此処へ来る前から思つていた烈は自分の頬が知らぬうちに緩んでしまつていたことに気付いて再び眉根を寄せておく。

何だかんだで、別にこの百年のことで連絡をよこさなかつたこととか、ずっと心配かけていたこととか、怒っている訳ではないのだ。藍染の陰謀に巻き込まれる形になつて不可抗力であつたという事は既に知っていることだし、虚化の実験の被害者としてホロウになつたと聞き及んではいたが、浦原喜助と四楓院夜一がその虚化の被害者たちを連れて現世に逃亡したという事は聞き及んでいたから、何時の日か何事も無かつたかのように帰つてくると信じていたのだ。一士が六番隊の隊長になつてから何年かした後、五年間も消息を絶つたあの事件でさえ、行き方の判明していなかつた虚圏に迷い込んで、身体に傷は負つたものの生きて帰ってきたという前例があつたから、それは最早確証と言つても良いほどに。

だから、直に会つた天雫が嬉しそうに健在だつたことと、現世で色々あつたことを楽しそうに語ってくれた時には少し嫉妬もして、安堵もして、色々な感情が混ざり合つていた。

そして実際にこうして会つてみれば、やはり嬉しいという感情が一番上に来て。

今こうして自分のことを分かつてくれていると自分でも理解でき

て。  
怒っている訳じゃないけど、せめて最初の内は怒っているふりを



しようと思っていたのにそれが今こうして簡単に崩れ去ろうとしている。

「それは困ったな。一応反省はしてるんだが……」

全然困ったようには感じられない声が背後から感じられる。

自分が彼の事を分かるのと同じように、彼も自分の気持ちなど手に取るように分かるだろう。

そういう信頼はある。

座ったままで、ギョツと服を掴んで。

気持ちが伝わってしまっても、少しくらいは困らせてやりたいと思う心が無い訳じゃないという事を改めて気付く。

心配していなかったと言っても、それが完全にといい訳ではない。何度が夢に見て、もしも帰ってこなかったらと思わなかった日になかった訳ではない。

強くて、一士が追い続けてくれている自分であろうとはしたけど、所詮は一人の弱い女でしかないのだ。

何度が、枕をぬらした日がない訳ではない。

だから、一士だつて自分と同じように困れば良いんだ。

「猛省でも足りませんし、私は困りません」

「それじゃ、許してくれなくても良いから、これからの事は許してくれ」

え、と聞く間もなく。

そして何をするのか分からずに後ろを振り返つても確認しようと思ったその時に、後頭部から背中にかけて温かさを感じて、一士の手が肩の上から前に回される。

そのまま抱きしめられてしまって、頭は大きな胸板に押し付けら

れる。

頭頂部には手入れのなっていない荒い髭を生やした顎が載せられる。

「……そんなことをしても絶対に許しませんから」

「別に良いぞ。許しても、許さなくても、俺がお前を思う事に変わりはない」

「なっ……そういう不意打ちは反則の筈です」

思わず頬が紅潮して、知らぬ間に自分で彼の腕に手を添えていた。座ったままで、体重を預けるようにして後ろに倒せば、がっしりとした身体が全てを受け止めてくれるようにして支えてくれる。

困らせてやるうかと思っていたのに、逆にこんなふうになされてしまった。

恥ずかしくて視線などとても合わせられそうになくて、目は閉じる。

それでも肌が触れ合っているから、彼が楽しそうに髪を弄っていることは分かってしまう。

一体、この百年間の間にどこでこんな技術を身につけて来たというのか。

「どうだ？ 俺も少しは女心って奴が分かるようになっただろ」

「……知りません」

仕方がない。

もう許すとか困らせるとか、そう言う話じゃない。

駆け引きの様な事は性分として出来ないことは分かっていたし、

無理にやるつもりとしてもこちらが墓穴を掘って彼をいい気にさせてしまっただけだ。

惚れた弱みなのだ。

## 第二十五話 痴話（後書き）

という事で予告通りにもう一話の更新。

ストックは27話までなので、そこまで行ったら暫く更新停止。

七月下旬からテストだから、八月も初頭から中旬まで予定が入っているので一番遅くて八月の下旬から更新再開。

それまでに Rewrite が終われば七月下旬までにこれが完結するかも。

## 第二十六話 虚圏、帰還

虚圏。

そこは現世と尸魂界のはざまにある空間であり、ホロウが普段潜んでいる場所だ。

地面は全て砂に覆われていて、広大な砂漠が広がる。

霊子濃度は現世はおろか、尸魂界よりも高く、じっとしていればそれだけで霊力は回復するかもしれないと期待できるほどだ。

浦原が開いた虚圏への道となる黒腔を通って隊長格の死神他数名が虚圏に来て、真っ先に動いたのは十一番隊の更木剣八。

見た通りの戦闘狂いだろうという一士の判断は間違っていないかつたらしく、聞いた話では霊圧探知は全くの才能がないという話なのに、本能とでも呼ぶのか、戦闘が行われている場所に一直線に駆けて行った。

次いで、六番隊の朽木白哉。

かの四大貴族の現当主であり、銀嶺の孫でもあるらしい彼は、義妹が井上織姫を助けるために既に虚圏に来ているらしく、その義妹の霊圧を探して瞬歩で移動してしまった。

なるほど、消えかかっている霊圧の方に向かって行ったという事は心配なのだろう。

彼については、この戦いが終わった後に天琴について色々聞かなければならないことがあるから、死んでほしくないところだ。

そう、色々。

そして十二番隊の奇妙な顔をした隊長は、アランカルの科学者が戦っているらしい場所に移動して行った。

同じ科学者として、何か思うところがあるのだろう。

或いは、そのアランカルの科学者の研究の粋を横取りしようとい

う腹なのかもしれないが。

そして四番隊隊長、卯ノ花烈は、同じくして消えそうになっている霊圧の下へと移動する。

先ほどまで夜空だったのに壊された壁の中に入ったらいきなり青空が広がったりと良く分からないことになっているが、決して動じたりはしない。

随伴するのは同じく四番隊の副隊長と、そして一士。

一士の方は別に虚圏に来る予定はなかったのだが、しかし現世に居るよりも虚圏の方が自分の魂魄が霊力を回復する速度も速いだろうという考えに立って、虚圏に来た次第だ。

井上織姫という少女を助けに行った彼らは兎も角、そしてその援護として向かっている死神も左右、戦闘に参加するのはそうしなればならなくなってからだろう。

回復が目的で来ているのだから、それは当たり前だ。

そして一士は思っていたよりも早くに、その戦闘は訪れそうだと嘆息を一つ。

「ハア…… どうしてこうなるのか。相変わらず砂ばつかでつまらなところだし」

一士、烈、勇音の三人の前には人間が一人と、アランカルが一体、倒れ伏せている。

相討ちになったのか、それとも今その首を斬り落としてなのか、息の根を止めようとしているアランカルが倒したのかは分からないが、数はそれなりに居る。

何故か一体を除いて皆が同じような霊圧をしていることが気にかかるが。

「……何者だ？」

「護廷十三隊四番隊隊長、卯ノ花烈」

「同じく副隊長、虎徹勇音」

「浦原商店居候、卯ノ花一土」

一人だけ自己の紹介がダサいが、気にしてはいけない。どうせ護廷隊に籍は無いし、かと言って昔の院長を使う訳にはいかない。

そして仮面の軍勢かと言われれば違うような気もするし、かと言って名前だけでは流れに乗れていないような気がしたのだ。

流れは大事である。

流水系最強の斬魄刀を持っている一土だからこそ、それは只管重要に感じる。

……関係ないか。

「私たちは、皆の傷を癒しに来ただけ。貴方がたと争うちもりはありません。私たちの行いに、手出しをされなければ、私たちも、貴方がたに手を出すことはありません」

烈が代表して告げる。

敵地に入り込んでそれは無いとも思ったが、まあ、それが四番隊の隊長としては正解か。

わざわざ敵地に来てまで傷をいやしに来ているのは、別にそれが挑発行為に見えるようにするためではなく、ただ純粹にその能力を発揮するためなのだから。

だが、反対解釈をすれば烈の言葉は、手出しをするのであればこちらも相応の反撃をすと言っていることに等しい。

「どうやら我々の前に現れたのは、聡明な隊長の様だ。……引くぞ」

「えっ、待って」

「勇音、私たちの役目は血を流すことではなく止めること。逃げる者まで追う事はありません。さ、治しますよ。茶度さんも、そちらのアランカルも」

虎徹副隊長が止める間もなく、アランカルの十数名は瞬歩に似た移動方法で消える。

かのアランカルが戦うという選択をしなかったのはこちらに隊長クラスが二人いたことで不利を悟ったからか、それとも別に理由が有って引いた方がいいと判断したのか。

いずれにしても、襲い掛かってこないのであれば、烈がその二人を治している間に敵が襲い掛かってくればそれを対処するのが俺の役目。

とはいえ、それがなければゆっくりと療養、というか自分の体の調整をすることができるのだが。

浦原商店で烈にあらかた自分の肉体の事に関してはボコボコにされた後で治されたのだが、霊力に関してはゆっくりと回復を待つしかない。

いや、回復鬼道で霊圧を戻すこともできるが、やはりきちんと自分の肉体の可動範囲とかも知っておきたいから、徐々に霊圧に身体を慣れさせて色々と試行錯誤を重ねた方がいいと判断したのだ。

そして烈と虎徹副隊長が治療を始める中、一士は一人砂の上に立つて準備運動を。

「隊長、お二人とも安定してきたようです。これなら……」

「勇音、油断は禁物ですよ。もう少し処置が遅れていたら危なかつ



たのですから。それに、此処は虚圏。私たちは敵陣の真つただ中に居るのです。何が起るか、慎重に対応しないと」

「あ、はい」

「ま、そんな心配もいらなと思うけどな。俺もいることだし」

「そうですね。いざとなつたらお願いしますよ、一士」

屈伸から始まって指の先までほぐした後で、少し拳を突き出した  
りして白打の型をこなす。

ゆっくりとした動作から始まって、それは少しずつ速さを増して  
いく。

だんだんと風を斬る音が大きくなって、ついに一回の蹴りで砂が  
舞い上がるようになってから一度、一士は動きを止めて、岩に向か  
つて腰を落として構える。

そして深呼吸の直後、中段に放たれた正拳突きが空を斬って衝撃  
を飛ばし、空圧だけで岩が粉々に崩れ去る。

ひび割れたのでもなく、岩が移動したのでもなく、粉々になって  
しまったことがその正拳突きの威力を物語っているだろう。

「え……そんな」

一体、尸魂界に何人、一士と同じことができる死神が居るである  
うか。

正拳突きによって放たれた空圧が岩を粉碎するなど、今現在の隊  
長格の死神だけではなく、尸魂界の歴史を紐解いたとしても全盛期  
の山本元柳斎総隊長が出来るか出来ないか、と言ったところか。

その光景を目にして、勇音は我が目を疑う。

自分の上司であった天琴から、その父親、つまりは隊長の夫につ

いてはどれほどの人物なのかという事を密かに聞いていたとはいえ、彼女は実際に目にしても信じられないことだった。

常軌を逸するとか、そう言う段階の話ではない。

目の前に居る人物が、本当に浦原商店の地下の空間において情けない姿を見せていた人物と同一なのか疑わしくなってくる。

「……ふむ。全快まで後少しってところか」

そして一士は、岩を砕いてもまだ調整は終わらず、とその口で言う。

再び拳を握っては開き、身体の調整はそこそこに、砂の上に座して剣を大腿に乗せて斬魄刀との対話に入る。

尸魂界の歴史を紐解くまでも無く、今現在にまで続いている斬魄刀との対話の基本的な形。

地面に差して、その前に座って対話を行う者もいるが、しかし昔ながらの方法を取っているのはそれを一士に教えたのが烈だから、という事もあるだろう。

死神の戦闘方法の四つの中で、最も重要であるのは斬魄刀による戦闘方法という事は鬼道衆や隠密機動に所属する者を除いて、護廷十三隊の死神であれば全員に共通することだ。

それゆえに、隊長に就任するための条件の一つに斬魄刀の最高戦術である卍解の習得が原則として必要不可欠であるとされているのは周知の事実。

始解を経て卍解に至ることで、その戦力はおよそ五倍から十倍に跳ね上がるとまで言われているのだから、隊長格或いはそれに比するものは例外を除いて全員がその卍解を習得している。

そして、その卍解に至るまでは斬魄刀との対話、具象化、屈服を経なければならぬのであり、強力な斬魄刀を持つものは往々にしてその屈服の際に多大な苦勞を要する。

いわば、どれだけ屈服させるときに苦勞するか、という事がその斬魄刀の卍解の強大さを物語っていると云っても過言ではない。

靈力が強いものが斬魄刀も強力なものを持つことは自明の理であり、つまり一士や総隊長の様に隊長格とも一線を画する靈力を持つ者の卍解の為には白打や歩法、鬼道だけでの戦闘でも隊長格に匹敵するほどの実力が必要とされる。

そうでなければ卍界など習得できない。

一士が斬魄刀との対話を始めてからしばらくして、勇音は一緒に来て朽木隊長について行ったはずの山田七席が負傷した靈圧を察知して、烈に言われてそちらに赴く。

もつすでに人間の少年一人と、アランカル一体の治療は終わっているから此処に残る必要もなし、その反対に治療要員が負傷したままというのは如何せんどうにかするべき事態だからだ。

この先の戦いの事を思えば、万全の状態で隊長格が複数人、藍染と戦う場に辿り着くことが絶対だ。

藍染の斬魄刀の能力が完全催眠である以上、油断などいくらしても足りないほどであるのだから。

そして彼女が居なくなつたタイミングをあたかも見計らつたかのように一士は対話を終えて立ち上がる。

「烈、少し相手してくれ」

「……まあ、良いでしょう」

治療も終わったから、という事で烈は少し逡巡してから立ちあがつて斬魄刀を抜く。

現世に天琴が居たところに修行と称して何度も剣を合わせたという事は聞いているが、しかし同時に一士が義骸を抜けて魂魄の状態に戻るのには久方ぶりであるという事を知っているからこそ、相手を引

きうつける。

全ての死神の中で今現在最も強いのは誰かなどという空虚な疑問に全く意味はないが、それでも卯ノ花一士という男その人だという答えに揺らぎは生じない。

今回の戦い、決戦に向けて一士の消息が分かっても中央四十六室と同等の権限を有している総隊長がその一士の処理を行わなかったのは、それが無理だと分かっていたからだ。

総隊長も、何百年か前であつたらそれは可能だつたかもしれない。だが、藍染を相手にするよりも、一士を相手に戦う方が護廷十三隊は崩壊する確率が高いと言わざるを得ないことは事実だ。

最も、それは計算上そうなるというだけであり、一士が実際に護廷隊を葬ろうとするかは全く別の話の上だが。

「……………」

「……………」

キン、と何度か甲高い音がなつて刀同士は火花を散らせる。

大きく曲がつた烈の斬魄刀は流麗な線を描いて振われて、相対的に一士の長い斬魄刀は防御が全く考えられていない真っ直ぐな剣閃を描く。

百年前と同じように剣を合わせてみて、分かるのは相変わらず一士の剣の才能が感じられないという事。

ずっと昔から、そんな才能は彼にはなく、だが事実として烈は勝負においては勝ち負けの数が等しくなっている。

それは、技ではなく、全てが力。

いつだつたか、型にはまらないようにという助言をしてからは縮こまった様に刀を振わなくなり、それからは荒々しい剣を極めて行った。

力任せに振われるそれは、刀をずらして力の方向を変えなければ

こちらの刀が折れてしまいそうなほど。

「良いな。やっぱり烈とこうするのが一番楽しい。惜しむらくは全力で出来ないことか」

「この戦いが終わったらいくらでもして差し上げますよ。ただ、私と天隼の二人がかりですが」

「ああ、それも良いな。ただ……今は死亡フラグっぽかったから」

そう言っで一士は、思い切り刀を下から上に切りあげて、烈の斬魄刀を上弾く。

防御されようと、霊圧が少し込められたそれを防ぐなど、油断というよりも警戒を全くしていなかった烈には不可能であり、どうか刀を手放すことはなかったものの、容易に隙を作らされる。

そして、そんな隙を逃すはずも無く、一士はその大きな歩幅で一歩だけ踏み込むと、刀を持っていない方の手で、烈の刀を握る手首を掴む。

そのまま顔を近づけると、無理くり唇を重ねた。

「先に手を打っておくことにした」

「……強引な」

「嫌いじゃないだろ？」

「……」

## 第二十六話 虚圏、帰還（後書き）

感想が出てこなくなったのは原作通りの展開でつまらないだろうか。

最早主人公最強とも言っていていられないほどに一土を強化しすぎてしまったからこの先の展開をあまり変えられないのだが……。

という事で次話とその次がこの小説のクライマックスに成る予定。その先の数話或いは一話は、今の所原作をなぞるだけだと考えている。

で、藍染倒した後は気力次第でオリストに入るか、或いは作者がやりたがっていたリリカルをやるか。

いずれにしても、リライトの方は今週中に終わりそうだから（最早廃人）完結はどうか出来そう。

と、淡い期待を。

第二十七話 死神とホロウ、頂点の二人（前書き）

今回はかなり長め。

当初二つに分ける予定だったものを一つにしてしまったので。

## 第二十七話 死神とホロウ、頂点の二人

男が一人、荒野を歩く。

そう言えば聞こえはいいかもしれないが、実際にはその男は今まで敵地の中にあつて味方の手を借りて身体の調整をしていて、そして剣の使い方まで一通りを終えたところで、漸く出る気になつただけだ。

黒い死覇装は一士の背丈と相まって、所謂人間の物語で言うところの死神を鮮烈に思わせる。

浅黒い肌の人間の少年を烈が治し終わって、そして山田花太郎の所に向かつていた虎徹副隊長も戻って、漸く一士はその場を後にした。

虚夜宮は虚圏の中にある、現在は藍染他、アランカル達の住まう城だ。

とてつもなく大きく、普通に考える城とは一線を画し、一部の天蓋の内側には青空もある。

その外はラス・ノーチエスの意味する通りに全て夜空であり、反逆者と言えど藍染も中々に良いことをするものだとしは感心した。

今よりずっと昔、死神としては初めて虚圏に足を踏み入れて、そして何とか戻ってくることできた一士にしてみれば、大した進歩だ。

前に来た時はこんな青空など無く、城と言っても壁も屋根も全くなかった。

大虚どもが闊歩する空間が広がっているだけで、崩玉を用いて成体のアランカルが生み出されている現状とは違って、より力を得ることになったホロウが突然変異としてアランカルになり、その者たちが権威を振っていた時代だった。

その中であつて、一士という存在は敵でしかなく、虚圏で暮らし



ていた数年間は毎日が命を狙われる日々であり、そして戦いの時間だ。

だからこそ、強く成ることができたともいえる。

元々破格の霊圧を生まれ持って、それが自身の巡りあわせによって烈と出会い、そして死神の道に進んで隊長格に肩を並べることが出来た。

その上で虚圏に迷い込むことになって、そこで戦いの毎日を通じた結果として否応なく力は増大されて、隊長格の中でも一線を画し、強くなった。

それは毎日が命がけの日々であったから、生き残った結果として霊力が増えて霊圧が上がったから、強くなったという訳ではない。

一土という男だったからさらなる次元の高みへと至って強くなることが出来たのだ。

霊力の高いものは、必然的に能力の高い斬魄刀を有することになる。

ならば隊長格と呼ばれる者たちは、皆が最初からそんな莫大な霊力を有しているというのか。

答えは是だ。

だから、卍解とも呼ばれる斬魄刀の第二解放に到ることが出来るのは超絶たる霊圧を持って生まれる貴族が多い。

流魂街の生まれの者が卍解に至るといえるのは、ごく僅かな一握りに限定されてしまう。

そして一土は、流魂街の住人の中では霊圧が際立って高かったが、しかしその霊力は隊長格に匹敵するというほどでもなかった。

その力は修行によって、そして前線に出てホロウを数多く倒して戦闘を経たことで徐々に上がって、早くに三席に上り詰めたのだ。

そしてその霊力は隊長格になってもさらに上昇することになり、結果として常識では考えられないほどの霊圧を手にする事になった。

た。

そんな霊力を持つものが毎日の戦闘を経て、いくら霊子の濃い虚圏に居ると言っても戦闘で霊圧を使い果たすなどして、何も食わずに自らの存在を保つことができるか。

答えは否だ。

霊力を使えば腹が減るのは必然であり、それを補充しなければいけない。

だが、人間界にちよつとした任務で出かける予定だった一士は数年間に及ぶ長期間の食料など当然持っているはずも無く、そして虚圏には食べられるような食材が落ちている訳でもない。

有るのは、ただ砂と、夜空と、枯れた木と、崩れた岩と、そしてホロウ。

その環境の中でどうやって命をつなぐのか。  
簡単なことだ。

ホロウがホロウを喰って成長し、生きながらえるのであれば、正反対の死神とて同じこと。

一士が喰らった食料は、ホロウだった。

「あら、意外と速かったわね。てっきりもう少し時間がかかるものだと思っただけねど」

「……ああ、待たせたな」

一士が烈と別れてから数分ほど歩いて、見渡す限り砂漠しか広がっていない場所にたどり着いてそこに居たのは白い服を纏っている女性。

死神でも、人間でもないことを表すかのようにアランカルとして特有の仮面は長い髪を纏めるカチューシャのようにして付いている。背丈は、一士よりも少し低い程度であり、白い服はワンピースを

思わせる。

純白のそれに包まれている彼女はまるで可憐な少女を思わせるが、しかし同時に手に持っている斬魄刀はそれを否定する。

顔立ちは、清楚。

そして容姿は引き締まった腹に対して出るところが出ていて、見事の一言に尽きる。

野蛮な、と死神に形容されるホロウから進化したのだとはとても思わせないほどだ。

「数百年ぶり、いえ、もう千年にもなるのかしら？」

「そうだな……まだ生きているとは思わなかったが」

「それはこちらの台詞よ。急に消えたからてつきり何処かのホロウに殺られたのかと思いきや、いきなり現れるんだから」

「簡単には死ねなかったからな」

その女性は、藍染が崩玉を手にしてホロウ達からアランカルを生み出す前に、自分の力でアランカルとなった数少ない者の一人だ。

最初にホロウの領域から死神の領域に足を踏み入れた者であり、そして今をして尚、その実力はアランカルの中で頂点に君臨する。

尤も、虚圏の中にあつて藍染に従っている訳では無く、つまり当然のように数字持ちでも、十刃でもない。

藍染もその存在を認知はしていたものの、しかし自分の斬魄刀の能力をして従えることは不可能だと判断した唯一の存在。

その彼女が何故、この虚夜宮の中に住まわっているのかと言えば、偏に藍染の口から一士の存在を聞いて、一士が来るのを只管待ち続けているからだ。

藍染にとって最も厄介と言っても良い一士という存在に対しての

ストッパーを、彼は意図せずに入ることができて、当然のように彼女が望んだ場所を与えて一士が虚圏に来た際の防壁として働くことを目論んだ。

目論むも何も、実力が完全上の存在に対してはお願いという形を経ることしかできなかったのだが。

「……良い顔になったわね。一緒に居た女性はアナタの良い人かしらっ。」

「そんな所だ。いい女だろ？」

「そうね、アナタには勿体ないくらいだわ」

数年来の旧友にあつた時のように話を進めながら、一士は斬魄刀を鞘から引き抜く。

アランカルと、ヴァイザード。

定義としては同じような生物なのかもしれないが、しかしその二つはやはりホロウと死神からそれぞれに許された領域をはみ出したものであり、そしてその段階から相容れない存在だ。

有史より以前、ホロウという存在が生まれ、死神という存在およびその職業が誕生してから、その二つは殺しあう定めだと決まっている。

死神のほうがより人間臭く、ホロウのほうがより獣に近かったために、死神は戦う理由を世界を守るといふ正義に求め、ホロウは自らの欲を満たすといふ本能に求めた。

だから、それはアランカルとヴァイザードという存在になって、死神は本能を戦いに求め、ホロウは理性を戦いに求めた。

どちらも進化であり、どちらも退化だ。

そしてそんなことは関係なしに一士と彼女は互いの斬魄刀を抜く。

「……行くぜ」

一士はそう宣言してから、斬魄刀を両手で握って一撃に近づいて振り下ろす。

片腕ならばともかく、両の腕による一士の臂力で振るわれれば、それは簡単に大地を切り裂くことになる。

が、彼女は何のためらいもなくただ一士の刀に自分の持っていた刀を合わせただけで、ただのアランカルであれば一撃で滅しても可笑しくないような斬撃を受け止めてみせる。

そして、片手で握られていたがゆえに彼女はもう一方の空いている手を一士に向けて、そこに霊圧を収束させる。

刹那、予備動作などなかったかと思われるほどの速度でその掌からは虚閃が放たれる。

赤黒い霊圧の砲撃は、しかし一士にあたる直前、服の綻びを掠めただけで空へと逸れる。

その一撃は青空を作り出していた天蓋に穴を開けて、黒い夜空を覗かせる。

「蒼火墜」

コンマ数秒後、切り結んでいた刀を片手に持ち替えた一士は空いたもう片方の手で鬼道を使う。

詠唱などしている暇もなく、現世に来たアランカルを一撃で跡形もなく消し去ったその鬼道は彼女に直撃する。

頭をつかんでいたわけでもなく、肌にゼロ距離で打ち込まれたわけでもないが、しかし超至近距離からの一撃は確実に当たったと思われるほど。

「目晦ましのつもりかしら？」

キーン！ という甲高い音が鳴って、一士の体は後方に飛ばされる。

彼女が放った貫手をどうにか後ろへと飛びながら、斬魄刀で受けることができたからだ。

もしも地面に足がついたままか、或いは受け止めることができていなかったら今の一撃で終わっていただろう。

アランカルの皮膚は、並の霊圧硬度を持っていない斬魄刀では切ることすらできないのだから。

「無傷かよ……」

「当然。分かっていたことでしょう？ それ、外しなさいな」

煙が晴れて、現れた彼女は貫手を放った態勢のままであった。

刀を片手に、もう片手は貫手の形に。

刀が一本しかないのに、普通の死神にとっては手足を含めて四刀流の相手と戦うことになる。

三十番台の詠唱破棄とはいえ、鬼道が至近距離から直撃して、肌はおろか、服にすら汚れもついていない。

他とは隔絶された霊圧のせいだ。

それを今の短い戦闘で確認した一士は、言われたとおりに自らの霊圧を制限しているリストバンドを外す。

直後、押さえつけられていた霊圧は上に迸って天蓋にぶち当たる。

砂埃も起こり、隊長格の平均値であった霊圧は一気に四倍にまで膨れ上がる。

「良いわ。ゾクゾクする。それでこそアナタよ」

「……本番、行くぜ。失望させてくれるなよ？」

「フフ。どつちが」

「万物悉く水面に沈め 天水」

霊圧は一気に上昇して、刀身は水に覆われる。

碧くて蒼い、その斬魄刀から発せられる霊圧は、およそ一人の死神が発しているなどとは思えぬほどの量と、質。

霊圧だけで空間が歪み、悲鳴を上げる。

まるで大虚が出てくる前の空間の歪みにも似ているが、しかしそれとはまったく規模が違う。

抑えようとされていない霊圧が作り出す水は、砂に吸い込まれて行って、あまりの水量に砂漠は泥に変化する。

「シッ！」

「ッ！」

短い呼気と共に放たれた斬撃は、高圧水流を纏って飛ばされる。

刀身大の形に飛ばされた斬撃を彼女は一瞬だけ腕で止めようとすると、その斬撃が肌に触れた瞬間にソニードと呼ばれるアランカルの歩法技術を使って速度を以て斬撃の威力から逃れる。

最初はペスキスの判断によって鋼皮と呼ばれる途轍もない霊圧硬度を持った肌だけで止められると思っただが、しかし実際に当たってみたら違ったという事なのだろう。

それが証拠に、先ほどの直撃した鬼道で傷一つ付かなかった肌に、一筋の細かい傷が入って、そこから赤い血が滴っている。

それはまたもや地面に水分を与える。

「甘く見んなよ？ あの頃とは違うんだから」

「……そうみたいね。これでやっとワタシも」

ペロリ、と自分の肌が付いた傷をひと舐めすると、斬られた筈のそこは綺麗に傷が治ってしまう。

まるで最初から傷など付いていなかったかのように。  
だが、最後の一滴が地面に落ちる前に彼女は再び構えを取る。

「本気を出せる」

「ッ！ 飛竜撃賊震天雷砲！！」

自分の血を虚閃に使う霊圧に混ぜて放たれた特大の虚閃。

その威力、光線の大きさは先ほどの虚閃など赤子のものであったかと思わせるほどに大きく、音さえも置き去りにする。

そしてそれに即座に反応した一士は、詠唱破棄とはいえ、八十番台の鬼道。

しかしそれを使う前に、一士は自らの斬魄刀の能力によって身体を水で包み、その水球から両手だけを出すようにしてそこから鬼道を放つ。

そして鬼道とグラン・レイ・セロは二人の真ん中で同時にぶつかり、一士の放った鬼道は呑みこまれて消えてなくなる。

水球に身を包んでいたおかげで、少しばかり威力のそがれたそれが一士に直撃して、彼の身体を覆っていた水は全て消し飛んで、それと同時に死覇装も消し飛び、肌は焼けた様に赤黒くなる。

「休んでる暇、無いわよ」

お互いに空間を歪めるほどの威力の砲撃が放たれたせいで、再び視覚で彼女の姿を見失う事になり、煙が晴れる前に彼女は肉薄して一士に剣を振る。



霊圧硬度は互いにそれぞれの種の中で最も高いであろう斬魄刀が、その刀の片方が一士の首に後わずかというところまで迫っていて、一士はそれを視線を動かすことで確認する前に本能に従って僅かに残っていた水を首筋だけに一点集中させて集める。

ゴツ、という鈍い音がして一士は吹き飛んで、そのまま空中で何回転かする。

完全に威力を殺すことができなかったものの、即座に首に水を集めてクツション替わりにしたことと、そして身体の力全てを抜いて力に逆らわなかったことが功を奏し、致命傷だった一撃はどうにか首に痛みを残す鈍痛だけで済む。

百年間の現世での武術巡りで、中国武術の達人とも呼べる老人に消力と呼ばれる技術を見せてもらっていなかったら確実に今の一撃は重傷か、或いは致命傷になっていただろう。

そして一士は吹き飛んだ場所で即座に体勢を立て直して、刀を両腕で握る。

「良い反応ね」

「お陰さまでなッ！」

追撃に迫っていた次の一撃を、今度は冷静に対処して刀で受け止める。

互いに霊圧がぶつかり、それだけで空間は軋みを上げる。

一士の斬魄刀から水が生成されずに、そのままの状態で戦っていれば或いは一撃ごとに砂埃が巻きあがることになっただろう。

彼女の右手に持たれた刀を一士は自分の刀で受け止めて、同じとは言わないまでもアランカル特有の鋼皮によって刀とそう変わらぬ霊圧硬度で迫ってくる手刀と、足刀はその身に瞬間を纏ってどうにか斬られないように受け止める。

刀で切り結ぶたびに甲高い金属音が、そして手と手、足と足が交差するたびに鈍い音が響く。

その全て、攻勢に回った時には相手の急所である肉の柔らかい部分 目や喉などに向けて振われていて、当たれば即死は免れないと思えるほどの攻防が続く。

だが、いくら実力が拮抗していて、長く攻防が行われているとは言っても限界は確かに存在する。

しかしそれは時間の経過とともに肉体の疲労や、霊圧の消耗から導かれるものではなく、彼女の飽きがその終焉を呼び込んだ。

今まで片手で振っていた刀を、瞬時に両手で持って、常に片足だけで地面を移動して、もう一方の足を攻撃に使っていた状態から両足を地面に着けて、最も威力が出るように上から下に刀が振り下ろされる。

「ツアアアアア！」

「駄目よ、そんなのでは」

およそその細い腕と清楚な顔立ちからはどこにそんな力があるのかと思われるほどの臂力で振われた刀は、一士の体格と霊圧を以てしても全力で防御に回って受け止めるといふ選択肢を取らせざるを得ない。

一撃目を受け止めて、しかしそのまま彼女は駄目だと告げてからさらに振りかぶってもう一撃を入れようとする。

最初の一撃で完全に力の差を思い知った一士は、その二撃目が振られるまでの僅かなコンマの秒間で斬魄刀に出来る限りの水を纏わせる。

「解けたわね、その厄介なの」

高濃度に圧縮した鬼道を両肩と背中に纏うそれが解除されたのを見た彼女は、そう言ってから押し込むようにしていた刀から片手を話して、拳手する前の様に指先をそろえて真っ直ぐにピンと伸ばす。そして一土がそれに対応するよりも早く、その左手は一土の心臓めがけて一直線に貫手で放たれる。

「……あら、外れたわ」

「……外したんだよ」

心臓に迫っていたそれは、しかし一土の左手に掴まれて左肩を貫く。

右手だけで斬魄刀を持ったことによつて、彼女の力で押さえつけられた刀は、自分の峰の部分が立てた左の足の腿に当たつて止まる。そして左足を曲げたが故に身体の位置が下がり、心臓を狙っていた彼女の左手はやや上にそれて、しかも完全に貫通する筈だったのに直前に一土が左手で掴んだことによつて第二関節までを身体に刺されるだけにとどまった。

瞬間は、かなりの集中力が必要とする上に、自分の斬魄刀の能力と併用してまで使えるような技術ではない。

それゆえに、一土に残されたのは彼女の圧倒的な力に対して、自分の身を削つて止めることだった。

そして、肉を斬つて骨を断つ戦術が功を奏し、一土は僅かに驚愕で生まれた隙を逃さず、右手を刀から離して、掌底を彼女の鳩尾に叩き込む。

「カハッ！ ……やるわね」

「穴開きにしようとして良く言つぜ……」

瞬間的に瞬間の状態で放たれたその一撃は、大きく後退した彼女にそれでも血を吐かせるほどの威力を誇っていた。

だが、血を吐く程度では全く効いている訳ではない。

同じように、今の一瞬だけで一土は自分の戦法故とはいえ、左肩に穴をあけられて、同じく左足に自分の刀が峰を当てていたにもかかわらず喰い込んだのだから。

緩慢な動作で一土は立ちあがると、同時に自らの肉を裁断した斬魄刀を引き抜いて水で血を洗い流す。

「あ……？ 天挺空羅か」

霊圧の震えを感じ取って、一土は交戦中にもかかわらず藍染が虚圏へと侵入した死神達に伝信する内容を聞き取る。

それによれば、どうやら奪還していたはずの人間の少女をまたもや奪い取られて、そして藍染はいよいよ空虚町に侵攻して、王鍵の創世に取りかかるようだった。

そしてその上で、こちらへ来るために浦原の開いた黒腔が閉じられて、この虚圏に隊長格を閉じ込めたという事を伝信は伝える。

だがまあ、その伝信がいかなる内容であろうともそこまで焦るような内容ではない。

現世には既に総隊長以下護廷十三隊の残りの隊長格が万全の状態で待ち受けている上に、平子たちもいるのだから。

そう思っつて、一土は伝信が終わってから再び戦いに集中しようとする。目の前の気だるそうにしている女性に集中する。

「あら、終わったの？」

「ああ。待たせて済まん。だが、勝負にはそんなに関係ないことだ。味方ではなく敵からだったしな」

「あら、もしかして彼らがとうとう現世に侵攻したのかしら？」

「その通りだ。……嬉しそうだな」

「……そうね。否定はしないわ。これでアナタと全力でやれるのももの」

先ほどは、本気でやると言ったはずだ。

しかし、今の彼女の言葉にもウソはない。

先ほどの言葉の意味は、およそ今出せるだけの力で本気を出すと  
いうほどの禅問答にも似た、或いは人によってはこじ付けとも思え  
るだけの子供の様な理屈。

それは藍染がこの世界からいなくなったことによって、彼女は全  
ての力を解放できると言っていることに等しい。

そして事実、そうであろうと一士は確信していた。

先ほどから彼女の放つ虚閃は全て虚夜宮とは別方向に向かって放  
たれていたし、その被害が無差別にあたりには及ばないようにほとん  
ど刀と身体を使って戦っていたのだから。

「書き換える デステイノ 運命」

そして彼女は、斬魄刀をバランスを取るかのようにして掌の上に  
立てて、解号を言う。

まるで化け物の様な霊圧は彼女を中心に広がって行き、光の渦が  
奔流する。

抗う暇など全く与えずに、一士にしても全くの初見の能力が展開  
されて、当たりが全て白い光に包まれる。

「……どこだ、此処は？」

「此処は私の世界。現世でも、尸魂界でも、虚圏でもない私だけの世界。この世界全てが私の斬魄刀であり、その能力。藍染が居なくなった今、アナタの良い人を心配する必要が無くなって、もう一つの懸念である全力を出すために用意した空間よ」

「……なるほど、お見通しだった訳だ。仕方ない……」  
「正解 大海天水」

刀身を纏う水はさらに霊圧によって圧力をかけられて、それは高速で回転し始める。

それは触れた瞬間に全てを自分と一体化させてしまうほどの、存在感を放つ。

それは一土が言葉を口にすると同時に止み、刀身を覆っていた水は霧散して、刀身だけではなく柄すらも何処かへ消える。  
残っているのは、水になった斬魄刀。

確かに、藍染が虚圏に残っていた時はいつでも烈の所に駆け寄れるように意識の少しをそちらに残して一土は戦っていた。

だが、彼女が言うように藍染が居なくなった今であれば、そんな心配をする必要も無く目の前の戦いに集中することができる。

しかし、懸念はもう一つ。

彼女と一土が持てる全力で戦えば、それこそ虚夜宮だけではなく虚圏そのものが崩壊しかねないという問題があったのだ。

だが、その悩みは彼女によって解消される。

此処が隔絶された世界であるが故に、本気で戦っても問題は全くない。

だから、一土は目を瞑ったままで小さくつぶやくようにして云う。

「限定、解除」

瞬間、抑えられていた霊圧は先ほどの彼女と同じように爆発して広がる。

中心から渦巻くその奔流は、彼女の光とは違ってその全てが霊圧が作り出す水。

その水は、床に水たまりを作って、池になり、湖になり、海になる。

霊圧によって作り出された瓦解の水は、大海となって広がる。

それだけではなく、空が鳴き、雲が広がってさらに天からは水が落ちて彼の武器となるために働く。

故に、大海天水。

まさに圧倒的な力であった。

「素晴らしい……あの時から随分と成長したみたいね」

「お前を殺すために必死になって手に入れた力だ。気に行っただか？」

「ええ。これなら私の生も満たされるわ」

「そりゃ良かった」

手に持った刀を、一土は下から上に振り上げる。

そうすると海から波が持ち上がって、まるで津波のようにして彼女に襲いかからんと猛威を振う。

自然災害の中で、最も人を死に至らしめる原因を占めると言っても過言ではない津波。

それは隔絶された世界の中でも他とは途絶された威力で彼女に迫った。

対して彼女の構えは、手に持っていた光で作られた斬魄刀を前に

構えているだけ。

切っ先を津波に向けて、ただ立ってその猛威に対抗する。

而してそれだけで強大な津波の被害は、彼女の刀を中心にして二つに裂けて、再び大海へと戻る。

だが、彼女はその攻撃によって視覚でとらえていた一士の姿を見失い、迫って来ていた第二撃の高圧水流による斬撃を、身体を擦るようにして避ける。

変則的な動きの直後、視界へと一士を納めると即座に放たれるのは、水の斬撃に対して光の斬撃。

白い空間よりもさらに白い、と思わせるほどの輝きを持った斬撃は、振っていた雨が水の防壁となって一士の前に展開して、彼を守る。

「行雲流水」

一士がそう言うと同時に、雲が分厚くなって雨が激しく降り始める。

空を行く雲から水が流れ、それはまるで一粒一粒が銃弾の様に威力を持ち始める。

大粒の雨水が散弾銃の様に雲から降り注ぎ、攻撃は雨霰と呼ぶにふさわしくなる。

が、彼女は即座にその攻撃を見て冷たいほどの笑みを浮かべて、口の端で小さく呟く。

「……リライト」

瞬間、彼女を中心にして光が爆発後の煙のように広がって、天に届く。

光が外界と内とを隔絶する結界の様に広がると、その結界に当たった雨霰は消えてなくなり、それが天にまで届くと結界に触れた部



分から雲が消えてなくなる。

自分の能力の半分でもある雲が消されたことに驚愕した一士は、その能力を把握して即座に海面に目を向けてみれば、案の定そこには深い青に染まっていたはずの大海が存在しなかった。

「何だその反則的な能力は……」

「言った筈よ。この空間は私の斬魄刀であり、その能力。今のは私に不都合な環境を書き換えたのよ。諦めて直接来なさいな」

「……なるほど」

雲は消え、海も消え。

そして自分は弾き出されずに、手に持っていた斬魄刀も依然として存在している。

つまりこの空間の中に存在している者とそれに連なっている物については書き換えることもできないということか、と一士は納得する。

いや、そうではないのかもしれない。

直接来い、という事は今の現状から考えると、まだ戦えるように剣だけは手元に意図的に残させてやったという事なのかもしれないのだから。

この空間全てが彼女の斬魄刀の能力であるならば、自分に都合の良いように世界を書き換えることなど造作も無い筈。

つまり、もう一度攻撃と防御の手段として海を作り出し、雨を降らしても意味はないという事だ。

「良い攻撃。手が痺れて仕舞いそうよ」

「抜かせ。簡単に止めておきなから良く言う」

再び、剣戟が始まる。

水の刀と、光の刀がぶつかるたびに、一々衝撃波が生じる。

二人ともその衝撃によって服が靡き、髪が揺れる。

だが、戦いに支障など全くきたさない。

そして二撃目から一士は虚化して、仮面をかぶる。

角が一本生えていて、額に黒い線が一本、横に走った仮面だ。

一士が攻撃に転じれば彼女は防御を、彼女が反撃すれば一士が受け止める。

その攻防は互いに持っている刀だけではなく、身体の全てを武器にするがごとく、手足も使われて、剣戟と打撃が混ざった戦いがまるで演じられているかのように展開する。

斬られて、斬り返して、殴られて、殴り返して、蹴られて、蹴り返して、体当たりを、頭突きを、引つ掻き、咬み付き。

およそ洗練された技術はどこにも見当たらない。

ただ、攻撃の一つ一つが致命傷にも成りそうなほどの威力を誇る圧倒的な力だけで支えられて、それが寸前で受け止められて避けられて、掠り傷や重傷に変わる。

お互いに、生まれてこのかた、力で渡り合える者などお互いしかいなかったのだ。

技術を研磨するなど弱者のすること。

ただ、圧倒的な暴力によって相手を撃ち伏せて地面に這い蹲らせる。

それが出来て来たからこそ続けてきて、そしてこの二人の戦いは互いに交わることのなかった種の頂点同士が交わり、優劣を決するためだけの戦いだ。

そしてその戦いは、秒間に数十の攻防が繰り返されるほどに激

しく、その為にどちらもお互いに攻撃を受け切れず、避けきれず、喰らっただけ血が出て行く。

お互いに力量は互角　いや、僅かに一土の方が劣っていた。  
この空間に入る前から既に一土は左足と左肩に傷を負っていて、そこからずっと血を流したままであったのだから。

しかも、今までの数秒とも、数時間とも思えるような密度の濃い戦いによってそこだけではなく、右耳は半分ほど千切れて、指は噛まれて二本ほど欠けて、腕は骨がむき出しになるほど肉が削られて、足の骨はあちこちがいかれてしまっている。

既に意識を保っているのがおかしいほどだ。

対して彼女の方は、随分と服がボロボロに擦り切れて、もうすでに真っ白だったそれが自分と一土の血で赤く染まっているだけではなく、内臓に骨が刺さったり、或いは色々な箇所を斬られているもの、一土の様に全て致命傷という訳ではなく重傷に留まる。

「チツ……このままじゃ死ぬな」

「そうね。お互いに次が最後かしら。けれどその言い方……まるでまだ奥の手が有るみたいね？」

「ああ、有る。……が、使っても次が最後だな」

お互いに離れた場所で相手を見て、次が最後だと確認し合う。

仮面が半分ほど剥がれた表情で一土は笑い、それにこたえるように彼女も笑う。

それに籠っている感情は、これほどまでに楽しい戦いを終わらせたくはないというそれか、或いはいよいよ決着をつけられるという  
歡喜か。

いずれにしても、お互いに次の一撃に全ての力を込めるべく、霊  
圧の全てを刀に込める。

彼女の身体から天に届くほどの白く光る霊圧が昇り、一士の身体からは同じく青い霊圧が昇る。

「……完全虚化」

そして一士の青かった霊圧はさらに濃くなって、藍にも近い青になる。

その霊圧は先ほどよりもさらに高く、そして質はホロウのそれに近くなって濃く、重くなる。

仮面は剥がれていた半分も全てが復活して、角はさらに長く。

肌は白くなって、胸にはホロウと同じく孔が空き、髪が長く変化する。

味方がいる場所では絶対に使えない技だ。

全てを敵と判断して襲い掛かり、自分の意思は僅かにしか残らない。

「……」

「……」

そして二人は同時にかけて、ただの突きに全ての霊圧を込めて放つ。

ズシャッ！ という音が同時に、そしてその数秒後にぼたぼたと血が流れ落ちる音が空しく響く。

それを増長するかのように互いの荒い息が吐かれ、やがて二人ともその口から血を溢す。

「……やる、じゃない」

「……」

パリン、と音が鳴って一士の仮面が全て割れて、髪が元に短く戻り、胸の穴が霊圧によって補充される。

白い肌も、元の肌の色になり、霊圧はもとよりも小さくなる。

そして上半身の死覇装が全て無くなって見えている肌は、彼女の刀が脇腹に刺さっている状態。

対して、彼女の左の胸には同じように一士の刀が刺さっていた。

やがて、持ち主の死が近づいたからか、斬魄刀によって作られていた空間は持ち堪えることができなくなって崩壊を始める。

一士の腹に刺さっていた光の剣も抜けて、倒れかかっている彼女の身体を一士は抱き止めて、せめてもの痛くないように自分の刀を抜く。

まだ、その霊力の裏打ちとなっている生命力によって僅かに息がある中、刀を全て引き抜くともう一度せき込むようにして彼女の口の端から血が流れ落ちる。

「……お見事。私の書いた……運命を打ち破ったわね」

「……満足できたか？」

「ええ。お陰で……楽しかったわ」

自分の意図したままに自分を含めて、他人の運命を書き換えることのできる能力。

それが彼女の斬魄刀に与えられている、神の領域に足を踏み入れた能力だ。

その能力を使って、彼女が為したことは自分が一士に殺される運命にすること。

そして、一士の力が自分を上回らなければ自分と一緒に死ぬ運命

にした。

が、予想を反して一士の力は僅かながらも一瞬だけ彼女の力を凌駕して、見事に定められたそれを打ち破って見せた。

自分より霊圧の高いものには運命を書き換えてしまう能力は効果を発しない。

それが、彼女の斬魄刀唯一にして絶対の欠点だ。

「出来れば……アナタと一緒に……死にたかったわ」

彼女の手が一士の頬に伸びる。

震えるその手では何秒もかけて一士の頬を撫でるようなことはできず、命が消えかかると同時に彼女の手は力なく落ちようとする。そしてそれは、一士が自分の欠けた指の手でどうにか止めたことによつて、頬に触れたままになる。

「済まん。俺には待つてる奴がいるから」

「そう……残念、嫉妬しちゃう……わね。……最後に、一つ……お願い」

力なく微笑んでから、彼女は最後という言葉の口にする。

既に空間は崩れ去り、元いた虚圏に戻って地面は砂に変わる。

それが、死を直面させているという事を否応なく認識させて、一士は続きを促す。

「……して」

「……ああ」

少し逡巡してから、一士は彼女の願いを聞き入れて行動に移した。

口の中に広がるのは、真っ赤な鉄の味。

ただ、それでも愛おしいと思えるのは一士自身にとっても不思議なことだった。

やがて外れていた視線は再び交差して、彼女は満足気に微笑む。

「あり、がとつ……」

そして、一つの命が儂く輝いてから無くなった。

## 第二十七話 死神とホロウ、頂点の二人（後書き）

一つにまとめてしまったから次回はだいぶ先。

という事で名前も出てこなかった破面の彼女の設定を後書きに少し。

名前は未定、今の所付ける予定もなし。

一土が随分昔に虚圏にさ迷いこんだ時に戦った破面。

その時から既に成体の破面であり、ホロウとしては最強。

その当時は一土が圧倒的に敗北するも、初めて自分に傷を付けた死神という事で逃がされた。

ちなみに一土の右肩に丸い傷跡があると第三話あたりに書いた記憶が有るけど、それは彼女に噛まれて食いちぎられた時に出来たという設定。

ホロウだった時から敵が居なかったにも関わらず、霊圧に優れる一土と戦い、その血肉を取りこんでしまったことで誰も傷すら付けることのできない存在　最強の破面に。

それゆえに、一土を見逃して、次に会った時に自分を殺してもらおうと思っていた。

つまり、今回の戦いでは彼女の能力によって一土に殺されたかった訳である。

決してヤンデレではないと思われる。

十刃はそれぞれ死の形を司っているらしいけど、彼女が司っている死の形は、生。

矛盾しているようだけど、自分より強い個体が居ないために死ぬことができないという生の苦しみが、司る死の概念。



生きながらにして死ぬとか、そう言う感じ。

彼女が一士に感じていた愛は、唯一自分の事を殺せるかもしれないという期待に加えて、そこから来る、番いの意識。

ホロウから死神に、死神からホロウに、というそれぞれの境界を取り除いたが故に一士を何処かで自分と同種の存在で、そして唯一自分の隣に立つことのできる男だと思っていた。

そして裏設定としては、彼女の能力は唯一にして絶対のもの、という設定なので、運命を操る能力には一士も抗えない筈。

それなのに彼女だけが死ぬことになったというのは、何処か心の奥底では彼女も一士を殺したくなかったのだろう。

霊圧から言っても、彼女>一士の設定なので。

そしてもう一つの設定としては、彼女という存在が居て、一士にとつては倒すべき目標の一人だった故に、何時までも烈の愛に気付くことができなかつたという。

つまり、一士は自分で気付かずとも烈と彼女の二人を思い続けていた訳なのだ。

という事で以上が考えていた設定。

この先の展開は未だに頭にすら浮かんでいないけど、原作通りに進める前に少し一士の苦悩とやらを書いて見ようかと。

烈に魅かれて、彼女にも惹かれていて。

そして彼女を殺してしまったことによる苦悩を書けたらいいかと思っっていたりする。

烈と彼女の間で揺れる情けない自分。

そう、作者はそう言うストーリーを最初から書くこととしていたので

ある……ウソだけど。

でもそう言う恋愛ものが書きたかったのは事実。

つまり前回のリリカルは烈とすずかの間での修羅場を書きたかったのだよ、君。

主人公は烈一筋でぶれていないように見えて、実は奥底では葛藤してぶれていたという。

まあ、そんな話はさておき。

この先の展開は全く思いつかないのと、今回の戦闘描写に加えて設定を書きこんだらだいぶ満足してしまったwww。

だから次回の更新は何時になるか分かったものではない。

若しかしたら放り出してリリカルしてるかも……。

ではでは、次回の更新が七月中に行われることを祈って。

長い本文に加えて自己満足の設定描写の後書きを此処まで読んでくれた方々に感謝をこめて。

## 第二十八話 戦いは終わり

「カハツ……！」

咽るような呼吸の音に次いで、ドサツと砂の上に身を投げて倒れる音。

激闘を経て、勝利とも呼べないような勝利を手にした一士は自分の二本足で体重を支え続けることができずにとうとう倒れた。

辛うじて息はあるが、しかし危篤にすら近い状態であることに違いない。

無数の切り傷に、どす黒く見える打撲、骨がむき出しになっていて、右の耳は半分ほど食い千切られている。

その上で、最後の一突きによる腹部への刺傷。

生命力に比例する霊力も、既に卍解に加えて虚化の長時間の使用、そして完全虚化を使ったことにより既にそこが見え始めているような状態だ。

「  
」

仰向けになったことにより、どうにか呼吸を阻害されるようなことはなかった。

が、だからと言って助かるという訳ではない。

致命傷には変わりないし、そもそも話として既にこと切れかかっているような状態だ。

指の先を僅かに動かすこともかなわず、一士は手に持っていた斬魄刀を離すとそれは卍解の状態から普通の斬魄刀へと封印状態に移行する。

卍解が本人の意思に反して維持できなくなるという事は、それが重篤であることを示しているのは周知の事実。

そして一士は、自分の死を悟り始めた。

走馬灯、という訳ではないが思い返されるのは初めて虚圏に足を運ぶことになった遠い昔のこと。

任務で現世に行く筈が断界が異常を来した影響によって虚圏に飛ばされることになり、数年間が命がけの修行であった。

もとより虚圏に足を運ぶ前に隊長格にまで上り詰めていたことが幸いして、メノスグランデ程度のホロウであれば難なく倒すことはできた。

しかし、問題はそこから先、遠い昔の話に藍染が有している崩玉の力を使うことなくして自らの力だけでアランカルもどきになったホロウ達や、或いは最上級大虚と言った存在達だ。

休まる時間など無く、ただ只管にそう言った個体と戦う日々。

尸魂界や現世に比べて霊子濃度が高いために、ホロウなどは何も食わずとも生きていけるとはいえ、常時戦闘にある死神が何も食わずに生きていけるなどという事はない。

だから、一士が口にしたのはホロウだった。

自分に向かってきた中級大虚や、最上級大虚を倒して、その血肉を我が糧として取り入れる。

人道的、という言葉が死神にも通用するのであればそれは非人道的であった。

しかし、生きるためには仕方ないこと。

そう割り切った一士はどうか命を繋ぎ、そして一士の前には虚圏の最強のホロウが姿を現した。

腰には刀、服はどこから手に入れたのか優雅なものを纏っていて、仮面は割れ、明らかに死神や人間と同じような風貌を手に入れた女性。

だが、感じる霊圧がホロウのそれであることには間違いがなかつ

た。

そして、その霊圧が尸魂界史上最強とも言われる総隊長よりも強く、それを越えている筈の自分の霊圧よりも高いことは。

拙い、と警鐘が頭に鳴り響いたのも刹那、しかし一土はすぐさまに襲い掛かっていた。

ホロウの血肉を糧とした影響なのか、本能が暴れ狂っていたからだ。

そして彼女の方は、ゆったりとした動作で剣を抜かずに一土と戦った。

その間に広がっている実力の差は、絶望的という言葉ですら表すこともできないほど。

しかし一土は、その霊圧に任せて何とか傷を一つ入れることができ、見逃してもらえることができた。

その時の彼女の顔に浮かんでいたのは喜び。

圧倒的な強者にとって、自分と戦うことのできる個体は大事にしなければならぬ。

種の保存という利己的な遺伝の性質に従うならば一土は殺されるべきだったのかもしれないが、しかし時に圧倒的な強者というのは日々には退屈してしまい、そしてそれを晴らすような娯楽はホロウだった彼女にとって戦いだけだった。

そしてその相手に、一土は選ばれた。

ホロウの中でも誰ひとりとして傷をつけることのできなかった肌に、初めて傷を付けた個体。

ホロウだろうと死神だろうと、そんなことは関係なかったのだらう。

だがそこへたどり付くことが出来たのはまさに神の計らいとでも言うべき偶然の積み重ねであった。

ホロウの血肉を糧とすることを思いつき、その為に一土の魂魄は

純粋な死神のそれから境界線を突破してホロウにまで足を踏み入れるようになり、結果としてホロウが仲間を喰らって強くなるように彼は生き延びてホロウを糧にするだけ、強くなった。

それが千年を超える時を生きる死神が、高々数年で常軌を逸して十倍以上の霊圧を手に入れることになった原因だ。

そして、力ある者がさらに大きな力に惹かれ、戦いを求めるのは自明の理。

ゆえに一土は自分でも気づかぬうちに、彼女の事を追い求めて越えようと欲した。

それは原初の欲求にして、魂魄の階層に刻まれた力を求める本能。いや、ホロウの領域にまで足を踏み込んでしまったが故にそう言ったものが有ったのかもしれない。

それでも、一土はどうか理性を失わずにすることが可能であった。

それは、ただ一つ、頭の中に剣の煌めきを見たから。

長い髪を持った少女が、黒い服に身を包んで剣を振っているその様子。

そう、烈の姿も同様に一土の中にはあった。

それがどういふ感情なのかは、今となっては理解することが出来ようとも当時の一土には全く分からない感情であった。

しかしどういった事情にしても彼女の姿が瞼の裏に浮かんでいたことで、一土は理性というものを失わずにすることができて、そしてホロウの領域から再び死神に戻ることができた。

しかし、死神に戻ってから、瀟霊廷に戻ってから、そして何よりも再び烈に出会ってから、一土の胸中を占めるのは安らぎだけではない。

烈と同様に、誰にも話さなかったもう一人の女性が一土の心を捉えて離さなかったからだ。

「……ッ」

その女性は、今、一土との激闘を経て命を費やし、消えかかろうとしていた。

ホロウは死ねば死神とは異なつて消滅する。

それは死神の斬魄刀で斬られることによって、ホロウになつてからおかした罪がそがれる為だ。

今をして尚、一土の心を掴んでいた女性の内の一人が、彼の目の前で消えかかっている。

それが自分の犯した行為の結果であるとはいえ、一土は自分が涙を流していることに半ば客観的に気付く。

そして自覚するのは、烈に抱いていた淡いそれと同じ感情。

今日こうして出会った瞬間から、おぼろげにも気付いていたその感情を改めて知覚することで、一土は自分の心の内を知る。

「  
」

そしてもう一人、愛してやまない女性が駆け寄ってくるのを視界の端に収めた。

いつも余裕を持ってゆつたりと歩いている姿からは思いもよらないような形相で、必死になつて髪を振り乱しながら走ってくる様は、初めて見る。

多分、自分の名前を叫ぶようにしているのだろう。

謝らなければいけない。

烈にも、彼女にも。

そう一土が思ったその時には、視界は黒く閉ざされて意識も失つていた。

「……あ……いきてる、のか？」

「死なせません！ 絶対にッ！！」

意識は浮上するように覚醒する。

一土に視界に飛び込んできたのはぼつかりと穴の空いた青空。

いや、それは青空ではなく青空に見えるように作られている天井であるから、虚圏の天蓋が一土の視界には最初に飛び込んで、動かない青空と黒い夜空を知覚させた。

そして、苦しいという次元を通り越した痛み。

どうやらその痛みのお陰で、一瞬だけ意識を失ったものの再び取り返すことができたようだ。

上手く言葉が発せないのは、折れた肋骨が肺に刺さっていて呼吸が上手くいかないからだろう。

そして幸運なことに聴覚には一切の障害がなくて、一土は耳に聞いた音を脳内で言葉として処理すると同時に、視界に映った女性の



姿を認知する。

「れ……っ……」

「喋らないで！」

泣いている。

ぼろぼろと涙がこぼれて、乾いた虚圏の地面に水分を与えていた。しかしその砂漠には、既に二人分の血液がしみわたっているから、涙の数滴がこぼれおちたところで大した足しにはならない。

初めて見る訳ではなかったが、それでも烈が泣いていることがどうにも許せなくて、一士は自分の手を持ち上げてその涙を拭おうとする。

「が、手は自分の意思に反して持ちあがるようなことはなかった。当然だ。」

既に身体は限界線などつくりに超えているのだから。

「……ごめん、な」

「喋らないでと言っているでしょう！」

外部霊圧が注がれて、残っているわずかな内部霊圧を充足しようとする。

回復鬼道の基本であり、王道であり、その全て。

霊圧を回復した後はその霊圧を用いて、身体の回復を図るのだが、しかし、いくら霊圧を上げたところで身体が限界を突破してしまえば霊圧の回復など待つまでも無くこと切れてしまう。

こと、それが霊圧の巨大な者に関する時は霊圧の回復などその身体に足りるまでに相当の時間がかかってしまうから時間切れなど珍しくないことだ。

そして、それが分かっているから一土はとりあえず最初にするべきこととして烈に謝る。

絶対に戻ると言っておいて戻れなくて此処にふせっていることと、今までに烈以外のもう一人を思い続けていたことと、そして今こうして命が消えかかってしまったっていること。

その他にも色々と謝らなければならないことが有るような気がするものの、すぐさま思いつくのはその三つだ。

尤も、こうして命が潰えてしまったら他に謝らなければならないことなど思いつくこともできないのだが。

「……だめ、だなあ……」

「駄目じゃ有りません！」

微妙に会話に齟齬。

いや、一土が自身に対してダメ出しをして、そしてそれに対して否定をしたという構図から考えるのであれば齟齬は生じていないのかもしれない。

が、一土が駄目出しをしたのは今の自分の容体ではなく、今まで自分の様態だ。

あこがれ続けて、そしてその感情が恋だと自覚して、夫婦になって家族を持つて。

ずっと一緒に歩んで来た筈だったのにその根底の裏の奥深くにはもう一人の女性の影がちらついていたのだ。

そんなことをうち明かせるはずもなく、情性の様に一緒に居て来たたとさえ思ってしまう。

愛していることは間違いないことだ。

だが、その愛というのは同種のそれをもう一人に向けて良いものなのか。

千年の時を生きていても恋愛初心者の一士には分からないことだった。

ただそれでも、自分の為にこうして泣いてくれる人がいて、そしてその人の涙を見たくないと思っっている自分がいるという事は間違っても居なかったのだと思わされる。

「ごめんなあ……れつ……おれは、おまえに、あまえてた……」

「ッ……甘えても良いんです！ 家族なんだから！」

「ちがう、そうじゃない……おれはおまえだけじゃなくて……あいつのことも……すぎ、だったんだ」

一瞬だけ、烈の動作が止まる。

しかし治療のプロは感情にとらわれることもその一瞬だけで、すぐさま治療を続ける。

烈の視界に映っているのは、同じ結界の中で治療をしている破面の女性。

こちらは心臓の近くに刺し傷が有って、既に足の先から消えかかっている状態が最高の治療士によってどうにか消えるのを防がれている状態だ。

彼女も一士も、二人とも綱渡りをしている状態に等しい。

「さいていだなあ……おれ……ごめんな……れつ」

「そんなことどうだって良いから！ だからもう喋らないで！」

懸命に続けるも、自分の経験に裏打ちされた結果が烈に見え始める。

これほどの重態の治療に当たったのは久方ぶりのことだが、それ

ゆえにどれだけ酷い状態なのかという事も分かる。

霊子濃度の濃い虚圏で、回復鬼道の効果が増している現状でもそれが薄いのは生命力が消えかかっているから。

それでも霊圧を送り続けることをやめることはない。

もう、それしか烈に出来ることはないからだ。

「やっと、わかったのになあ……なにをいちばん、たいせつにしながら、いけないか」

「……っ」

「……ごめんな」

「……絶対……絶対許しません！こんなところで死んだら絶対に一生許しません！！」

「はは……そりゃ、こまった……しねない、な」

「だから！お願いだから！もう私の前から消えないで！！」

もう二度と、会えない寂しさは受け入れられない。

自分の知らないところで消えるのではなく、目の前で死なれてしまったら希望を持ち続けることもできなくなる。

だから、烈は嘆願する。

涙は一士の傷口から彼の身体の中にしみ込むようにして。

「……ごめんな……そろそろげんかい、みたいだ」

「……ッ」

却下ね。待つてる奴がいると言ったのはアナタでしょう？

そして二人の頭の中に響くのはこの場に居ていない筈のもう一人の声。

音声として空気を伝わったのではなく、それは霊圧に乗せられて魂に訴えかけるようにして二人が知覚する。

涙目のままに、烈がその声の主の方に目を向けてみれば、既に下半身が全て消えてしまっている破面の女性が息を吹き返したように笑っていた。

そして、残っている霊圧が一点に集中される。

恐ろしいほどの量と、質。

此処までの霊圧は見たことがないと思わせるほどのそれが、一つの雫に凝縮される。

そして烈が見上げるままに、それは一士の胸の上に移動して浮かぶ。

御褒美よ。私を楽しませてくれたお礼に。ありがとう、一士

そして、それは一士に吸い込まれるようにして消えていく。

それは何だったのか。

霊圧の凝縮されて、可視化出来るほど、そして触れることが出来るほどの雫になったそれは一士に吸い込まれるようにして入っていて、一士は一瞬にして霊圧が全快した。

そしてそれに追隨するように、傷跡も綺麗になくなる。

それはまるで、ホロウの超速再生を見ているようだった。

多分、その雫は霊圧が凝縮されただけではなかったのだ。

霊力に裏打ちされる筈の生命力。

そうとしか呼べないものが凝縮されて、一滴となつて一士は生き

延びた。

奇跡。

まさにその言葉がふさわしい光景を烈は目にする。

そして、急激な霊圧、身体の回復に再び一士は意識を失った。

第二十八話 戦いは終わり (後書き)

なんだか気付いていたら指がキーボードの上を走っていた。  
反省はしていないが後悔はしている。

これでまた一日、無駄な時間を過ごしてしまった……。  
願わくばこんな駄文が作者にとっては無駄でも、読んでくれる  
方々にとって有意義であったように。

## 第二十九話 その男、相変わらず

一土が再び意識を覚醒させた時、そこは未だ乾いた風が吹き抜けている虚圏の中、唯一の青空が広がる虚夜宮の中であった。

身体が急速な回復を迎えて、それに伴って霊圧も回復を初めて、その急激さゆえに魂魄が付いて行くことができずに気を失ってしまったが、一土がその瞬間に気を失ってから再び意識を確固たるものにするまでにかかった時間はさほど長くはなかった。

同じ世界という時間軸の中で事実の経過とともに思考するのであれば、裏切りの死神が一人、東仙が天挺空羅を使ってから一土は戦闘を開始して、ほぼ直後に始まった黒崎一護の戦闘がいよいよ天蓋の上で行われているところだ。

それほどの時間しか経っていないから、一土は目覚めてからまず青い空に黒い空が覗いている光景を目にした直後、視界の端には真っ赤に泣きはらした目で治療を続けている烈の姿を確認する。もう少し時間が経っていれば、自分の泣いている姿など見せようとせずにいたかもしれないが、しかしこの短さではそうもいかないいや、泣かせたのは一土なのだからその涙を見たくないというのはただの傲慢に尽きるのかもしれないが。

「……こういう時は、ただいまと言えば良いのか？」

「知りませんっ」

未だに回復鬼道の結界内で治療を続けている烈に対してそんなことを聞いてみれば、そっぽを向くようにして答えられる。

視線は一瞬だけ交差して、しかし一土の方からではなく、烈の方が視線を合わせようとしなのは当然のことと言えるかもしれない。気恥ずかしい、という思いがあるのだろう。



何しろこの何百年の間に、烈の涙を見ることなどただの一度もなかったような気がするのだから。

そもそも、自分に対してこれほどの感情の吐露が有ったことですから珍しいことだ。

色々と瑣事を働いてしまって、その為に怒り、というベクトルの感情の吐露が有ったことは確かに否めないが、しかしこんな風に真っ向から自分に向けての悲しみが向けられているというのは初めてのことだ、と一士は思う。

多分、一士が烈の事を懂れていたという事を知っていたからこそ、その懂れで居続けようといつも自分の感情を押し殺していたのかもしれない。

例えば、随分と昔に虚圏に来て、何とか再び尸魂界に戻ることになった時、後はこの間浦原商店の地下で再び出会った時にも、こうやって失うかもしれなかった悲しみを吐露、というのはなかった。二度あることは三度ある、という諺の反対の様なものとして、三度目の正直というものもある。

そのどちらも真理を元に導かれている諺であり、故事なのだろうが、今回はどうやら烈の前から姿を消すという事には成らなかったらしい。

「とりあえず、こんな機会はめったにないだろうから話しておく」

今まで、隠し続けていたこと。

いや、意図的に隠していたという訳ではない。

ただ、言いだすことができなかっただけだ。

自分の中でも感情や気持ちというものの整理が全くついていなくて、それでも烈のことが好きだったという自覚は確かにあったようだから相互の気持ちに通じるようになって、しかしその根底にある感情の他にもう一つ、別の者に向けられた感情もあったこと。

その情性に決着をつけて来たところだ。  
浮気、とは少し違うのかも知れない。  
或いは二股、というのかも知れないが。

それに、それだけではない。

ホロウを喰って生き延びたことや、最早死神という存在では無くなってしまっていることなど、知られたくなかった様なものもいくつかある。

それは烈に知られることで彼女が自分から離れて行ってしまおうのではないかという恐れにつながっていることだったし、或いはそれこそ恐れられてしまおうのではないかと考えたからだ。

多分、そういう点で言えば、彼女と同じように自分も一人が怖かったのだらう。

死神とホロウは、自分が生まれるよりも昔から殺し合う運命だと決まっている。

だからこそ、自分はホロウになり果ててしまったのではないかも思っているからこそ、それを告げたくなかったのだ。

「それで？ 私は一士を怒れば良いのですか？」

「……そう来るのか」

全てを告げた後、烈は怒りも悲しみもせずただ一士にそう聞く。恐らくは殴られたり蹴られたりするものだろうと思っただけに、一士はそんな返しに少し驚く。

いっそ、殴ったり蹴ったりしてくれる方がマシだ、というのはありふれている物語の中の主人公の台詞だ。

そしてそれは、今の一士の状態にも当てはまる。

一世一代の告白のつもりだったのだが、そんなふうに流されてしまふ事はあまり予想が付いていなかった。

「そつくるも何も、私にはそうとしか言えません。私は一土を好きで、一土も私を大事に思ってくれている。それだけで十分です」

「……」

視線は烈が動かしたことによって再び交差する。

最初から烈の方へ視線を向けていた一土は当然のようにそんな言葉を、満面の笑みと一緒に言われてしまつてそれを直視することになり、結果として今度は一土の方が視線をそらすことになる。

何故か、烈の方は吹っ切れてしまつたと言わんばかりだ。

あまりに直接的かつ直線的で、そんな言葉を言われてしまつては一土としては赤面するしかなかった。

そもそもそんな風に好いているという感情をぶつけられたのは数えるほどしかなく、その度に一土はそれを思い出してはニヤつくような男だ。

何年経つてもそんなことを言われては恥ずかしくなるお年頃なのである。

「それに」

そして恥ずかしかつて視線をそらしてしまつたから、聞こえるのは烈の声だけ。

表情など見えるはずもない。

そんなものは霊圧で感じ取ることもできないのだから。

だが、それが夫婦の力という奴なのか、一土にはどんな表情をして烈がその言葉を言ったのか分かつてしまつた。

「何を一番大切にしなきゃいけないか分かつた、とも仰せになりましたから」

「ぐはっ……！」

間髪いれずに、一土は吐血した。

身体が治っていなかったからではない。

偏に、自分の言った恥ずかしい言葉を思い出してしまったからである。

そんな奇天烈な 彼にとつての 言葉、思い返してみても人生において一度しか言ったことがない。

婚儀の時に、唯一一度だけ。

とりあえずこの場に、山田清之介元四番隊副隊長か、或いは天霽が居ればそんなことはないと強く断言したのであるが。

「ま、待った……それ言わなかったことにしよう。ほら、俺も生きてるんだし、な？」

「……。何を一番大切にしなきゃ」

「ごめんなさい！俺が悪かったです！」

急いで視線を元に戻して謝れば、随分と烈は満足気であった。

何と言うか、そう、弱みを握られた感覚だ、と一土は思う。

別に自分が恥ずかしがらなければ急所に刺さるような弱みにはならないのだが、如何せんそういう男に出来ていなかったことが悔やまれる。

多分、これから先の人生 死神生？ において烈がその言葉を口にするたびに自分は地面に額をこすり当てることになるのだらうと惨めな様子が予想できる。

だから、自分も対抗手段を、と今までの記憶を振り返ってみたと

ころで、どうやら対抗できるようなものが思い浮かばなかった。

そしてそんなバカなやり取りを二人がしていたところ、爆音が響き渡る。

此処からはそうまでは遠くないところ。

神の怒り、とでも表現すべき程の砲撃が天蓋の上から地上に落ちてきて、それが砂漠に命中して砂埃を撒き散らす。

赤黒い光は、見たことのないものではあるが、しかし霊圧は黒崎一護のものであることが把握できる。

そして、その霊圧が紛うことも無く自分に近しいという事まで。

恐らくは虚化の先、完全虚化までもを使ってしまったのだろう。

自分以外にその領域にたどり着けるような人間がいるとは思ってもよらなかったものだが、しかし彼の境遇という特殊性を考えたらそこまで不思議に思うようなことでもないか。

なにはともあれ、十刃の一人をこれで倒したのだろう。

その証拠に、今まで感じられていた霊圧が一つなくなる。

「また一つ、霊圧が大きくなったな。十刃が解放したか。……そろそろ俺も戦線に参加した方が良いな」

「まだ駄目です。身体も治ったばかりで本調子ではないでしょう？」

「大丈夫だ」

一つ短く呼吸を出してから、一士は身体のばねを使って起き上がる。

先ほどから烈が回復鬼道を使って霊圧を回復させてくれていたおかげで、何とか霊圧も回復の兆しを見せている。

これならば行くまでに移動しながらの回復でそれなりに戦えるまでの霊圧の回復はすることができるだろう。

尤も、それまでに今戦っている者たちが生き残っているかは甚だ不明なものだが。

そして一士は落ちていたリストバンドを拾って腕にはめ直すと、中に溜めていた霊圧を少しずつ自分の体に与えて霊圧を回復させる。常に身に着けていたから、非常時に回復することのできる霊圧を溜めていて、それは常に満タンになっている。

霊圧を喰い続ける道具だが、それだけでは何とも味気のないものになってしまいうから、霊圧を溜めることのできる道具にもなっているのだ。

それを、今は少し解放しただけ。

「とりあえず歩きながら霊圧の回復頼む。現世で戦ってる天隼のことも心配だし、とりあえず残ってる奴らを片づけたら現世に戻ろう」

## 第二十九話 その男、相変わらず（後書き）

少し短かったか。  
まあ、良いか。

とりあえずこの小説を見に来ている人のほとんどの目的が一土と烈の会話だという事がだんだんと分かってきたので、終幕を迎える前にそんな場面を一つ。

この後は二話ほど天雫の視点が始まって現世編をくがあつた、的な展開で早々に終わらせてから一土を登場させて、藍染フルボツコタイムに。

戦闘描写はこの間のアレで力を使い果たしたので、藍染との緊張感にあふれた戦闘はなし。

多分、というかほぼ確実に、一土が藍染と相対して、「なん……だと……」という展開になる。

つまり、頑張れば二三日以内にこの小説も佳境を迎えるという事だ。

とりあえず今まで付き合い合ってくれた方々に感謝を。

後少し、つまらない話が続いて原作の所は終わり。

この先、オリストをやるかどうかは気分次第。

そろそろリリカルしたいなあと思っているので。

ではでは、完結を迎えられることを祈って。

## 第三十話 終幕の開演

場面は虚圏、虚夜宮から遠く離れて現世。

転界結柱によつて重霊地、空虚町がレプリカの町と入れ替えられているその場所では、藍染が王鍵を作るために十刃の第一から第三までを率いて侵攻してきていた。

しかしその場に居たのは護廷十三隊の各隊隊長及び副隊長の面々。そして山本総隊長の斬魄刀解放を皮切りにして、藍染達三人の離反した隊長格が炎の壁に阻まれることになり、戦闘は開始する。

第二十刃が指揮を取つて場所を入れ替えるための柱となっている場所に部下を向かわせて戦闘はその四つから始まり、三つは守つたものの、一つが落とされるといふ結果になり、そしてその場所には七番隊長が向かつて破面の一人を撃退して、何とか空間は全てが回歸してしまふ前に抑えられることになった。

そして、二番隊長が動いたことによつていよいよ十刃との戦いも始まる。

三人の十刃に対してそれぞれ多くの隊長が動くが、しかしその前にほとんどの隊長がその部下である破面との戦いを余儀なくされた。十番隊副隊長が三人の破面と、十番隊隊長が女性の十刃と、二番隊長及び副隊長が破面を指揮していた老人の方に向かい、そして八番隊長と十三番隊長が残つた十刃の一人に向かう。

そこで始まる戦いの最中、卯ノ花天栗のすることと言えば先ほどの四つの柱の戦いにおいて負傷した隊員たちの治療であつた。

そもそも、四番隊の二人が虚圏に向かつてしまつていたので、現世の戦いにおいて治療要員は居ない。

が、そこで天栗の出番になる訳だ。

副隊長ではなく、隊長格の實力を有している上に元四番隊の席官



として、そして四番隊長の娘として高度の治療技術を備えているので、現世においては天雫が四番隊の代わりを果たすことになったのだ。

だがまあ、それも、この戦いが佳境を迎えるまでという限定つきだ。

そもそも治療をしてもそれが追いつかなくなってしまって、藍染が空虚町に着いてしまったらこの戦いは負けなのであり、意味が無くなる。

つまり、隊長達の負傷の度合いが一線を越えてしまう前に天雫も戦いに参加する必要があるのだ。

そしてそれは、彼女が思っていたよりも早くに訪れることになる。

爆発の轟音。

それは三人の破面と戦っていた十番隊副隊長の所から聞こえてくる。

尸魂界に残っていた僅かな副隊長の内の、五番隊の副隊長がどうやら鬼道と自分の斬魄刀を混合させた術式で爆発を起こしたようだ。藍染に陶酔するほどに好意を寄せていたから今回の戦いには邪魔になると思っただけで尸魂界に残っていたはずだが、どうやら戦いに参加することにしたらしい。

が、その爆発にも関わらずに三人の破面は斬魄刀をレスレクシオンしたことで傷は癒えて格段に強くなる。

その爆発に気を取られて状況を見ていたら、その破面三人の左腕が混合して新たに一体の化け物が作られた。

その霊圧はかなり高く、それでいて体躯もあり得ないほどの大きさ。

その化け物が大きく雄叫びをあげたと思った次の瞬間には、十番隊副隊長の脇腹がごっそりと持って行かれた。

肉と肋骨だけではなく、内臓まで全て食い千切られたかのように

無くなる。

「……貴方方で対処なさい。私は斑目三席を治してから向かいます」  
天雫の指示によってその場に居た副隊長達が戦いに加わりに行く。そして三人の副隊長がやられてしまった二人の副隊長を治療にあたってから、しかし速攻でその二人もやられてしまう。

幸いとして、斑目三席の治療はそれ相応の所まで終わっている。故に、天雫は仕方なしと判断してその場を後にして自分が向かった。

直前で総隊長が前に出ようともしていたが、未だに藍染が残っている中で総隊長を前に出すわけにもいかない。

離反した三人の隊長格と戦うためには、総隊長には霊圧を消費せず居てもらわなければならないのだから。

### 「破道の七十三 双蓮蒼火墜」

四角すいを逆にした結界の前に立ち、天雫が鬼道を放った。

両手が前に出されてから蒼い爆炎が化け物を襲って、三步後退させる。

消し炭にするつもりで放った破道が、しかし表面を焦がした程度にしかダメージを与えられなかったことは、七十番台の鬼道を使った天雫は驚愕するところではない。

むしろ、足止め程度にしか鬼道のことは考えていなかったほどだ。この数力月の一土との修行では、天雫が主に鍛えてもらったのは斬・拳・走・鬼の四つの死神の戦闘方法の中でも斬の一つだけ。

もとより鬼道がそこまで得意ではない天雫が、高々数力月の修行で鬼道が飛躍的に上手くなるという事はない。

だがそれでも、やはり詠唱破棄とはいえ今のを喰らって表面が焦げた程度というのは天雫にとってはショックだった。

「父上ならば蒼火墜でも倒すことができたでしょうが……。まあ、私は私の方法で倒すだけです。吹き荒べ 疾風」

斬魄刀を抜いて、解放する。

そして天雫の斬魄刀は風を纏って敵からは視認することができなくなった。

斬魄刀の解放に伴って霊圧は上昇して、ビル風とも思えるような突風があたりを吹き抜ける。

そして鬼道を喰らった敵は何度かドラミングのようにして自分の胸を叩いて、何か迫力を見せつけるかのようにする。

そうしてから、次に行ったのは雄叫び。

それも、先ほどのとは違って完全に天雫の事を敵と認識してその上での叫びであったから、霊圧もまさしく化け物のそれと思えるほどだ。

しかも、それに比例するかのようにして身体はさらに大きくなる。

「余り巨大になられてこのあたりを壊されてはたまったものではありません」

が、そんな天雫の言葉には逡巡する様子すら見せずに、その化け物は肥大化した右手を天雫に向けて押しつぶすかのような動きをして振う。

その速度たるや、身体の大きさに似合わずに腕だけが瞬歩を使ったのではないかと思わせるほど。

ただ、天雫に攻撃を入れるにはただ早いだけのその攻撃では意味をなさなかった。

この間までの父との修行においては、もっと早くて恐ろしい、避けなければ死ぬような攻撃を日夜受け続けていたのだから。

「早くて重い、良い攻撃です。しかし、父上には遠く及ばない」

烈風一刃。

その言葉が咳かれるようにして天雫の口から出た時には、化け物が二度目の手を振ったその身体は、上半身と下半身の二つに分割された。

霊圧によって鋭い風を纏った巨大な斬撃は、化け物の身体を二分割しただけでは飽き足らず、その上で背後のビルの数個さえも横に斬ってしまう。

限定解除の状態で、しかも以前よりも格段に成長した天雫であるからこそ、出来る芸当であった。

「……父上の教えを受けていなかったらこれで終わりにしていたところですよ」

上半身と下半身に分かれて尚、その化け物は未だに動きを見せて再び上半身だけで天雫に襲い掛かった。

肥大化した右腕に対して、再び天雫は短く息を吐いて筋肉を緩めて、その斬撃を繰り出して右腕を肩から切り落とす。

が、上半身と下半身が分かれて尚動けるような化け物相手に右腕を斬り落としたところで致命傷にはならないという事は分かっている。少し距離を取る。

そして、再び天雫の霊圧は上昇する。

「卍解 颯風灰塵」

斬魄刀は卍解になったことで敵の右腕と同じく、巨大になる。

そして天雫の周りを取り巻くようにして霊圧が周り、それは次第に風へと変化して竜巻が彼女を守る。

その上で周りには五本の竜巻が荒々しく回転する。

天雫が一度、その手に握りしめている斬魄刀を振るえば、五本の竜巻は全てがその化け物に遅いかかり、逃げ場を無くして包囲した。そして、鍵をかけるかのようにして刀身を横に倒すと、その竜巻が化け物の身体を無数に切り刻んで行く。

攻撃用の竜巻は、敵を上方に吹き飛ばすことも出来れば、霊圧によつては切り刻むこともできる。

それが、卍解の名前の所以。

灰塵とは、地面が削れてそうなるだけではなく、敵それ自体をも塵にしてしまうのだ。

「凄い……」

「未だですよ、吉良副隊長。結界は強く」

終わつたら松本副隊長の治療を引き継いで当たるために結界に近づいて行って、そして天雫が卍解を使って副隊長数人がかりで倒せなかった化け物を跡形も無く消し去ってしまったことに驚いている様を注意する。

見れば、その化け物を作り出した三人が大声を上げながら天雫に襲いかかろうとしていた。

父の教えがなかったら、油断していたかもしれないと思いながら、天雫は斬魄刀を再び振る。

「隻腕で挑む気概は中々。意気を汲みとって殺しはしないで上げましょう」

斬魄刀の先から、突風が吹きつけてそのまま三人に当たる。

地上と平行に、横向きに吹き付けた竜巻は突っ込んできた三人にとつては避ける術も隙も無く、そのまま全てを巻き込むかのように

してビルに叩きつけられた。

殺しはしない、と言ったもののしかしそれは見当違いも良いところだ。

死神側の様に治療班が居ない破面にとっては、その一撃は十二分に致命傷になり得ていた。

ビルの山に突っ込んで、しかもそのまま地面にたたきつけられたのだ。

全身の骨折はまず免れないし、しかもその骨が内臓器官に刺さっていればいずれ死は免れない。

そして、今度こそその三人が動かなくなったことを確認すると天琴は斬魄刀を再び封印状態に戻して腰に刺す。

「さて、治療です」

後は残っている隊長格が十刃を全て倒してしまえば、離反した隊長三人の相手をするだけ。

総隊長が藍染を倒すとして、そして今戦っていない七番隊長が東仙、ならば残っている市丸はやはり自分が倒すことになるのだろうと、天琴は思う。

今戦っている隊長格が怪我をせずに十刃を倒すことが出来たならば自分の出番はないかもしれないが、そう言うことにはならないだろう。

ならば、今はまだ他の戦いに手を出すべき時間帯ではなかった。

### 第三十話 終幕の開演（後書き）

やっと現世だ……。

あと二三話で終われるか？

あ、あと随分前の感想に「無理くり」が誤字だという指摘があったんだけど、実は誤字ではなくその言い方が存在する。少しググってみたら北海道説と関西説と有るらしいけど、作者は後者だと思っている所存。

### 第三十一話 その男、現世に

それは、突然のことであった。

二番隊長、十番隊長がそれぞれ卍解で十刃の一体ずつを倒したと思つた時に、突如として援軍の様に空間が割れて新たな破面と得体の知れない巨大な化け物が出てきて、その破面がいきなり消えたと思つたら次の瞬間には浮竹隊長を手刀で貫いていて。

そして即座に反応した京楽隊長が反撃に出たところを十刃の一人に撃ち抜かれて、総隊長が二人の名前を呼ぶも虚しく、二人は地面へと落下してしまった。

その破面が大声を上げたと思つたら、二番隊長にやられた筈の十刃が息を吹き返して、そしてそれは十番隊長にやられた筈の女性の十刃も氷の華の中から生還した。

残っている無傷の隊長格は、総隊長に七番隊長、そして副官章は付けているものの隊長格である天琴だけであり、最早終わりかと思われたその時になって、一土と全く同じ時期に姿を消したヴァイザードの面々が姿を現した。

そこから再び戦闘は開始して、百年前の隊長格たちが参戦しての総力戦は、数十分にも及ぶ戦闘であり、重傷の浮竹隊長の治療に当たっていた天琴は気が付けばほとんどの隊長格が疲弊しているという事実に向面した。

とはいえ、敵も数を減らしたのは確かだ。

ヴァイザードの一人が片腕を失うという重傷になって漸く十刃を一人倒すことに成功して、その上で次は銃を使う十刃も京楽隊長が勝負に横やりを入れたことによって倒すことができ、そして痺れを切らした藍染によって最後の十刃であった女性も藍染の手によって斬られて死んだ。

漸く、折り返し地点。



残っているのは離反した隊長格三人だけだ。

とはいえ、味方が疲弊している現状としては全く油断などできない状況である。

相変わらず、万全の状態であるのは総隊長と天栗の二人だけ。

いや、霊圧の消費という事で言えば天栗にしても、かなりの数の死神の回復をさせて、そして正解を使ったからそれなりに霊圧は消費している。

身体に傷は負っていないものの、自分が回復要員である以上は誰かに霊圧を回復させてもらうという事は叶わない。

それでいて尚、負傷している面々だけでは完全催眠などというふざけた能力を持っている藍染に対抗できる筈はないから、隊長格を中心に天栗は回復を続けなければならない。

父との修行によって霊圧の上昇が見込めたとはいえ、しかしそれでも消費し続けるというのは中々気持ちのいいものではない。

何より、父が尸魂界から追放されることになった原因が視界に入っていて、自分は回復の為に戦う事が現状出来ないのだから。

回復結界の護衛をしていた七番隊長は因縁のある東仙との戦いに行ってしまった、そして離反した隊長格三人との戦いも満を持して漸く始まった。

狛村隊長と檜佐木副隊長が東仙を相手に、そして他の者たちはヴアイザードを中心として藍染との戦闘に取りかかった。

そんな中でも唯一動かないのは総隊長ただ一人。  
しかし霊圧の感覚からして、どうやら何かを仕込んでいることは間違いない。

最強の斬魄刀と恐れられる最古の斬魄刀を持っている総隊長のことだ。

恐らくは藍染の思いもよらないような技を持っているだろうし、そしてその為の準備に取り掛かっていると考えた方が良さだろう。

そうでなければ、総隊長の愛弟子である京楽隊長と浮竹隊長がやられた時に何かしらのアクションを起こしている筈だ。

そして、藍染にしても総隊長の能力を放っておくわけにはいかない筈だから、何かしらの対策は練っている筈。

それは多分、父上の天水の能力に対しても同じこと。

いや、或いは高々隊長格と侮って父上の斬魄刀に対しては何らの対策も取っていないのかもしれない。

そもそも、父上の霊圧が隊長格などという段階に分けて考えること自体がばかばかしいという事を知っているのは、現状では私の他には母上一人、というところだろう。

百年前の事件の時には霊印も外していなかったし、リストバンドも外さなかったという。

封印されたその状態で隊長格と同じ霊圧であるという事を藍染は知らない筈だから、何らの対処もしていない筈だ。

仮に対処をしていたとしても、最早父上の力に対抗できる訳もない。

何倍もの霊圧の差は、赤子と大人どころか、象と蟻ほどの力の差を生むことになるのだから。

「吉良副隊長、此処はお任せしますよ」

故に、万が一の可能性を潰すために治療を任せて天霽は戦場の中心へと足を運んだ。

最も重症であった松本副隊長と、その次に酷かった浮竹隊長の治療は応急処置を終えたから後は回復結界の中に居るだけでどうにか生き延びることもできるだろう。

しかし父上がいつ戻ってくるか分からない現状、何時までも使える戦力を放っておくのは愚策でしかない。

常に最悪の状態を考えてそれに対処できるように戦わなければな

らないというのも教えの一つだ。

そしてこの場合における最悪の状態というのは、最高戦力である総隊長が不意打ちを食らうなどして負傷して、その他の隊長達も瀕死に追い込まれてしまう事。

そうなれば最早藍染達を止める手立てが無くなってしまう。

「どうも、藍染元五番隊長」

「とうとう戦いに本格的に参加する気になったか、卯ノ花副隊長」

「その可笑しな髪形をした御方、私がやらせていただきます。巻き込まない自身は無いので下がっていてください」

戦況から判断して、天雫がやるべきことは藍染の相手だった。

誰もかれもが負傷している中で、まともに藍染の相手が出るような隊長格と言えば最早自分しか残っていないからだ。

その上で、総隊長が仕込みを続けているという事はその時間稼ぎも行った方が良かったろう。

さらに欲を言えば、父上がこの戦場に来るまでの間にどうにか持ち堪えることさえできれば勝ちも同然。

だから、天雫は父に言われて付けていた同じリストバンドを外して霊圧を上昇させる。

その上昇値は大きく、今まで副隊長クラスだった霊圧が跳ね上がるようにして総隊長のそれと同じほどにまで。

「ほう……その物体に何の仕掛けが施して有ったのかは知らないが、大層な霊圧だ。この私にすら匹敵している」

「種も仕掛けも有りません。強いて言えば、十一番隊長と同じで霊圧を消費し続けるというだけです。この数力月に及ぶ父上との修行

で霊圧を上げて頂きました」

「……なるほど」

「理解できていますか？ 今の私が修行を付けてもらっていた相手は父上であり、それは当然として私よりも父上が格段に強いという事を意味しているのだと。父上がこの戦場に來た瞬間、貴方に勝ちの目は出ません」

「面白いことを言うな。卯ノ花副隊長。その父君は未だ虚圏にて十刃全てを束ねても勝つことのできない相手と戦っているというのに。勝ちの目が出ない？ 滑稽な話だ。そもそも、彼がこの戦場に来ることなく虚圏で死ぬ定めだというのに」

「妄言も過ぎれば願望。そう願ってはいればいいでしょう。貴方は父上の力をはき違えている。私と戦って少しでも父上の力の末端を知れると良いでしょう。……吹き荒べ 疾風」

会話はそこまで、とばかりに卍解になった斬魄刀を手に、天霽はまずもって遠距離から様子を見る。

藍染の能力が完全催眠である以上、近づかないで対処をするというのが一番の効果的な作戦、というのは平凡な考え方であり、そして正解なのだろう。

だがしかし、天霽の斬魄刀にとって真に遠距離を得意とするのは卍解であるが、それは使えない。

様子見のようにして隙を窺っている者たちにとっては天霽の卍解は邪魔でしかない。

そもそも、先ほどの化け物と戦った時の様に範囲を限定して戦わなければ、卍解を使ってしまったところで転界結柱ごと、レプリカの空虚町を破壊してしかねない。

卍解というものはそれほどの破壊力を持っているのだから。

しかも、今は先ほどと違って霊圧も三倍ほど。

藍染一人を仕留めるのであれば始解で行った方が得策というものだ。

そしてその斬魄刀から放たれた斬撃は、受け止めた藍染を一メートルほど後退させる。

その直後、再び放った斬撃は今度は受け止められずに飛び上がることで回避される。

どうやら受け止めて回避して、という行動を行っているところを見ると今のところは完全催眠の能力を使っていないようだ。しかし隊長格であるという事は卍解を会得しているということであり、何時の間に能力を使うかという事はこちらには分からない。

そもそも、一度見たら後は術者の意のままに相手の五感を支配することができるという能力が出来過ぎているのだ。

斬魄刀の能力は個々人の霊圧に比例するというが、まさしくそれを体現している。

目で解放の瞬間を見たその時から完全催眠にかかる、ということだったから目を瞑っていれば催眠にはかからないかと思っただがそれもどうやら違ったようだ。

何度か斬撃を飛ばして、そして自分で近づいて斬りつけて、それを繰り返し行う。

何処かに完全催眠の抜け穴がないかを探すのがこの戦いの目的だ。それさえ見つけることが出来れば、後はもしも父上が間に合わなかったとしてもどうにか他の隊長格で抑えることができるかもしれない。

とはいえ、そんなふうに簡単に抜け穴を見つけることができるのであれば苦労はしない。

それに藍染も、そんなことには気づかれないように戦っているだ

ろっ。

斬魄刀の解放の瞬間を相手に見せつけるという事が完全催眠に欠ける方法という事は、つまり抜け穴として設定されているのは、解放させる前に何かアクションを起こすということ。

それは何か。

精神支配系の斬魄刀の能力として他に知っている斬魄刀は、唯一東仙の卍解だけだ。

アレは確か、話によるところでは十一番隊の隊長が自らの体一つで破った筈だ。

卍解の中にとらわれた相手の五感を全て失わせるという斬魄刀に對して、十一番隊の隊長が取ったのは何であったか。

いや、その前に離反しているという事は百年前のあの時にも父上と戦っていた筈だ。

そう、その話は確か聞いていた筈だ。

三人のうちの一入、東仙の斬魄刀の能力内にとらわれて、しかしどうにか退けることができたが注意しろ、と。

視界だけではなく五感の全てを失われた状態で、確か父上は力技でそこから出出したのではなく

「考え事か？ 随分と無神経で悠長なことだ」

そう、斬られたその一瞬だけ感覚が元に戻って、首を狙われたその一瞬で反応して身体を捻りながら沈めることでその凶刃から逃れて白打で倒すことができたのだと。

アレも精神支配系の斬魄刀に分類されるのであれば、つまり対処の方法も同じはず。

そうだ、考えてみれば父上が言っていたではないか。

藍染の能力から逃れることのできる方法として、彼の斬魄刀に触れることで完全催眠から解かれることができるかもしれないと。

そう思った瞬間に、思わず頬が緩んで笑みかんでしまう。それを確かめることこそが、今できる最良の一手。

「申し訳ありません。貴方の完全催眠から逃れる方法が分かってしまったので」

「……ほう。妄言も過ぎれば願望。それは君の言葉ではなっただか？」

「そうですね。ならばそれが真実であるか、証明してみせるとしましょっ」

そうと決まれば遠距離の攻撃など大した一手には成らない。近づいて、斬るだけ。

それも、自分の得意としている剣道の方法ではなく、父上のそれと同じように片手で剣を持って、もう片方の手を自由に動かせるようにする方法で。

今の段階で、既に藍染が完全催眠の能力を使っているかという事はさほどの重要なことではない。

要するに、斬魄刀に触れようとする行為が彼に目に映った時に、どういふ反応を取るかでそれが正解かどうかという事が分かる。

右手に持った刀で切り結び、左手を伸ばして敵の刀に触れようとして。

或いは両手で持って力任せに霊圧を斬撃に込めて押しつけるようにしたところで片手を離して刀に触れようと手を伸ばして。

そうして十数合ほど、切り結んだところで藍染は嘆息した。

「成程、どうやら君は本当にそれを確信しているようだ。ならば生かしておくわけにはいくまい」

刹那、そんな言葉の直後に、藍染を斬ろうとして、あまりに無防備なままに自分の刃が彼に吸い込まれるようにして入ったと思った時には、既に遅かった。

完全催眠にかかってしまったという事が分かり、そしてそれが解かれたのは刀が背後から一閃されて肉に食い込んだところ。

走馬灯のように色々な人物の顔が浮かぶ。

それが、死に直面しているという事なのだろう。

母上の顔、父上の顔、白哉の顔、緋真の顔、様々な人の顔が浮かぶ中で、それらに対して一人ずつ心の中で詫びて。

「残念だが、君はこれで終わりだ。力と賢さを兼ね備えるというのも考えものだな」

そして致命傷に止めを刺すかのようにして振われた藍染の刀を見て。

走馬灯の最中にそれに対して対抗することもできず、それが自分の中に吸い込まれるようにしているのを見て、同時に視界の端に空間が割れたのを見る。

そこから出て来たのは、何時ぞやの旅禍の少年。

虚圏に行っていたという話だったが、帰ってきたのか。

そして、それを認識した直後に同じ場所から出て来たのは父上と母上。

「大丈夫か？ 天琴」

時間の凝縮されたその感覚の中でさえ、父上の速度を目で追う事が出来なかった。

気が付けば背中を斬られた状態で、二度目は命を断つことなく、その前に父上に抱きかかえられて戦場から少し離れた場所に連れて行かれた。



久々、というほどでもない時間の経過しかなかったが、それでも体感時間としては久々に見た父上の顔は、何処か吹っ切れたような表情。

虚圏で何が有ったのかは知らないが、あちらにある心残りを果たしてきたのだろう。

それに母上の方は、久々にオロオロとするところを見たような気がする。

此処へ来る前に父上と何かあったのか、決して泣かなかった母上の目が真っ赤になっていて、しかも今は私が致命傷を受けたせいかわろわろと涙を流し始めている。

強気な方だと思っていたが、私が斬られたことに涙を流してくれているのか。

「烈。しっかりしろ。取り乱してないで天雫の治療手伝え」

コツン、父上が母上の事を小突いて、正気に戻らせる。

こんな場面でも父上は取り乱さなくて流石だと思っただが、それでもやはり違ったのだと即座に気付かされる。

斬魄刀を持つている手はカタカタと震えているし、私を抱いている左手も震えている。

そんな状態でも、母上が取り乱しそうになったからこそ冷静になることができたのだろう。

やはり、愛されていたのだと思えると安心して眠りに落ちそうになっってしまう。

「……大丈夫そうだな。烈、後は任せた。俺は少し」

そして、その眠りを妨げたのは父上から発せられている霊圧。

リストバンドをしている上に、向こうで自分の開発したという限定霊印を身体に刻印してきたのか、その霊圧は隊長格の平均的なも

のだ。

今の自分よりも低い。

それでも、抑えきれなくなっている霊圧は迸って水になる。

父上が、怒るのを初めて見たような気がする。

今までその巨軀に似合って若い子供や女性からは恐ろしい人だと思われていたこともあったが、しかし一度たりとも怒りを見せるようなことはなかったから優しい人だという事はすぐに周知の事実になった。

それゆえに、父上が死んでからというものの、若い女の人は申し訳程度に作った墓に来たことが何度もあったから、母上がその度に苦笑いをしていたのは見かけたことがある。

それほど、父上は魅力的であり、人に好かれる方なのだ。

だから、父上が感情をあらわにして怒りを見せるようなところは初めて見ることだ。

恐らく、それは母上も同じなのだろう。

あまりの激昂に治療の手は休めないでも、視線は父上の方を向いている。

「あの糞野郎に仕置きしてくる」

## 第三十二話 卯ノ花一士

卯ノ花一士。

その男は死神とホロウという二種の戦いの中で最も激しく、上の次元においての戦いを経て、辛くもこれに生き延びて虚圏から現世へと足を運んだ。

年のころは二十前後、肩まであるボサボサの髪はいつもなら何の手入れもされていずに寝癖が際立ってはねている筈であるが、その全てがまるで重力に逆らうかのように怒髪天を衝いている。

それを成しているのは、あり得ないほどの霊圧によって溢れたそれが生み出す水が髪の毛を固める役割を果たし、そしてその水は重力に逆らって上へと昇っているため。

がっしりとした筋肉に覆われた身体からは今までの戦いで付いた無数の傷跡が見てとれて、まるでそれは圧倒的な強者であることに寸分の懸念をも抱かせない。

纏う服は、死神の一般的な死覇装。

ただし、ボロボロに破けてしまっているのは先ほどの戦闘の影響だ。

回復鬼道では服までは治すことができない。

故に、戦った後のボロボロの死覇装のままその男は現世のとあるビルの上に立って戦場を見据える。

そんなボロボロの服に相反するように、手首に付けているリストバンドには傷は全く付いていない。

それは先の激しい戦いに入る前に、外したために戦火に巻き込まれなかったからだ。

そして今、戦場は先ほどまでの戦いに比べて著しく停滞していた。

黒崎一護が黒腔から出た瞬間に藍染の背後だったことを幸いに首の後ろに斬撃を叩き込んで、しかしそれは藍染の予めの対策によっ

てその身を刻むことはなく、そしてその直前にあつた天雫と藍染の戦いに手を出していなかった隊長達は、その戦場に居る全ての者が知っているといないと関わらず、一士に視線を向けていた。

いや唯一、黒崎一護と藍染だけが未だに会話を続けていた。それもその筈だ。

黒崎一護は一緒にこちらに来たとはいえ、一士の事について詳しく聞いておらず、情報としては天雫の父であり、烈の夫であるということしか知らない。

そして彼が唯一藍染の始解を見ていないから、油断なく藍染を見ていなければならぬのだ。

対して藍染の方は、一士など霊圧から考えても警戒に値するほどではないと考える。

所詮は過去の隊長格であり、娘よりも霊圧の低い男だ。

不幸なことに、その思考に至る中で藍染は自分でも勝つことが出来ないと考えていた破面の彼女の事を思考の枠から外してしまっていたゆえに、一士がこの場に居るといふ事の重要性に気付けなかった。

「 貴公に藍染の始解を見せはせん」

「 俺達がテメエを守って戦ってやる」

いち早く狛村が藍染の挑発に吞まれそうになっていた黒崎一護にそう言つて、そして一士の登場にあっけに取られていた面々が黒崎一護の前に立ちはだかつて藍染から守りながら戦うために剣を構える。

一士という男は、その場に居る死神とヴァイザードの多くにとつては真央霊術院の院長だ。

その実力についてある一定以上だと知っているのは、その面々の中でも恐らく三人だけ。

過去に上司であった山本総隊長、そして実際にホロウを相手に戦うところを見たことのある京楽、浮竹両隊長だ。

その他の者については知らないという者もいる。

が、彼らの中における最優先事項は藍染であり、一士の事についてとやかく考えているような時間は存在しない。

「俺を守って、戦う!? 何言ってるんだよ! 無茶だ! 皆ボロボロじゃねえか!」

「何が無茶やねん。お前一人で戦わすほうがよっぽど無茶やる。一人でやられたら、腹の虫収まらへん奴がぎょーさんおんねん。一人で背負うな厚かましい。これは俺ら全員の戦いや」

「全員、黙れ」

そして、一士が双方の間に瞬歩で移動して、まず最初に斬り込もうとしていた十番隊長を制した。

その言葉に込められていたのは明らかに怒気。

自分でも怒っていた烈が我に返ってしまうほどの、怒気だ。

そしてその烈でさえも、一士が此処まで怒るといっことは見たことがなかったことだ。

今までに烈との生活の中で喧嘩らしからぬ喧嘩をしてきたことはあっても、そこにはイラつきが含まれていても本気の怒気というものはない。

故に、一士がキレるといっものは誰もが初めて目にする事だった。

「これはこれは、久しぶりの」

「黙れと言った、藍染」

ドギツイ目で睨まれて、流石に藍染も閉口する。

それは一士の気に呑まれたからなのか、或いは藍染が一士の言葉の淵から感情を読み取ってさらに挑発を欠けることで冷静さを失わせようとしたのか。

そんなことは、しかしどうでもいいことだった。

「有昭田鉢玄、転界結柱にさらに全力で結界をかけ直せ。今の俺には壊さないで戦う自信がない」

「……ハイです」

有昭田鉢玄は一士の言った通りに従って、仮面を被ってから今の彼に出来る全力で内側に結界を張り巡らす。

それは精緻に、しかし驚嘆に値するほどに強く張られる。

十刃との戦いの前、両手が健在していた時であればさらに早く張ることが出来たであろうが、しかし片手にしてもそれは十分すぎるほどだ。

「……足りないがまあ良い。全員、烈の所にまで下がれ。巻き込んで殺さない自信はないぞ」

「下がれって言われて……も……」

リストバンドを外しながらそう言った一士に、その中では最も縁のあるだろう京楽が代表して言う。

が、全てを言いきる前に一士のリストバンドは外されて、霊圧が迸る。

隊長格のそれであった霊圧は、外されたことによって四倍に。

それは既に、総隊長をも藍染をも超えてしまうほどだった。

故に、京楽は肌で感じるそれが信じられずに閉口する。

「万物悉く水面に沈め」

「ッ！ 全員下がれえええ！」

「天水」

空は陰り、分厚い雲が天を覆う。

斬魄刀が解放される直前、どうにか京楽の機転によって隊長達が即座に言われたとおり、烈の所まで下がったおかげで誰も被害を受けられることはなかった。

雨が降り、天水は水に覆われて、そして空虚町に唯一流れていた川が持ちあがって大挙して一土の後ろに集まる。

そこは先ほどまで京楽達の居た場所であり、一瞬でも遅ければ全てその波に呑みこまれてしまっていただろうと思える水量。

そしてそれは水の壁となって藍染と一土、そしてその他の者がいる場所を阻む。

「なるほど、大層なものだ。流水系最強の斬魄刀の名は伊達ではないということか。しかし君は仲間と自分とを隔絶してそれで勝てる気にいるのか？ 卯ノ花一土」

「勝てる？ お前は何を勘違いしている。これからするのは勝負でも戦いでもない。ただの仕置きだ」

「仕置きとは状況を表せていないな。仕置きとは圧倒的な強者が弱者に対して処置を施すことだ。君と私との力の差は霊圧程度では埋め尽くせるものではない」

「何でもいい。天雲を殺そうとした、それでお前は俺に殺される。」

有るのはただそれだけだ」

「娘が斬られて激怒か。ならば何故その娘を戦場になど送り出した？ 君は矛盾したことを言っているぞ。卯ノ花一土」

「 黙れ。問答は終わりだ」

ヒュン、という音が藍染の耳に届いたのは、一土が斬魄刀をいつの間にか地面と平行にしていたのを藍染が認識した瞬間だった。

その時には既に藍染の服には切れ目が入っていて、僅かに服がぬれている。

それは明らかに藍染の知覚を越えた速度で剣が振られて、そして気付きもしない内に服が斬られたという事を意味していた。

目で得る情報は、光によるもの。

そして耳で得る情報は、音によるもの。

どちらが早いのかという事を考えれば、それはさほど不自然なことではない。

一土の刀を振る速度が速すぎて、目で追う事が出来ずに音によって漸く刀が振られたという事が理解できたというただそれだけだ。

「総隊長はどうやら炎熱地獄を仕込んでいたようだが、それでは足りない。お前にはさらなる苦痛を味わってもらおう。まずは……指」

「ツアアアアアア！」

指、という言葉が言い終わると同時に、藍染は悲鳴を上げる。

彼の左の親指が切り落とされていた。

その先からは血が流れ落ちる。

それはまるで、小さな血の滝の様な光景だった。

そして、その血は斬られて落ちた指が水によって作られたことに



よって止まる。

「ああ、指の前に天雲と同じ部分を斬らないといけなかったな」

「なっ!？」

藍染は、そして鏡花水月を躊躇いも無く発動させる。

一土には靈術院の時代に一度解放を見せているから、完全催眠にかからぬ道理はない。

故に、藍染めは自分だと誤認させた虚像を一土に斬らせて、油断したところを背後から斬ろうともくろんだが、しかし一土は迷うことなく藍染が瞬歩で移動したその場所まで来て、藍染の背中に刀を振った。

完全催眠に有る筈の者が迷わずに自分に剣を向ける、その状態に藍染は当然のように驚愕する。

「何を驚いている。お前の靈圧が低すぎるせいだ。斬魄刀の能力が俺に効いてないだけだ」

「私の靈圧が低すぎるだ!?! 可笑しなことを言うな! 貴様の靈圧は確かに今の私よりも高いがそれだけでは鏡花水月の能力を阻害出来ない! 何をした!?!」

「……なるほど、どうやら自分の理解の追いつかぬ現象は有って欲しくないようだ。もう少し切り刻んでからにするつもりだったが……まあ良い。見せてやろう。お前と俺の覆せない差という奴を」

限定解除。

その言葉は、確かに藍染の耳に届いた。

そしてそれが同時に、水の壁に阻まれた向こう側に居る死神達に

聞こえたのかは定かではないが、しかし結果は進む霊圧の為にさらに強く張られる。

隊長格から四倍になっていた霊圧が、限定解除されたことでさらに五倍がけして、結局は二十倍に。

虚化をしていない、今の一士の霊圧でさえも、隊長格の二十倍だ。絶望、という言葉ですら一士と藍染の間に広がる差を言い表すことは出来ないでいた。

「限定……解除、だと？」

「俺は霊圧が高いからな。こいつをして、さらに限定霊印を打たないと霊圧を隊長格にまで抑えられないんだよ。理解したか？ 藍染。理解したらもう一本指を置いて行け」

今度は藍染にも見える速度に調節されて刀が振るわれて、そして藍染の右の手の指が小指、薬指と飛ぶ。

斬魄刀を握っていたのは右手だったが、しかし親指ともう一本の指が残っていれば握っていることもできるだろうという一士の判断だった。

そしてその判断は間違っていないかったようで、藍染は痛み顔に顔を歪めながらもどうにか斬魄刀を握って一士を見据えている。

「これから一本ずつ指を斬り落としていくんだから死んでくれるなよ？」

「くっ！！」

「おいこら、何逃げようとしてんだ」

そして勝てないと判断した藍染は、黒腔を開いて虚圏に逃げ込も

うとして、しかし開いたその直後には一士が瞬歩で近づいて藍染の首を鷲掴みにする陽に持ち上げる。

首の骨が折れてしまわないように、そして霊圧によって気絶してしまわないように、かなりの繊細な　一士の基準で行われる。

最早、仕置きというレベルを超えていた。

ただの虐殺が繰り広げられる。

「よほどその左腕、いらないと見える」

ザン、と音を立てて左腕はひじから先が舞う。

未だに首を掴んでいる一士にも当然の様に帰り血が付いて、真っ赤なそれを浴びた。

元々が大柄で顔つきもいかついただけに、返り血を浴びた一士は、まさしく修羅としか呼べないほどの風貌になる。

或いは、死神、というのは本当にそういう存在の事を言うのかもしれなかった。

「ッ……ッ……!!」

「　何だ、威勢は良いな。が、右腕もいらないのか？」

そして渾身の一撃とばかりに、一士が瞬きをした一瞬を狙って藍染は残った右腕で刀を振る。

而してそれは、藍染の予想通りに一士の心臓の位置。

左手で藍染の首を掴んでいるために空いている脇から迫って両断する筈であり、だがそれは脇に当たったままで刃はそれ以上通らなかった。

辛うじて切れたのは、服だけ。

その先の皮膚には傷一つ付けられないどころか、鏡花水月は力に耐えきれずに欠けてしまった。

そして、右腕も飛ぶ。

「!!!!!!!!!!!!!!」

悲鳴にならない悲鳴が上がる。

鮮血が舞って、空中を赤く染め上げる。

そこでようやく、一士の気は晴れて首から手が離された。

何も気まぐれで一士の気が済んだ訳ではない。

それ以上は、斬っても無駄と判断したからだ。

何しろ、藍染は既に気絶していたのだから。

それが尸魂界を騒がせて、十刃どもを従えて、護廷十三隊に勝負を挑んだ男の末路であった。

つまらないものを捨てるようにして一士はその首から手を離して地面に放り投げて、霊子で足場を作るままに空中を歩き、既に虫の息の藍染に背を向けて水の壁に向けて歩き出す。

そして藍染が地面に落ちると一士が水の壁に到達したのは丁度同じ時であり、最後に一士は藍染を一瞥する。

「……この百年間、俺はこれだけの為に現世に隠れていたというのが。がっかりだ藍染。せめて虚化を使うくらいは強いと思っていたのだが……この百年の修行は無意味だったな」

落胆というそれだけを投げかけて、一士は水の壁に自分が通れるだけの穴をあけてその向こう側へと移動する。

そして藍染が最後に見たのは、目で追っていた一士の姿が水の壁に消えると同時に自分のいた空間全てを飲み干さんとばかりに襲い掛かる水だった。

「水密隔壁」

そして死神のいる側へと移動した一土は、彼らに話しかけられるよりも早くにその水の壁に向かって斬魄刀を突く。

霊圧によって作り出される水はどんどんと量を増して、その空間を全て埋め尽くす。

結界によって溢れださないようにしてあるとはいえ、それは一土が全ての水を制御して結界の中に薄い膜を張るようにして外に漏らさないようしているから、結界は本来であれば意味を為さない。

今現在で結界が意味をなしているのは、霊圧によって結界が壊れて仕舞わないように、というそれだけだ。

「 圧縮」

そしてその二文字と一土が口になると、水の壁は刀の先を中心に収束していく。

いや、水の壁ではなく、最早空間を埋め尽くす水が刀の先に圧縮されていった。

四角い空間が丸くなり、そしてそれがどんどん小さくなって、最終的にはピンポン玉ほどの大きさになって刀の先に収束する。

全ての水が天水に飲み干されて、そして最後に残ったのは黒い玉。崩玉だった。

「……藍染は倒したのかの？」

「総隊長……。いえ、倒したというよりは消したというのが正確かと」

「ふむ、そうか。それならば……早いところその霊圧をどうにかして欲しいのお。儂は年を取って耐えるのがつらいからの」

「ああ、すみません」

唯一、総隊長だけが何とか一士に近づくことが出来てそんな話になる。

年を取って霊圧に耐えるのが辛いなどともないことだ。

ただ一人、総隊長だけがその霊圧の中で近づくことが出来たという話なのだから。

そして一士は限定霊印を再び刻んで、そしてリストバンドをはめ直して隊長格の霊圧に戻す。

そして水の薄い膜で包んだ崩玉は総隊長に渡す。

「総隊長、中央四十六室が全滅したという事は聞いています。その上で貴方が今の最高決定権を持つでしょうからお願いがあります」

「ふむ、何かの？」

「俺が瀨霊廷に戻るか、烈と天雫が現世に残るのを許可して下さい」

「……新たな中央四十六室が決まらんと何も言えぬが……恐らく大丈夫であろう。たとえ断られたところで今の護廷十三隊ではお主を止めることのできる者がおらんしのオ」

顎鬚を摩りながらさながら年老いている者の様に総隊長は笑いながら言う。

そしてそんな総隊長にとりあえず頭を下げてから、一士は烈と天雫のもとへ向かう。

戦いは終結し、そしてこれから始まるのは手に入れられなかったあわただしい日常だ。

烈と、天雫と、三人で暮らしている情景を思い浮かべながら一士は笑う。

……返り血を浴びた一士が笑っている様は化け物にしか見えな

ったというのは何処かの誰かの証言である。

かくして尸魂界最大の事件は終幕を迎える。

反逆の徒、市丸ギンはどうやら最初から藍染を殺すためだけに動いていたらしいという事が後日に分かって、しかしそれでも罪が削がれる訳ではないので現世に永久追放を。

ヴァイザードの面々は死神は相変わらず嫌いだから、という事で現世でのんびりと暮すことに。

黒崎一護を中心とした死神代行組は現世での生活に戻り。

そして卯ノ花一土は、山本元柳斎重國より護廷十三隊総隊長の座を引き継ぐ。

それによって山本元柳斎重國は真央霊術院の院長に。

かつて勇者と呼ばれた老年は、今は縁側で茶を啜る日々を送っている。

卯ノ花天霰は空いた五番隊の隊長に、阿散井恋次は三番隊の隊長に、斑目一角は九番隊の隊長にそれぞれ就任。

そして一土と烈は

### 第三十二話 卯ノ花一士（後書き）

綺麗に終われなかった……。

まあ、とりあえず一旦は完結という事で。

お後が宜しくないのは誠に申し訳ない限り。

どうも作者の平凡な頭ではこれしかできなかった。

やはりクライマックスは藍染との戦いではなく、オリキャラとの戦いだったという。

どこで道を踏み外したというのか・・・

いや、原因は分かり切っているが。

所で一旦完結した訳だが、この後の予告していた（？）オリストとかはまだ未定。

いい加減に放っておいたりリリカルやり始めたいし、でも一士と烈のイチャイチャも書きたいし。

さて、どうしたものかと考える日々。

とりあえず今のところは書きたかったリリカルやるうかと考えているけど。

まあ、出来たらこっちも気が向き次第、ポチポチとポツポツした話（？）を更新しようかと。

では、今まで読んでくれた方に感謝を。

あと、感想書いてくれた人は返せなくてごめんなさい。

多すぎて返すのだったるくなつたので（笑）・・・いや、笑いごとじゃないか。

それでは次が何で、いつか分からないけどまた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0884u/>

---

bleachにオリ主を無理やり入れてみた

2011年7月5日23時36分発行